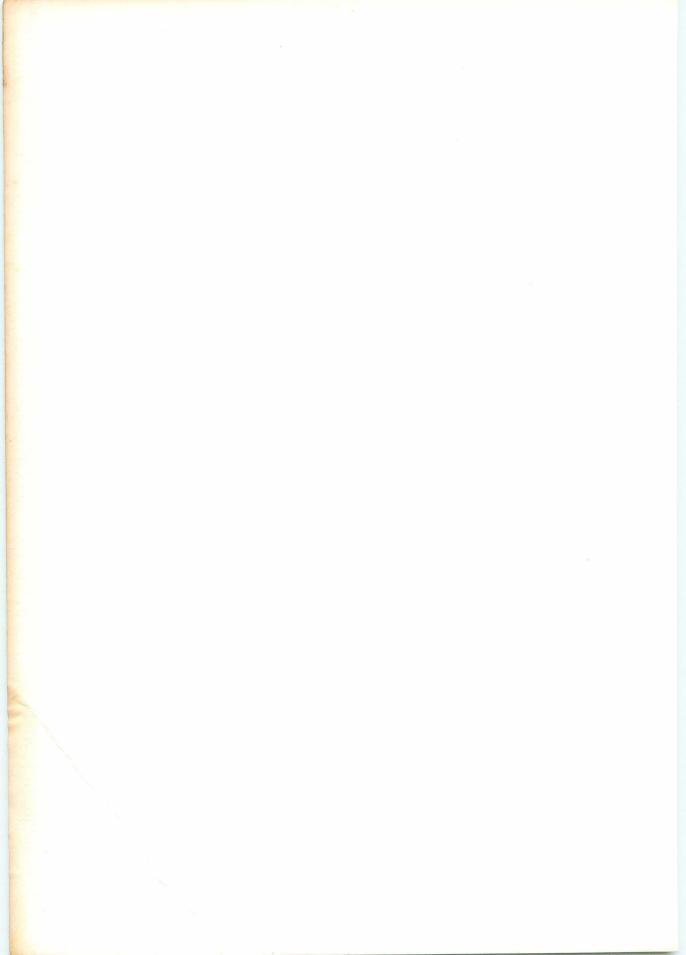
NECパーソナルコンピュータ
PC-9800シリーズ

MS-DOS® 3.3D
ユーザーズガイド

MS-DOS® 3.3D

ユーザーズガイド

ご注意

(1) 本書の内容の一部または全部を、無断で他に転載することは禁止されています。
(2) 本書の内容は、将来予告なしに変更することがあります。
(3) 本書の内容は、万全を期して作成しております。万一、ご不審な点や誤り、記載もれなどお気づきの点がありましたら、ご連絡ください。
(4) 運用した結果の影響については、(3)項にかかわらず責任を負いかねますのでご了承ください。

Microsoftは米国マイクロソフト社の登録商標です。
MS-DOS は米国マイクロソフト社の登録商標です。
Intel（インテル）は米国インテル社の商標です。
80286、386、386SX、486、486SX は米国インテル社の商標です。

輸出する際の注意事項

本製品（ソフトウェア）は日本国内仕様であり、外国の規格等には準拠しておりません。
本製品を日本国外で使用された場合、当社は一切責任を負いかねます。また、当社は本製品に関して、海外での保守サービスおよび技術サポート等は行っておりません。

FT351P

はじめに

本書は、MS-DOS（マイクロソフト・ディスクオペレーティングシステム）の入門ガイドです。

MS-DOSは、ワープロソフト、表計算ソフト、BASICなどのソフトウェアの裏方となって、あなたのコンピュータシステムを全体的にコントロールするソフトウェアです。

本書では、MS-DOSを初めて利用される方のために、MS-DOSの機能の中から頻繁に使う機能や重要な機能を選んで、できるだけ具体的に解説しています。説明の文章だけでは分かり難い事柄も、操作例にならって実際に操作をするうちに自然と身につくでしょう。MS-DOSを初めて使用される方は、まず本書からお読みください。

本書の構成と使い方

本書は、入門編（第1章〜第3章）と応用編（第4章〜第7章）、そして付録で構成されています。

▶入門編

入門編は、初めてMS-DOSを使う方に、ぜひ読んでいただきたい解説です。ここでは、MS-DOSの基礎となる事項が説明されています。

第1章　MS-DOSがどのような働きをするソフトウェアであるか紹介します。また、MS-DOSの起動方法と終了方法を説明しています。

第2章　MS-DOSを使用する際に必要となる基礎知識を説明しています。ここで説明されている用語や事柄は、本書の他のマニュアル、たとえば、『MS-DOSユーザーズリファレンスマニュアル』（別売）などを読まれる際の基礎となるものです。

第3章　MS-DOSを起動したとき、最初に表示される「メニュー」画面での操作方法を説明しています。MS-DOSは、コマンド（コンピュータに対する命令）をキーボードからタイプしながら使用することも、あらかじめ頻繁に使用するコマンドを登録されているメニュー項目を選択することで使用することもできます。

▶応用編

ワープロソフトで書いた文章やBASICで作成したプログラムなどの情報（データ）を、フロッピィディスクに保存したものを「ファイル」と呼びます。また、ディスクに記録されているファイルの記録を「ディレクトリ」と呼びます。

応用編では、MS-DOSのいろいろな機能の中から、フロッピィディスクや固定ディスクに記録したファイルを整理するための操作、ファイルとディレクトリの操作に重点を置いて説明します。また、MS-DOSがどのように働くソフトウェアであるか、その仕組みを少し詳しく説明します。

第4章　コンピュータを操作するうちに、ディスクにはたくさんのファイルが記録されてきます。ここでは、ファイルを整理する方法を解説します。

第5章　本棚の本を分類整理するように、ディレクトリを操作して、ファイルを上手に管理する方法を解説します。

第6章　ここではMS-DOSの動作の仕組みを解説します。少し専門的になりますが、簡単な原理を理解すれば、ずっと応用力が身につくでしょう。またここでは、コマンドを自動的に実行する方法や、MS-DOSを起動時にもっとも使いやすい状態に設定するシステムファイルの役割りなども説明します。

第7章　MS-DOSが標準として提供するスクリーンエディタ〝SEDIT〞の、操作方法の説明です。SEDITを使用すると、矢印キーやファンクションキーなどの簡単な操作で、テキスト（文字）ファイルを作成したり編集したりすることができます。CONFIG.SYSファイルや、AUTOEXEC.BATの編集も簡単に行うことができます。

▶付　録

付録では、次のような情報を提供しています。必要に応じてご利用ください。

付録A　漢字やひらがななどを入力するための、MS-DOSの標準の日本語入力機能の基本的な操作方法を説明しています。

付録B　操作中に表示されるエラーメッセージと、その対策を説明しています。

付録C　MS-DOSのマニュアルで使用される、基礎的な用語を説明しています。

付録D　お買い上げいただいたシステムディスクで提供されている、すべてのMS-DOSコマンドの使用方法の要約です。本書の本文中で扱われていないコマンドや機能についても、要約が掲載されています。

その他のマニュアル

本書の他に、次のようなマニュアルが用意されています。必要に応じてご利用ください。

MS-DOS 3.3D インストールガイド

ソフトウェアをコンピュータで使用できるようにする操作を「インストール」と言います。お買い上げいただいたMS-DOSは、まず、このマニュアルの説明に沿ってインストールしてください。『インストールガイド』では、アプリケーション（ワープロや表計算ソフト）をインストールする方法も説明しています。また、プリンタやマウスなど、本体以外の装置（周辺装置）や、日本語入力機能を利用できるようにする方法も説明されています。

●拡張機能セット（別売）

以下のマニュアルは、別売の『拡張機能セット』で提供されています。

ユーザーズリファレンスマニュアル

『ユーザーズガイド』では、MS-DOSの最も基礎的なコマンドと操作方法を扱っていますが、『ユーザーズリファレンスマニュアル』では、すべてのコマンドに関する詳細な説明と、より高度な操作方法の説明を行っています。MS-DOSの手引きとして、ご利用ください。

日本語入力ガイド

『ユーザーズガイド』でも日本語の入力方法を扱っていますが、MS-DOSの日本語入力機能は、この他にも機能を備えています。『日本語入力ガイド』では、そのような機能を詳細に説明しています。また、辞書ファイルを保守管理するユーティリティ（DICM）や、ユーザーが独自の記号や漢字を作成して利用するためのユーティリティ（USKCGM）も説明しています。

プログラマーズリファレンスマニュアル Vol.1、Vol.2

MS-DOSの内部的な技術情報を、詳細に説明しています。Vol.1では、主に本体機能関係（ファンクションリクエスト）などを扱っています。Vol.2では、周辺装置（デバイスドライバ）関係を扱っています。MS-DOSの内部機能を利用するプログラムを作成される際にご利用ください。

プログラム開発ツールマニュアル

プログラム開発の際に利用する、リンカ（LINK）、シンボリックデバッグユーティリティ（SYMDEB）、ライブラリマネージャ（LIB）、プログラムメインテナ（MAKE）を解説しています。アセンブリ言語などで、プログラムを開発される際にご利用ください。

目　次

入門編

第1章　MS-DOSを使うために

第2章　MS-DOSの基礎知識

第3章　メニューの使い方

応用編

第4章　ファイルを操作する

第5章　ディレクトリを操作する

第6章 MS-DOSの仕組み

第7章 スクリーンエディタ（SEDIT）の使い方

付 録

付録A 簡単な日本語入力

付録B　エラーメッセージと対処方法

付録C　用語集

付録D　MS-DOSコマンド一覧

ここでは、MS-DOSの基礎事項や、他のマニュアルでも使われる用語などを説明しています。初めてMS-DOSを使用される方に、ぜひ読んでいただきたい内容です。

入門編

■本編の内容■

第1章 MS-DOSを使うために

この章では、MS-DOSを使う前の準備として、MS-DOSの紹介と動かし方についてお話します。これから使うMS-DOSとは一体何をするものなのか、動かすためにはまずどうしたらよいのかを学んでください。

1.1 MS-DOSの役割を知ろう

MS-DOSは、「エムエスドス」と読みます。これから、あなたのパソコンとMS-DOSの関係について簡単にご紹介しましょう。

▶ハードウェアとソフトウェア

みなさんが「パソコン」という言葉からイメージするものは、オフィスなどの机の上に置いてある箱状の機械でしょうか。膝の上や手のひらの上に乗る小さな機械でしょうか。パソコンの種類も増えてきました。同時に、ディスプレイ装置やプリンタなどはもちろんのこと、ディスク装置やマウスなどの周辺装置の種類も増えてきました。パソコンをイメージしたときに、これらの周辺装置のセットを想像した方も多いと思います。コンピュータの世界では、これらの機械のことをすべて「ハードウェア」（略してハード）と呼びます。

ハードウェアは、それだけでは何もすることができません。ハードウェアを操作するプログラム、すなわち「ソフトウェア」（略してソフト）が必要です。コンピュータは、ハードウェアとソフトウェアの両方が揃って一人前というわけです。

▶OS（オペレーティングシステム）とアプリケーションソフト

ソフトウェアには、いろいろな種類のものがありますが、大きく分けると、OS（オペレーティングシステム）とアプリケーションソフトの2つに分けられます。本書で説明するMS-DOSは、このOSの一種です。

アプリケーションソフトは私達になじみ深いソフトウェアで、ワープロソフト、表計算ソフト、ゲームソフトなどは、みなアプリケーションソフトです。私達は、これらのソフトで、目的に応じた具体的な仕事を行います。パソコンで文

書を書く、パソコンで計算をする、パソコンのゲームで遊ぶなど、私達が「パソコンで○○をする」というときの「○○」の部分で実際に働くソフトウェアが、アプリケーションソフトです。

一方、OSには、アプリケーションソフトのように具体的な仕事はありません。OSの主な仕事は、ハードウェアを管理して、アプリケーションソフトが仕事をするために必要な裏方作業をすることです。したがって、その仕事ぶりは私達の目につきにくいのですが、OSはなくてはならない、パソコンを使うための基本となるソフトです。そのために、OSは「基本ソフト」と呼ばれることもあります。基本ソフトであるOSが働いているからこそ、私達はパソコンをさまざまな用途に使うことができるのです。

▶ MS-DOSの働き

「MS-DOS」は、米国のマイクロソフト社が開発したOSで、「MicroSoft Disk Operating System」を略して付けられた名前です。これは、「ディスク装置を接続したコンピュータシステム用のマイクロソフト社が開発したOS」という意味になっています。

現在、MS-DOSは、世界中のパソコンのOSとして広く使われています。まさにMS-DOSはパソコン用OSの主流です。

私達がコンピュータを使っているときは、アプリケーションソフトだけでなく、OSであるMS-DOSも使っているのでしたね。アプリケーションソフトは、ハードウェアを管理するMS-DOSに命令を送って、いろいろな働きをさせます。その上でアプリケーションソフト自身の得意な仕事をしています。私達とハードウェアの間には、MS-DOSとアプリケーションソフトという2種類のソフトウェアがあって、それぞれ得意な仕事をこなしているというわけです。

では、MS-DOSはいつも裏方かというと、決してそんなことはありません。私達が、直接MS-DOSに命令を出して、特定の仕事をさせることもできます。MS-DOSの仕事はパソコンを使う上で非常に基本的なことが多いので、直接MS-DOSを操作すると、基本的な作業（たとえばフロッピィディスクの内容の複写など）を効率良く行うことができるようになります。

MS-DOSはパソコンの基本ソフトです。何事も基本を押さえれば、応用はたやすいものです。あなたにとってMS-DOSがなじみ深いソフトになったら、そのときはパソコンもアプリケーションソフトも、今よりずっと親しい道具になっているでしょう。

1.2　MS-DOSの起動と終了

ソフトウェアを使える状態にすることを「起動する」とか「立ち上げる」などといいます。ここではMS-DOSの起動のしかたと終了のしかたについて説明します。

フロッピィディスクでシステムを運用する場合と、固定ディスクで運用する場合に分けて説明します。

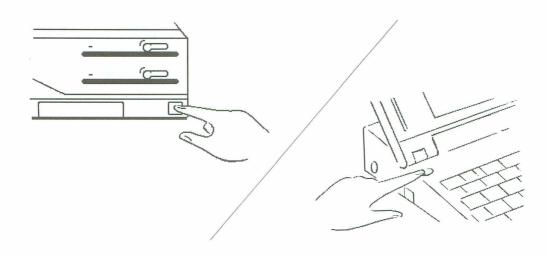
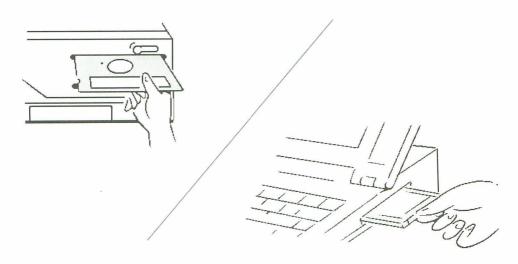
▶フロッピィディスクでの起動と終了

ここでは、フロッピィディスクでMS-DOSを運用する場合の、起動方法と終了方法を説明します。起動してすぐに終了してしまうのは少々残念ですが、正しい起動方法と終了方法を会得していれば、いつでもMS-DOSの勉強を再開できます。

ここでの説明は、フロッピィディスクに、MS-DOSの運用ディスク（システムディスク）が作成されていることを前提に行っています。運用ディスクの作成を行っていない方は、まず『MS-DOS 3.3D インストールガイド』をお読みください。

●MS-DOSの起動方法

フロッピィディスク（運用ディスク）でMS-DOSを起動するには、次のようにします。

1 まず、コンピュータシステムの電源をONにします。周辺装置とコンピュータ本体の電源が分かれている場合には、周辺装置の電源を先にONにしましょう。

2 MS-DOSの「運用ディスク＃1」を、ディスクドライブ1にセットします。フロッピィディスクは、奥までていねいに差し込みます。

3 本体のリセットスイッチを押します。

4 数秒すると、MS-DOSが動き始め、次のような画面が表示されます。

```
NEC PC-9800 ｼﾘｰｽﾞ ﾊﾟｰｿﾅﾙ ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ

ﾏｲｸﾛｿﾌﾄ MS-DOS ﾊﾞｰｼﾞｮﾝ 3.30D
Copyright (C) 1981,1991 Microsoft Corp. / NEC Corporation
```

5 いくつかのメッセージが表示された後、自動的にMS-DOSのメニュー画面になります。

この状態は、MS-DOSは起動していますが、すでにメニュー（MENU）コマンドも実行されている状態なので、いったんMENUコマンドを終了します。メニュー画面での操作方法は、第3章で説明されています。

6 メニューが表示されている状態で、キーボードの[STOP]キーを押して、MENUコマンドを終了します。

A>

メニュー画面で、[↑][↓]キーで「メニューの終了」という項目を反転表示させ、[⏎]キーを押しても、MENUコマンドを終了することができます。

参照：プロンプト➡「2.1　コマンドの基礎知識」

画面の「A〉」という表示はMS-DOSの「プロンプト」と呼ばれ、MS-DOSが命令を待っている状態を表しています。これが、MS-DOSだけが起動している状態です。続いて、MS-DOSの終了方法を説明します。

●MS-DOSの終了方法

MS-DOSを終了する手順は、次のとおりです。

7 画面にMS-DOSのプロンプトが表示されていることを確かめます。

```
A>
```

画面にMS-DOSのプロンプトが表示されていない場合は、何かプログラムを実行している最中です。実行が終わるまでしばらく待つか、そのプログラムの終了の手続きを行ってください。終了の手続きは、プログラムによって異なりますので、そのプログラムの解説をご覧ください。

8 ディスクドライブに入っているフロッピィディスクをすべて取り出します。

9 コンピュータシステムの電源をOFFにします。周辺装置とコンピュータ本体の電源が分かれている場合には、本体の電源を先にOFFにしましょう。

以上でMS-DOSが終了しました。取り出したフロッピィディスクは、大切に保管しておきましょう。

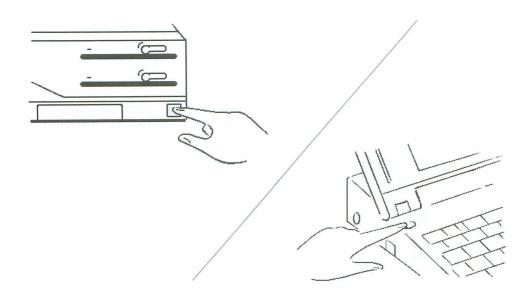
▶固定ディスクでの起動と終了

ここでは、固定ディスクでMS-DOSを運用する場合の、起動方法と終了方法を説明します。起動してすぐに終了してしまうのは少々残念ですが、正しい起動方法と終了方法を会得していれば、いつでもMS-DOSの勉強を再開できます。

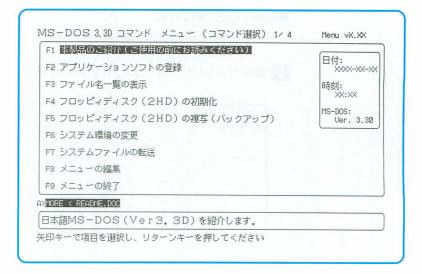
ここでの説明は、固定ディスクが、MS-DOSの運用ディスク（システムディスク）として作成されていることを前提に行っています。運用ディスクの作成を行っていない方は、まず『MS-DOS 3.3D インストールガイド』をお読みください。

●MS-DOSの起動方法

固定ディスクからMS-DOSを起動するには、次のようにします。

1 コンピュータシステムの電源をONにします。周辺装置とコンピュータ本体の電源が分かれている場合には、周辺装置の電源を先にONにしましょう。

2 しばらくすると、MS-DOSが動き始め、次のような画面が表示されます。

```
NEC PC-9800 ｼﾘｰｽﾞ ﾊﾟｰｿﾅﾙ ｺﾝﾋﾟｭｰﾀ

ﾏｲｸﾛｿﾌﾄ MS-DOS ﾊﾞｰｼﾞｮﾝ 3.30D
Copyright (C) 1981,1991 Microsoft Corp. / NEC Corporation
```

3 いくつかのメッセージが表示された後、自動的にMS-DOSのメニュー画面になります。

この状態は、MS-DOSは起動していますが、すでにメニュー（MENU）コマンドも実行されている状態なので、いったんMENUコマンドを終了します。メニュー画面での操作方法は、第3章で説明されています。

4 メニューが表示されている状態で、キーボードの［STOP］キーを押して、MENUコマンドを終了します。

メニュー画面で、［↑］［↓］キーで「メニューの終了」という項目を反転表示させ、［⏎］キーを押しても、MENUコマンドを終了することができます。

参照：プロンプト➡「2.1　コマンドの基礎知識」

画面の「A〉」という表示はMS-DOSの「プロンプト」と呼ばれ、MS-DOSが命令を待っている状態を表しています。これが、MS-DOSだけが起動している状態です。

続いて、MS-DOSの終了方法を説明します。

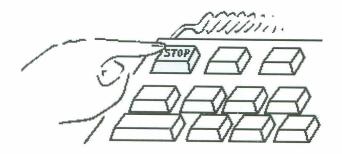
●MS-DOSの終了方法

MS-DOSを終了するには、次のようにします。

5 画面にMS-DOSのプロンプトが表示されていることを確かめます。

画面にMS-DOSのプロンプトが表示されていない場合は、何かプログラムを実行している最中です。実行が終わるまでしばらく待つか、そのプログラムの終了の手続きを行ってください。終了の手続きは、プログラムによって異なりますので、そのプログラムの解説をご覧ください。

6 ディスクドライブに入っているフロッピィディスクをすべて取り出します。

7 キーボードのSTOPキーを押します。

固定ディスクを使っている場合は、電源を切る前に必ずSTOPキーを押しましょう。使用している固定ディスクが「オートリトラクト（自動退避機構）」と呼ばれる機能を備えている場合は、STOPキーを押さずに電源を切ってもかまいません。詳しくは固定ディスクのマニュアルを参照してください。

8 コンピュータシステムの電源をOFFにします。周辺装置とコンピュータ本体の電源が分かれている場合には、本体の電源を先にOFFにしましょう。

以上でMS-DOSが終了しました。

第2章 MS-DOSの基礎知識

この章では、MS-DOSを使うために知っておかなければならない、いくつかの基礎的な用語を説明します。実際にMS-DOSを操作しながら、「コマンド」「ファイル」「ドライブ」「ディスク」などの、MS-DOSのキーワードを覚えて行きましょう。

2.1 コマンドの基礎知識

MS-DOSに仕事をさせるときは、私達が目的に応じた命令を与えます。この命令が「コマンド」です。そして、MS-DOSに命令を与えることを、「コマンドを入力する」とか「コマンドを実行する」と言います。

▶簡単なコマンドを使ってみましょう

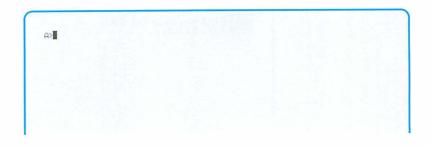
それではさっそくコマンドを使ってみましょう。

参照：起動の方法→「1.2　MS-DOSの起動と終了」

1 MS-DOSを起動します。自動的にメニューが起動されます。

```
MS-DOS 3.3D コマンド　メニュー（コマンド選択）1/ 4          Menu vX.XX
F1 本製品のご紹介（ご使用の前にお読みください）           日付:
F2 アプリケーションソフトの登録                              XXXX-XX-XX
F3 ファイル名一覧の表示                                    時刻:
F4 フロッピィディスク（2HD）の初期化                          XX:XX
F5 フロッピィディスク（2HD）の複写（バックアップ）          MS-DOS:
F6 システム環境の変更                                        Ver. 3.30
F7 システムファイルの転送
F8 メニューの編集
F9 メニューの終了
A>MORE < README.DOC
日本語MS-DOS（Ver3．3D）を紹介します．
矢印キーで項目を選択し、リターンキーを押してください
```

参照：プロンプト→「1.2 MS-DOSの起動と終了」

2 STOP キーを押して、MS-DOSのコマンドモード（A〉が表示されている状態）にします。この「A〉」をプロンプト、すぐ隣で点滅している四角形を「カーソル」と呼びます。

MS-DOSのコマンドはたくさん用意されていますが、ここでは日付を設定する〝DATE（デート）〟コマンドを使ってみることにします。このコマンドは、コンピュータの内蔵時計に、現在の日付を設定したり、設定を確かめる働きをします。

3 それでは、DATEコマンドを使ってみましょう。「A〉」という表示に続けてキーボードから「DATE」とタイプしてください。コマンドは、大文字でタイプしても小文字でタイプしてもかまいません。ただし、必ず半角文字を使ってください。

文字の入力を間違えたら、BS キーで間違えた文字まで戻り、正しい文字をタイプし直します。

半角文字→MS-DOSを起動した状態で文字を入力すると、半角文字になります。MS-DOSのコマンド入力では、この半角文字を使います。「日本語入力モード」（付録Aを参照）にしてから入力する全角文字は使えません。

第2章

4 綴りを確かめて⏎キーを押します。⏎キーを押すと、タイプした命令がMS-DOSに伝えられ、DATEコマンドが実行されます。

```
A>date
現在の日付は 1991-09-10 (火) です.
日付を入力してください:
```

「コマンドまたはメッセージが違います」と表示されたら→コマンドが正しく入力されませんでした。もう一度、綴りを確認して「DATE⏎」と入力してください。

5 表示された日付が正しかったら、そのまま⏎キーを押してください。日付が間違っていたら正しい年月日を、マイナス記号（－）またはスラッシュ（／）で区切ってタイプして⏎キーを押します。たとえば、1991年９月25日なら、次のように入力します。
どちらの場合も、入力が終わると、再びA〉が表示されてコマンドモードに戻ります。

```
A>date
現在の日付は 1991-09-10 (火) です.
日付を入力してください: 1991-9-25

A>
```

▶プロンプトとコマンド

コマンドは、MS-DOSのプロンプト（A〉）に続けて入力します。このプロンプトとは英語の〝PROMPT〃、つまり「促す（うながす）」という意味の言葉で、MS-DOSが私達にコマンドの入力を促している、あるいは入力を待っていることを示しています。プロンプトとコマンドは切っても切れない仲。画面にプロンプトが表示されているということは、MS-DOSからいうとコマンド入力を待っている状態、逆に私達からいうとコマンドが入力できる状態です。

先ほど使ってみたDATEコマンドは、日付の表示や設定を行うための命令でした。このように、コマンドはその内容を表す英語を略したものになっています。英語とはいっても、すべて短い言葉（８文字以内）ですから、簡単に覚えられるでしょう。

MS-DOSには、全部で50個ほどのコマンドが用意されていますが、もちろんすべてのコマンドを覚える必要はありません。本書ではよく利用される基本的なコマンドについてだけ説明します。全コマンドの一覧は、巻末に付いていますが、各コマンドについての詳しい解説は『ユーザーズリファレンスマニュアル』をご覧ください。

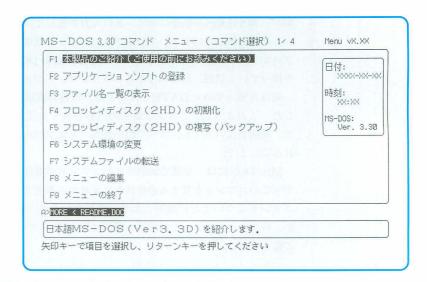
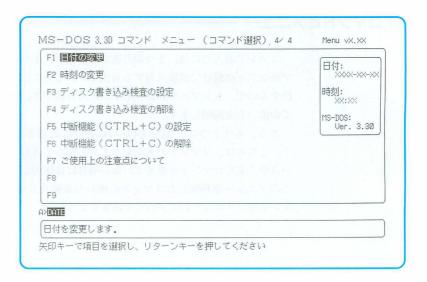
プロンプトに表示されているアルファベットは、MS-DOSが区別しているディスクドライブのドライブ名（「2.3　ドライブの基礎知識」参照）を表しています。MS-DOSを起動したときは、起動されたディスクドライブを示しているので、大抵の場合〝A〉〃となっています。

▶コマンドとメニュー

コマンドの入力には、２つの方法があります。１つは、先ほど行ったように、プロンプトに続けて直接入力する方法です。こちらは、自分が直接コマンドを操作するので、シンプルでわかりやすい入力方法です。本書では主にこちらの方法での使い方を説明します。

さて、もう１つは、MS-DOSの起動時に表示されるメニューを使う方法です。こちらは、コマンドの名前をタイプしなくて済むので、タイプに慣れていない方や、まだコマンドを覚えていない場合には便利な入力方法です。ここでは、このメニューを利用したコマンドの使い方を紹介します。前に使ったDATEコマンドを、メニューから実行してみましょう。

参照：起動の方法→「1.2　MS-DOSの起動と終了」

1 MS-DOSを起動します。すでにMS-DOSを起動している人は、「A〉」に続けて"MENU"とタイプして⏎キーを押してください。メニュー画面（コマンド選択画面）が表示されます。

2 メニューにはMS-DOSのコマンドがあらかじめ登録されているので、目的のコマンドを選択すれば実行できます。ここにはDATEコマンドのメニューが見あたらないので、ROLL UPキーを3回押して、「日付の変更」というメニュー項目のある画面を表示させてください。

3 [↓][↑]キーで「日付の変更」というメニュー項目を反転表示させます。画面の下から3行目にプロンプト（A〉）とDATEコマンドが表示されているのを確認して、[⏎]キーを押してください。

```
A>DATE
現在の日付は 1991-09-25（水）です.
日付を入力してください:
```

[f･1]キーを押すと、メニュー項目を反転表示させなくても、すぐにDATEコマンドが実行できます。

4 DATEコマンドが実行されました。[⏎]キーを押すと、DATEコマンドが終了し、「コマンド選択に戻ります。準備ができたら、どれかキーを押してください」というメッセージが表示されます。

```
A>DATE
現在の日付は 1991-09-25（水）です.
日付を入力してください:

コマンド選択に戻ります
準備ができたら、どれかキーを押してください
```

5 メッセージにしたがって任意のキー（たとえば[⏎]キー）を押します。再びメニュー画面が表示されます。MS-DOSのコマンドモード（A〉が表示されている状態）に戻りたいときは、[STOP]キーを押してください。

このようにすると、メニュー画面からコマンドを選択するだけで実行することもできます。メニュー画面には、レストランのメニューのように、選択できる項目が表示されるので、みなさんはこの中から目的の項目を選べばよいのです。

項目の選択には、項目の左端に表示されているファンクションキー、または[↑][↓][←][→]の矢印キーと[⏎]キーを使います。また、メニュー画面は4画面用意されています。目的の項目が画面に表示されていない場合は、[ROLL UP][ROLL DOWN]キーでメニュー画面をめくって捜してみてください。

なお、メニュー画面に表示される項目の種類や順番などは、みなさんが自由に変更することができます。詳しくは『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

コマンドの種類

参照：各内部コマンドの詳細→「付録D MS-DOSコマンド一覧」『ユーザーズリファレンスマニュアル』

MS-DOSのコマンドは、大きく分けて「内部コマンド」と「外部コマンド」に分けられます。ここで、簡単に2種類のコマンドについて説明しましょう。

●内部コマンド

内部コマンドは、MS-DOSが起動していれば、いつでも使うことができるコマンドです。

内部コマンドには次のようなものがあります。いずれも、プロンプトが表示されているときにコマンド名を入力すれば、即座に実行されます。

BREAK	CHDIR(CD)	CLS
COPY	CTTY	DATE
DEL	DIR	ECHO
EXIT	FOR	GOTO
IF	MKDIR(MD)	PATH
PAUSE	PROMPT	REM
RENAME(REN)	RMDIR(RD)	SET
SHIFT	TIME	TYPE
VER	VERIFY	VOL

これらのコマンドは、1つ1つファイルとして独立していないので、システムディスクのファイル一覧を見ても、ファイル名は表示されません。

●外部コマンド

参照：ファイル→「2.2　ファイルの基礎知識」

外部コマンドは、「ファイル」としてディスクに保存されています。たとえば、DIRコマンドを実行して、システムディスクのファイル一覧を表示させたときに、〝.COM″または〝.EXE″という拡張子のついたファイルは、外部コマンドのファイルです。

外部コマンドを実行するときには、そのコマンドのファイルが入っているディスクを使用しているドライブにセットする必要があります。外部コマンドのファイルが入っているディスクをセットしないで外部コマンドを実行すると、

コマンドまたはファイル名が違います。

または、

ドライブの準備ができていません。〈読取り中〉〈ドライブX:〉
中止〈A〉，もう一度〈R〉，無視〈I〉？ ■

というメッセージが表示されます。いずれの場合も、まず外部コマンドの入ったディスクをセットします。そして、最初のメッセージが表示された場合は、再度外部コマンドの名前を入力してください。2番目のメッセージが表示された場合は、R キー（RETRYの意味）を押してください。

参照：エラーメッセージ→「付録B　エラーメッセージと対処方法」

2.2 ファイルの基礎知識

MS-DOSでは、すべてのプログラムやデータを「ファイル」という形で扱います。ここでは、このファイルを紹介しましょう。MS-DOSのコマンドを使って、実際にファイルを操作しながら説明しますので、少しずつファイルと親しくなってください。

▶ファイルとは

私たちは、普通「ファイル」という言葉から、書類や手紙などを整理する文房具をイメージします。書類を綴じるもの、名刺を整理するもの、新聞記事の切抜きを貼るスクラップブックなど、形はさまざまですが、どれも関連する情報を整理して保存しておく入れ物です。

同じように、MS-DOSでも、データやプログラムなどの情報を整理する入れ物として「ファイル」を使います。こちらのファイルも、文書やプログラムなど、関連のある情報ごとに個々のものとして整理されます。たとえば、ワープロで作成した1つの文書が、1つのファイルとして保存されるのです。すなわち、日常使っているファイルも、MS-DOSで使うファイルも、「関連するデータをまとめて保存する入れ物」という役割り自体はまったく同じと考えてよいでしょう。

ただし、両者は保存される媒体が異なるので、扱いはかなり異なります。事務処理用のファイルはインクなどによって紙に記録されますが、MS-DOSのファイルは磁気信号によってディスク（フロッピィディスクや固定ディスクなど）に記録されます。したがって、ディスクを眺めてもファイルを見ることはできませし、もちろん手にとることもできません。MS-DOSのファイル操作は、当然MS-DOSで行うことになります。それでは、次節から実際にMS-DOSのコマンドを使って、ファイルを操作してみましょう。

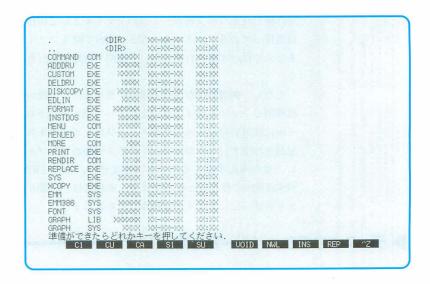
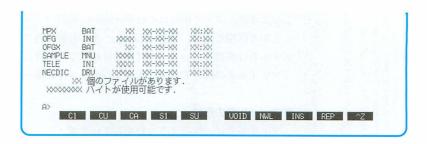
▶ディスク中のファイル一覧を見てみよう

まず、フロッピィディスクや固定ディスクの中にどのようなファイルが入っているのか見てみましょう。ディスク中のファイルの一覧表を表示するコマンドは、〝DIR（ディレクトリ）〟です。例として、MS-DOSの起動に使ったディスク中のファイル一覧を見てみます。

1 MS-DOSを起動し、メニュー画面が表示されたら[STOP]キーを押して、プロンプトA〉を表示させせます。A〉に続けて〝DIR　/P″とタイプして、[⏎]キーを押してください。

```
A>DIR /P
```

ここで入力したDIRコマンドに付いている〝/P″は、「コマンドスイッチ」と呼ばれるもので、コマンドの実行結果を1画面分ずつ表示させる働きをします。試しに〝/P″を取って、ただ〝DIR[⏎]″と入力してみてください。実行結果が一気に表示されて、画面上を流れていきます。

2 ドライブAのディスクに収められているファイルのさまざまな情報が、一画面分表示されます。確認したら、最下行の「準備ができたらどれかキーを押してください」というメッセージにしたがって、任意のキー（[⏎]キーなど）を押してください。続きの画面が表示されます。

3 すべての画面が表示されるまで、同じ操作を繰り返してください。ファイル一覧の表示が終わると、プロンプトA〉が表示されます。

ここで、DIRコマンドで表示される内容について説明しておきましょう。

ファイル名

各行の先頭の2組の文字列が、ディスクに記録されているファイルの名前です。外部コマンドの名前、アプリケーションソフトの名前、ワープロソフトで書いた文書を保存したときの名前などが表示されます。

ファイルの大きさ

半角文字の数に換算した、ファイルの大きさです。

ファイルの作成年月日

そのファイルをディスクに最初に記録した日付、または最後に修正した日付です。

ファイルの作成時刻

そのファイルをディスクに最初に記録した時刻、または最後に修正した時刻です。

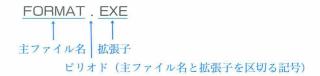
第2章

▶ファイル名の付けかた

ファイルの一覧表示では、ファイルに付けられている名前が表示されました。このように、ファイルにはそれぞれ固有の名前（ファイル名）を付けて、他のファイルと区別します。MS-DOSは、この名前で各ファイルを識別するので、ファイル名は重複しないように付けなければなりません。

ファイル名の付け方には、次の3つのルールがあります。

●ファイル名の形式

ファイル名は、次のような形をしています。

ファイル名は、「主ファイル名」と「拡張子」の2つの部分からなります。

主ファイル名には、そのファイルの見出しになるような名前を、半角文字8文字以内で付けます。

拡張子は、付けても付けなくてもかまいませんが、付ける場合には、必ず主ファイル名との間をピリオド（.）で区切ります。拡張子を付ける場合には、そのファイルの性質などを表すような名前を、半角文字3文字以内で付けましょう。

●ファイル名に使用できる文字と使用できない文字

ファイル名には、アルファベットも数字もひらがなもカタカナも、そして漢字も使うことができます。ただし、次の文字は使うことができません。

.　,　/　*　"　:　;　〈　〉　+　=　¦　半角文字の空白

ファイル名に半角文字のアルファベットの小文字を使っても、MS-DOSはすべてこれを大文字に変換して処理します。ですから、ファイル名を指定するとき、タイプする文字は大文字でも小文字でもかまいません。たとえば、次のファイル名はすべて同じ「PROGRAM.COM」となります。

（例）　program.com
　　　ProgRam.Com
　　　PROGRAM.COM

また、ファイル名に全角文字（漢字やひらがななど）を用いた場合、その1文字は半角文字の2文字分に相当します。たとえば、主ファイル名をすべて全角文字にした場合は、4文字までしか使えません。

（例）　お知らせ.DOC
　　　　企画書3.TXT

●使用できないファイル名

ファイル名は基本的に自由に付けて構いませんが、次に挙げるファイル名は使ってはいけません。これらのファイル名は、MS-DOSが特別な意味で使うファイル名です。

AUX　AUX1　AUX2　CON　PRN　NUL　CLOCK

ファイルの種類と拡張子

ファイルの種類をその働きによって分けると、次の3種類になります。

●実行可能ファイル

プログラムなどの、実行することができるファイルです。MS-DOSのシステムディスクには、さまざまな実行可能ファイル（外部コマンド）が収められています。また、ワープロや表計算などのアプリケーションソフトのプログラムも、実行可能ファイルです。

●データファイル

ワープロで作成した文書ファイルや、表計算ソフト作成したデータなど、実行することのできないデータが収められたファイルです。

●システムファイル

システムファイルは、パソコン本体やプリンタなどの周辺装置を制御するなど、MS-DOS自身の動作に必要となるファイルです。主にMS-DOSの起動時に必要となります。

ファイル名に付ける拡張子は、ファイルの種類を表します。MS-DOSでは、拡張子を見ればファイルの性質がわかる、というぐらいファイルと拡張子は対応しています。

次の表は、一般的に使用されている拡張子とファイルの性質をまとめたものです。自分で作ったファイルにファイル名を付ける場合は、表を参考にして、その内容や目的を表わすわかりやすい名前を付けるようにしましょう。

拡張子	ファイルの種類
.COM	実行可能ファイル
.EXE	実行可能ファイル
.BAT	実行可能ファイル（バッチファイル）
.SYS	システムファイル
.DAT	データファイル
.TXT	データファイル（特に文書ファイル）
.DOC	データファイル（特に文書ファイル）
.BAK	バックアップファイル

参照：バッチファイル
→「6.3　バッチ処理のしくみ」

実行可能ファイルの拡張子は、〝.COM〞〝.EXE〞〝.BAT〞でなければなりませんが、他の性質のファイルの拡張子は慣習的なもので、決められているわけではありません。

2.3 ドライブの基礎知識

フロッピィディスクや固定ディスクなどのディスク装置を指定するために、MS-DOSでは「ドライブ名」という言葉を使います。ここでは、ドライブを操作する方法について説明します。

▶ドライブの指定方法

コンピュータには、フロッピィディスク、固定ディスク、RAMディスクなど、さまざまなディスク装置が用意されています。こういったたくさんのディスク装置を、MS-DOSでは独自にドライブとして管理します。ドライブには、A、B、Cといったように、それぞれアルファベット1文字の名前が付けられています。

たとえば、2台のフロッピィディスク装置だけを使用するシステムでは、1番のディスク装置が「ドライブA」に、2番のディスク装置が「ドライブB」になります。

固定ディスクを使用する場合は、ドライブ名を変更できるので、必ずしもこのとおりになっていない場合があります。詳しくは次節を参照してください。

各ドライブを指定するには、アルファベットとコロン（：）を組み合わせて、〝A：〞〝B：〞〝C：〞のように行います。

たとえば、ドライブBのディスクのファイル一覧を表示するには、次のように入力します。

```
A〉DIR　B:⏎
```

ファイルを指定する場合にも、ファイル名にドライブ名を付ければ、どのディスクに入っているファイルでも指定できます。たとえば、「ドライブBのLETTER.TXT」という名前のファイルの内容を画面表示させるには、次のように入力します。

なお、ドライブ名とファイル名の間には、空白を入れないように続けて入力してください。

第2章

```
A〉TYPE　B:LETTER.TXT⏎
```

TYPEコマンド→ファイルの内容を画面に表示するMS-DOSコマンドです。「4.2　ファイルの内容を表示する」を参照してください。

参照：外部コマンド→「2.1　コマンドの基礎知識」

また、外部コマンドを実行する場合にも、ドライブを指定して実行することができます。外部コマンドは、そのファイルが入っているディスクが、使用しているドライブにセットされていないと実行できませんが、コマンド名の前にそのディスクのドライブ名を付ければ、どのディスクに入っているコマンドでも実行することができます。たとえば、ドライブBに入っている外部コマンドCHKDSK（チェックディスク）を実行するには、次のように入力します。

```
A〉B:CHKDSK⏎
```

CHKDSKコマンド→ディスクの状態を調べて、何個のファイルが記録されているか、どの程度ディスクに空きがあるかなどを画面に表示するコマンドです。「付録D　MS-DOSコマンド一覧」を参照してください。

▶カレントドライブとプロンプト

MS-DOSがそのとき使用しているドライブを「カレントドライブ」と呼びます。カレントドライブは、画面に表示されているプロンプトに示されています。プロンプトが"A〉"の場合は、カレントドライブがドライブAであることを意味しています。

つまり、プロンプトはMS-DOSコマンドを入力できる状態であることを示すとともに、カレントドライブも示しているのです。

（例）　A〉　カレントドライブはドライブA
　　　　B〉　カレントドライブはドライブB

ドライブ指定の際、カレントドライブの名前は省略することができます。たとえば、カレントドライブがドライブAのとき（プロンプトはA〉）、ドライブAのファイル一覧を見るには"DIR"と入力するだけで済みます。これは実際には"DIR A:"を省略した形なのです。このように、ドライブの指定を省略すると、カレントドライブを指定したとみなされます。

（例）　A〉DIR　→　A〉DIR　A:　と同じ
　　　　A〉TYPE　LETTER.TXT　→　A〉TYPE　A:LETTER.TXTと同じ

また、カレントドライブは、自由に変更することができます。カレントドライブを変更するときは、コマンドを入力するように、プロンプトに続けて変更先のドライブ名とコロン（:）を入力します。たとえば、カレントドライブがドライブAのとき（プロンプトはA〉）に"B:"とタイプして[⏎]キーを押せば、プロンプトはB〉に変わって、カレントドライブはドライブBに変わります。

（例）　A〉B:　→　B〉　プロンプトに変わる
　　　　B〉A:　→　A〉　プロンプトに変わる

2.4　ディスクの基礎知識

MS-DOSのファイルは、すべてフロッピィディスクや固定ディスクなどのディスクに保存されます。ここでは、ディスクの種類や扱い方など、ディスクを使って作業をする上で必要な事項について説明します。

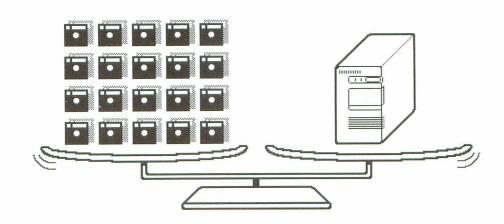
▶フロッピィディスクと固定ディスク

フロッピィディスクも固定ディスクも、ファイルを保存するための媒体（メディア）です。フロッピィディスクは、パソコンで最もポピュラーなメディアですが、この頃は固定ディスクも随分普及してきました。

●2つのディスクの特徴

フロッピィディスクは小さくて持ち運びでき、しかも安価であるという特徴を持っています。しかし固定ディスクに比べると、データを保存できる量（「容量」といいます）が小さく（1MBまたは640KB）、データを読み書きする速度が遅いので、ソフトウェアによってはディスクを何枚も使わなければならず、プログラムの実行が遅くなってしまう場合があります。

これに対して、固定ディスクはデータを保存できる容量が大きく（20MB～300MB）、データの読み書きが早いメディアですが、交換や持ち運びがしにくく、フロッピィディスクに比べると高価です。しかし、作業の効率や使いやすさは、フロッピィディスクだけを使っている場合と比べると段違いにアップします。特に複数のアプリケーションソフトを使う場合などは、プログラムをすべて一緒に固定ディスクに入れておけるので、作業ごとにディスクを差し替える手間が省けます。

MB（メガバイト）、KB（キロバイト）は情報の量を表す単位です。1B（バイト）で半角文字1字を表せます。1KBは約1000B、1MBは約1000KBです。

●ディスクとフォーマット

ところで、フロッピィディスクも固定ディスクも、使うときには準備が必要です。新品のディスクには、買ってきてすぐにファイルを保存することはできません。いわゆる「フォーマット」（初期化）という作業をしてから、ディスクは使います。MS-DOSのシステムディスクやアプリケーションソフトのディスクなどは、皆さんがお使いになる前に、すでにフォーマットしてあるから使えるのです。

ディスクを一冊のノートにたとえると、新品のディスクはただの真っ白な紙の束です。ここに、順序良くデータを書き込むには、まず紙にきちんと罫線を引いてから、束を揃えて綴じなくてはなりません。このように、データを書き込むための準備作業が、ディスクのフォーマットに当たります。

フォーマットは、最初に使うときに1回だけ行えばよい作業です。といって、複数回行ってはいけないというわけではありません。たとえば一度フォーマットして使っていたディスクの中のデータが不必要になった場合など、このディスクを再度フォーマットすれば、前のデータを消して新しいディスクとして再利用できます。ただし、フォーマットを実行すると、以前のデータはすべて失われてしまうので、本当に消してしまってもよいデータかどうかを、十分に確認してから実行するようにしましょう。

フォーマットの作業自体は、フロッピィディスクと固定ディスクで違ってきます。具体的な手順については、以降の各項目を参照してください。

●ディスクとバックアップ

どれほどディスクを丁寧に扱っていても、万が一の事故が起こらないとは限りません。また、長い間使っていると、メディアとしての寿命に遭遇することもあるかもしれません。

いずれにしても、一度壊れてしまったディスクはほとんど元に戻りません。そのような場合に備えて、大切なデータを記録したディスクは、複製を作っておくと安心です。このような複製のことを「バックアップ」と呼び、複製を作ることを「バックアップを取る」などと言います。

フロッピィディスクでも固定ディスクでも、バックアップをとっておくことは非常に大事なことです。〝備えあれば憂いなし〟という諺（ことわざ）もあるように、万一に備えておけば後で困らずに済むというものです。大切なディスクのバックアップは必ず取るように心がけましょう。

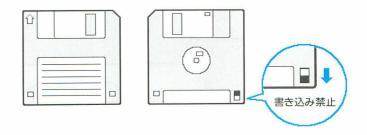
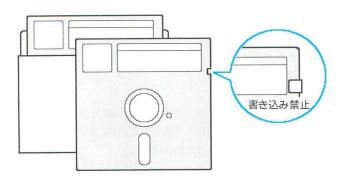
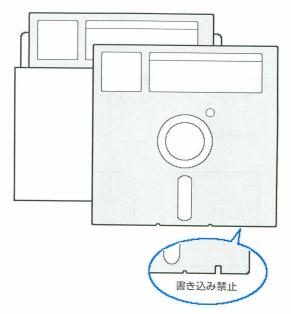
バックアップのとり方は、フロッピィディスクと固定ディスクで方法が違います。具体的な手順については、以降の各項目を参照してください。

▶フロッピィディスクについて

フロッピィディスクは、薄いプラスチックシート上の磁性体にデータを記録するしくみになっています。

●フロッピィディスクの種類

フロッピィディスクは、サイズによって、次の種類に分かれます。

・3.5インチ

・5インチ

・8インチ

カセットテープやビデオテープは、一度録音や録画したものを保護するために、ツメを折ると再度記録できないようにできています。フロッピィディスクにも、他のデータを書き込めないようにする仕組みが用意されています。これを「ライトプロテクト」（書き込み禁止）といいます。ライトプロテクトの方法は、ディスクのサイズによって異なります。具体的には上の図を参照してください。

また、フロッピィディスクは、記憶容量（記録できるデータの量）によって次の種類に分かれます。

・2DD　640KB（半角文字で約65万字分）のデータが入るディスク。
・2HD　1MB（半角文字で約105万字分）のデータが入るディスク。
　1MBは約1000KB。

●使用上の注意

フロッピィディスクにとっては、磁気・熱・傷・汚れ・電気的ショックの5つが大敵です。ディスク上のデータはもちろんのこと、ディスクそのものを守るために、これら5つの要素がディスクに悪影響を与えないように十分気をつけなければなりません。

具体的には、以下の注意を守ってください。

・磁石製品（磁気ネックレス、磁石製の紙押えなど）をディスクに近付けない。
・大出力のスピーカーは強い磁界を発生するので、ディスクを近付けない。
・日の当たる場所や、極端に高温になる場所にディスクを保管しない。

・ディスクに貼ったラベルには、ボールペンなどペン先の固いもので直接字をかかない（ラベルは書いてからディスクに貼るようにするとよい）。
・ディスクの中身のプラスチックシートには手を触れない。
・ディスクにホコリやタバコの灰を落とさない。
・ディスクにコーヒーやお茶などをこぼさない。
・ディスク装置のランプが点灯しているときには、ディスクを取り出さない。

●フロッピィディスクのフォーマット

フォーマットしていないディスクは使うことができないことは前にお話しました。フロッピィディスクをフォーマットするときは、FORMAT（フォーマット）コマンドを使います。

それでは、実際にディスクをフォーマットしてみましょう。MS-DOSのシステムディスクと新しい（または不要になった）ディスクを1枚用意して、以下の手順にしたがってください。

1 MS-DOSを起動し、メニュー画面が表示されたら[STOP]キーを押して、プロンプトA〉を表示させます。

2 プロンプトA〉に続けて"FORMAT　B:"とタイプして、[↵]キーを押します。

```
A>FORMAT B:
```

3 メッセージにしたがって、ドライブBに新しいディスクを入れてから[↵]キーを押します。

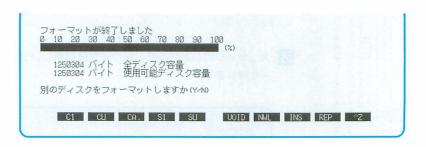
```
A>FORMAT B:
Format Version X.XX

新しいディスクをドライブ B: に挿入し
どれかキーを押してください
```

4 メッセージにしたがって、ディスクの種類に対応した数字をタイプして⏎キーを押します。ディスクのフォーマットが開始されます。

```
A>FORMAT B:
Format Version X.XX

新しいディスクをドライブ B: に挿入し
どれかキーを押してください

ディスクのタイプは  1 : 2DD(640KB)  2 : 2HD(1MB)  =
```

5 フォーマット中は、作業が何%進んでいるかを示すグラフが表示されます。フォーマットが終了すると、メッセージが表示されます。

```
ディスクのタイプは  1 : 2DD(640KB)  2 : 2HD(1MB)  = 2
目的のディスクは 1MB FD です

フォーマット中です. . .  残り 135 トラックです
0  10  20  30  40  50  60  70  80  90  100
                                          (%)
```

6 続けて別のディスクをフォーマットする場合、Yキーをタイプして⏎キーを押すと同じ処理を繰り返します。ここではフォーマットを終了するためにNキーをタイプして⏎キーを押してください。プロンプトがA>に戻ります。

以上で、フォーマットの作業はおしまいです。フォーマットしたディスクは、MS-DOSやアプリケーションソフトのデータディスクとして使用することができます。

●フロッピィディスクのバックアップ

バックアップの重要性については、前にお話したとおりです。フロッピィディスクのバックアップを作るには、MS-DOSのDISKCOPY（ディスクコピー）コマンドを使います。このコマンドは、元のディスクの内容をそっくりそのまま別のディスクにコピーするものです。それでは、元になるディスクと新しい（または不要の）ディスクを用意して、バックアップをとってみましょう。

1 MS-DOSを起動し、メニュー画面が表示されたら[STOP]キーを押して、プロンプトA〉を表示させます。

2 プロンプトA〉に続けて"DISKCOPY　A:　B:"とタイプして、[⏎]キーを押します。

```
A>DISKCOPY A: B:
```

3 メッセージにしたがって、ドライブAに元になるディスクを、ドライブBにバックアップ用の新しいディスクを入れてから[⏎]キーを押します。

```
A>DISKCOPY A: B:

DISKCOPY version X.XX

ディスクのコピーを行います

送り側ディスクをドライブ A: に挿入してください
受け側ディスクをドライブ B: に挿入してください
準備ができたらどれかのキーを押してください
```

4 ディスクのコピーが始まります。作業中は、進行状況を示すグラフが表示されます。ディスクのコピーが終了すると、メッセージが表示されます。

```
A>DISKCOPY A: B:

DISKCOPY version X.XX

ディスクのコピーを行います

読み込み中　残り　96 トラックです
0  10  20  30  40  50  60  70  80  90  100
███████████┼────┼────┼────┼────┼────┼────┤ (%)
```

第2章

5 [N]キーを押して終了してください。ここで、[Y]キーを押すと同じ処理を繰り返します。

```
A>DISKCOPY A: B:

DISKCOPY version X.XX

ディスクのコピーを行います

コピーは終了しました
もう一度実行しますか(Y/N)
```

6 以上でオリジナルのディスクとまったく同じ内容のディスクができあがりました。念のため、DIRコマンドで2つのディスクの内容を確認してみましょう。"DIR[⏎]"と"DIR　B:[⏎]"を続けて実行してみてください。まったく同じディスクであることがわかります。

▶固定ディスクについて

固定ディスクは、多数のディスクが密閉されたケースの中に内蔵されているディスクです。

●固定ディスクの種類

固定ディスクには、インタフェース規格の違いによって、次の2種類があります。

- SASI（サジーまたはサシ）　固定ディスク専用のインタフェース。最大40MBの固定ディスクを2台まで接続できる。
- SCSI（スカジー）　固定ディスクや光ディスク、CD-ROMなどの汎用インタフェース。固定ディスクなら、4台まで接続できる。

インタフェース規格とは、本体と周辺装置などの、2つ以上の機器を接続するための方式を定めた規格です。

また、その形によって、次の3つのタイプに分けられます。

- 外付けタイプ　コンピュータの外部に置き、ケーブルで接続する
- 内蔵タイプ　コンピュータの内部に取り付ける
- パックタイプ　コンピュータのスロットに直接差し込んで取り付ける（ノートパソコン用）

固定ディスクの容量は、20MB以上300MBまでさまざまなものがあります。現在の主流は40M～100Mですが、徐々に容量の大きなものが増えてきています。

●使用上の注意

固定ディスクには大量のデータが記憶できますが、それだけに壊れたときのダメージも大きくなります。扱いには十分気を配ってください。

具体的には、以下の注意を守ってください。

・ディスクに強い震動を与えたり、ぶつけたりしない。
・電源を入れたまま移動させない。
・電源を切る前に、必ずキーボードのSTOPを押す。

固定ディスクを使っている場合は、電源を切る前にSTOPキーを押しましょう。ただし、使っている固定ディスクが「オートリトラクト（自動退避機構）」と呼ばれる機能を備えている場合は、STOPキーを押さずに電源を切ってもかまいません。詳しくは固定ディスクのマニュアルをご覧ください。

●固定ディスクのフォーマット

フロッピィディスクと同様に、固定ディスクも真新しい状態では使用できません。固定ディスクにも、「フォーマット」（初期化）という作業が必要です。しかし、固定ディスクは、1台にフロッピィディスク何十枚分もの情報を記録できるので、フォーマットの作業は、購入時に1度だけ行えば済みます。

また、固定ディスクは、非常に高速に情報をアクセス（読み書き）できる装置です。したがって、フロッピィディスク装置だけのシステムで、あとから固定ディスク装置を増設した場合は、あらためてMS-DOSを固定ディスクにインストールすると良いでしょう。

固定ディスクのフォーマットの仕方は、『MS-DOS 3.3D インストールガイド』をご覧ください。

●固定ディスクのバックアップ

固定ディスクは記憶容量が大きいだけに、バックアップが非常に大切です。不慮の事故の場合、フロッピィディスクならば1枚の被害で済みますが、固定ディスクだとフロッピィディスク何十枚分の被害になってしまう可能性があるからです。

バックアップを取るタイミング（何日おきか、何カ月おきか）は、使用するプログラムの信頼性やファイルの重要性などによるので、一概には言えませんが、なるべくマメにとっておいた方がよいでしょう。

固定ディスクのバックアップは、BACKUP（バックアップ）コマンドで行います。また、バックアップしたデータを固定ディスクに戻すときにはRESTORE（リストア）コマンドを使います。

それでは、まず、BACKUPコマンドで固定ディスクの内容をフロッピィディスクにバックアップしてみましょう。なお、ここでは、固定ディスクがドライブA、フロッピィディスクがドライブBであると想定しています。

1 固定ディスクのバックアップに必要な枚数のフロッピィディスク（フォーマットしたもの）を用意し、MS-DOSを起動してプロンプトA〉が表示される状態にします。

用意するフロッピィディスクの枚数は、固定ディスクに記録されているデータの量によって異なります。この量は、CHKDSKコマンドで調べることができます。

2 プロンプトに続けて"BACKUP　A:　B:　/S"とタイプして⏎キーを押します。

```
A>BACKUP A: B: /S
```

3 用意したフロッピィディスクの1枚を、メッセージにしたがってフロッピィディスク装置にセットし、⏎キーを押します。フロッピィディスクには、メッセージに表示される通し番号（01から）を、必ず記入しましょう。
バックアップ処理中は、固定ディスクからフロッピィディスクへコピーされているファイルの名前が表示されます。

```
*** ファイルをドライブ B: にバックアップします. ***
ディスク番号: 01

¥IO.SYS
¥MSDOS.SYS
¥COMMAND.COM
¥MENU.MNU
¥SETUP.DEF
¥NECAI.SYS
    ⋮
```

4 メッセージにしたがってフロッピィディスクを交換しながら、作業を進めます。

5 バックアップが終了するとプロンプト表示に戻ります。

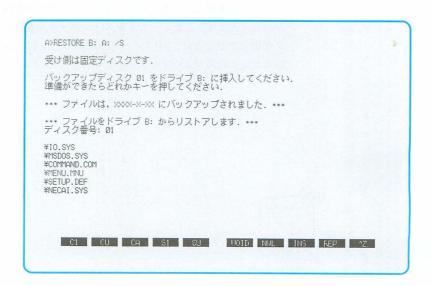
次に、RESTOREコマンドで、フロッピィディスクにバックアップしたデータを固定ディスクに復元してみます。なお、ここでは、フロッピィディスクがドライブB、固定ディスクがドライブAであると想定しています。

1 バックアップしたデータの収められたフロッピィディスクを用意し、MS-DOSを起動してプロンプトA〉が表示される状態にします。

2 プロンプトに続けて"RESTORE　B：　A：　/S"とタイプして⏎キーを押します。

```
A>RESTORE B: A: /S
```

3 メッセージにしたがって1枚目のフロッピィディスクをドライブにセットし、⏎キーを押します。RESTOREコマンドによる処理中は、次のような画面が表示されます。

第2章

4 メッセージにしたがってフロッピィディスクを交換しながら、作業を進めます。

```
¥DOS¥OFGX.BAT
¥DOS¥SAMPLE.MNU
¥DOS¥TELE.INI
¥DOS¥NECDIC.DRV

システムファイルをリストアしました.
受け側ディスクではシステムを起動できない可能性があります.

A>
    C1  CU  CA  S1  SU    VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

5 データの復元が終わるとプロンプト表示に戻ります。

MS-DOSを起動できるディスクのバックアップについて復元を行うと、

システムファイルをリストアしました.
受け側ディスクではシステムを起動できない可能性があります.

というメッセージが表示されます。RESTOREコマンドは、ディスク上のシステムファイルを書き込む位置に特別な注意を払っていないので、システムファイルを復元しても、そのディスクからMS-DOSを起動できないことがほとんどです。したがって、システムファイルを含むバックアップディスクを復元するときは、/Pスイッチを併用してシステムファイルを復元しないようにした方がよいでしょう。

2.5 まとめ

この章では、次のような事項を学びました。

●MS-DOSへの指示（命令）を「コマンド」と呼び、指示を出すことを「コマンドを入力する」とか「コマンドを実行する」と言います。コマンドを入力できるのは、〝A〉〟〝B〉〟のような、「プロンプト」が表示されているときです。

●コマンドには、「内部コマンド」と「外部コマンド」の２種類があります。内部コマンドは、プロンプトが表示されているときに、いつでも実行することができます。外部コマンドは、フロッピィディスクや固定ディスクから、いったんメモリへ読み込まれてから実行されます。

●プログラムやデータは、それぞれ「ファイル」としてフロッピィディスクや固定ディスクに記録されています。それぞれのファイルには、「主ファイル名」と「拡張子」との組み合わされた「ファイル名」がついています。

●どのようなファイルが記録されているかを知りたいときは、「ディレクトリ」を調べます。これには、〝DIR〟コマンドや、〝DIR　/P〟コマンドを使用します。また、〝/P〟のように、コマンドの動作を少し変える働きをする指定を「コマンドスイッチ」または簡単に「スイッチ」と呼びます。

●ファイル名には、文字数の制限、使えない名前、使えない文字があります。また、ファイル名には、その内容がすぐに分かるような、一定のルールがあります。

●プロンプトに表示されるアルファベットは、「カレントドライブ」を示しています。コマンドを入力する際に、カレントドライブの指定は省略できる場合があります。

●フロッピィディスクは、〝FORMAT〟コマンドで、いったん「フォーマット（初期化）」してから使用します。

●フロッピィディスクや固定ディスクに記録されているプログラムやデータは、万が一の事故に備えて「バックアップ」をとっておきましょう。１枚のフロッピィディスク全体のバックアップをとる場合は、〝DISKCOPY〟コマンドを使用します。固定ディスクの場合は、バックアップをとるために〝BACKUP〟コマンドを、また復元するためには〝RESTORE〟コマンドを使用します。

第3章 メニューの使い方

この章では、MS-DOSの起動時に表示されるメニュー画面での操作を、操作例とともに説明します。なお、メニュー画面のもっとも簡単な使用方法は、2.1節中の「コマンドとメニュー」でも紹介しました。

3.1 メニューとは

MS-DOSで何かの処理を行うときは、MS-DOSに対して何らかの命令（コマンド）を発しますが、その方法は2通りあります。

第1の方法は、MS-DOSのプロンプト（A〉など）の後ろに、キーボードからコマンド名を入力する方法です。

第2の方法は、この章で説明するメニュー画面を使用する方法です。メニュー画面には、レストランのメニューのように、あらかじめ頻繁に使用するコマンドが登録されているので、その中から目的の項目を選択するだけで第1の方法と同じ目的を達せられます。

たとえば、運用ディスク＃1には、マニュアルの補足説明の情報が納められています。これを画面で読むとき、キーボードからコマンドを入力する第1の方法では、次のように入力します。

```
A〉MORE 〈 README.DOC⏎
```

一方、メニューを利用する第2の方法では、このコマンドがあらかじめ登録されています。

```
MS-DOS 3.30 コマンド　メニュー（コマンド選択）1/ 4          Menu vX.XX
 F1 本製品のご紹介（ご使用の前にお読みください）              日付:
                                                              XXXX-XX-XX
 F2 アプリケーションソフトの登録
                                                             時刻:
 F3 ファイル名一覧の表示                                        XX:XX
 F4 フロッピィディスク（2HD）の初期化
                                                             MS-DOS:
 F5 フロッピィディスク（2HD）の複写（バックアップ）              Ver. 3.30
```

メニューを利用する方法では、この項目を選ぶだけで、マニュアルの補足説明を読むことができます。

メニュー画面に表示する項目は、ユーザーが追加や削除することができます。また、アプリケーションソフトのインストールを行う際に、そのアプリケーションソフトを自動的にメニュー画面に登録し、以後はメニュー画面からそれを利用することもできます。

3.2 メニューの使い方

メニュー画面でのキー操作は、とても簡単です。ほとんどの操作は、次のキーだけで行うことができます。

↑↓キー	メニュー画面に表示されている項目を選ぶときに使用します。
⏎キー	選んだ項目を実行します。

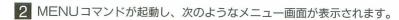
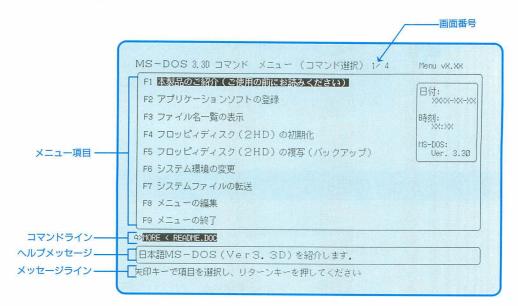
▶メニューの起動

『MS-DOS 3.3D インストールガイド』で説明されている手順で作成された運用ディスクであれば、MS-DOSの起動と同時に、自動的にメニュー画面が表示されます。

もしメニュー画面が表示されない場合、またはいったんメニュー画面を終了した場合は、次のようにしてメニュー画面を表示するMENUコマンドを起動します。

1 MS-DOSのプロンプト「A〉」が表示されていることを確かめて、次のように入力します。

```
A>MENU
```

2 MENUコマンドが起動し、次のようなメニュー画面が表示されます。

この画面を「コマンド選択画面」と呼びます。メニュー画面の各部分は、次のような役割をはたしています。

画面番号

購入時のメニュー画面には、あらかじめ約4画面分、34種類のコマンドが登録されています。現在表示されている画面が何画面目であるかは、画面の右上に表示されます。「1/4」という表示は、4画面あるメニュー画面の、最初の画面であることを表しています。

> ハイレゾリューションモードのシステムでは、一度に12種類のメニュー項目が表示されますので、全体の画面数は3画面になります。本章のサンプル画面はノーマルモードのシステムの場合ですが、ハイレゾリューションモードでも操作方法は同様です。

メニュー項目

その画面で選択できる項目です。反転表示されているメニュー項目は、[⏎]キーを押したときにその項目が実行されることを表しています。反転表示は、[↑][↓]キーで移動します。

ヘルプメッセージ

反転表示されているメニュー項目に関する、補足説明です。

コマンドライン

反転表示されているメニュー項目を実行したときに、実際に実行されるMS-DOSのコマンドを示しています。

コマンドラインに「%:」「%¥」のような記号が表示されるメニュー項目があります。これらの記号は、そのメニュー項目を実行した際に、「ドライブ選択画面」（後述）や「ディレクトリ選択画面」が表示されることを表しています。

メッセージライン

その画面で行っていただきたい操作を示しています。

▶メニュー項目の選び方

メニュー画面の起動時には、「本製品のご紹介（ご使用の前にお読みください）」というメニュー項目が反転表示されています。この反転表示は、⏎キーを押したときに実行される項目を表しています。

反転表示は、次の２つのキーで移動します。

↑キー　反転表示が上に移動します。いちばん上の項目が反転表示している場合は、前の画面に切り換わります。

↓キー　反転表示が下に移動します。いちばん下の項目が反転表示している場合は、次の画面に切り換わります。

▶メニュー画面の切り換え

一度に表示されるメニュー項目は、９個（または12個）までですが、メニュー画面にはもっと多くの項目が登録されています。全部で何画面分の項目が登録されているかは、画面右上の表示画面番号の数字で分かります。たとえば、「１/４」という表示は、４画面分のメニュー項目が登録されており、現在その最初の画面が表示されていることを表しています。

メニュー画面は、前述の↑↓キーで切り換えることができますが、次のキーで素早く切り換えることもできます。

ROLL UPキー　画面全体を次の画面に切り換えます。

ROLL DOWNキー　画面全体を前の画面に切り換えます。

▶メニュー項目の実行

実行したいメニュー項目を[↑][↓]キーで反転表示させ、[⏎]キーを押すと、その項目が実行されます。

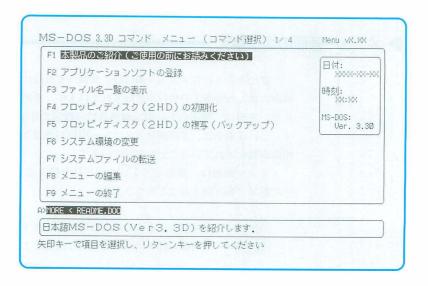
[↑][↓]キーを押すことで、反転表示が移動し、コマンドラインの表示が変わることに注目してください。コマンドラインは、そのメニュー項目を反転表示させて[⏎]キーを押したときに、実際に実行されるMS-DOSのコマンドを示しています。

なお、ファンクションキーで実行することもできます。

ファンクションキー（[f･1]～[f･9]または[vf･2]）

各メニュー項目の左の「F１」～「F９」（または「F12」）という表示は、ファンクションの番号を表しています。たとえば、[f･1]キーを押すと、「F１」と表示されているいちばん上の項目が、その項目が反転表示されていなくても、ただちに実行されます。

それでは、実際に操作を行ってみましょう。ここでは、メニュー項目の先頭の「本製品のご紹介（ご使用の前にお読みください）」を実行してみましょう。

1 [↑][↓]キーで、反転表示を上下させ、「本製品のご紹介（ご使用の前にお読みください）」というメニュー項目を反転表示させます。

このメニュー項目を選択したときに、実際に実行されるMS-DOSコマンド「MORE 〈 README.DOC」は、コマンドラインに表示されています。

2 ⏎キーを押すと、このメニュー項目が実行されます。

```
　この度は、『日本語MS－DOS（Ver3．3D）基本機能セット』をお買
い上げ頂きまして誠に有り難うございます。

　日本語MS－DOS（Ver3．3D）をご使用の前に、小冊子『本製品の内
容と取り扱いについて』と合わせて、このREADME．DOCファイル、及び、
README2．DOCファイルをお読みください。

　README2．DOCファイルを読むには、メニューの最終ページの最後の
メニューを選んでください。

続きがありますのでどれかキーを押してください.
 C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

3 コマンド実行後の操作は、通常の方法（キーボードからのコマンド入力）で、「MORE ＜ README.DOC」を実行した場合と同じです。画面のいちばん下の「続きがありますのでどれかキーを押してください．」というメッセージに従って⏎キーを押すと、続きの画面が表示されます。

4 コマンドの実行がすべて終了すると、次のメッセージが表示されます。

```
コマンド選択に戻ります
準備ができたら、どれかキーを押してください
 C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

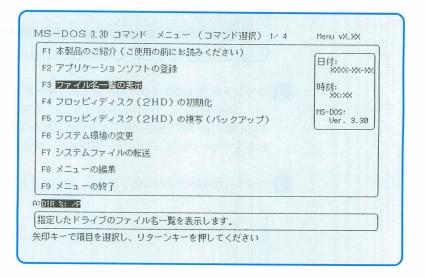
5 メッセージに従って⏎キーを押すと、最初のメニュー画面（コマンド選択画面）に戻ります。

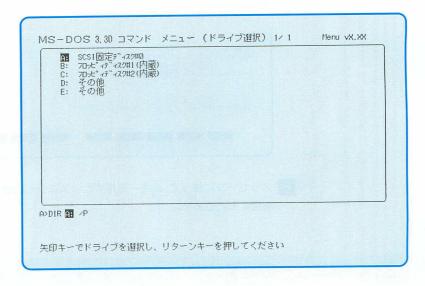
3.3 指定を必要とするメニュー項目の実行

メニュー項目によっては、その項目がただちに実行されず、さらにいくつかの選択や指定が必要になる場合があります。

参照：DIRコマンド
→「4.1　ファイル名を調べる」

ここでは、メニュー画面の3番目の項目「ファイル名一覧の表示」を実行して、ドライブAのディスクに記録されているファイルを一覧表示してみましょう。この項目は、ディレクトリを表示するDIRコマンドを実行しますが、「どのドライブのディレクトリを表示するか」という、ドライブの指定が必要になります。

1 ↑↓で、「ファイル名一覧の表示」を反転表示させます。

ドライブAのディレクトリを表示するコマンドをキーボードから実行するときは「DIR　A：」のように入力します。一方、「ファイル名一覧の表示」を反転表示させて、コマンドラインを見ると、「%：」という記号が表示されています。MENUコマンドは、この記号の部分を、次に表示される「ドライブ選択画面」で選択されたドライブ名で置き換えてから実行します。

2 [⏎]キーを押します。次のような「ドライブ選択画面」が表示されます。

ドライブ選択画面では、指定できるドライブ名が、メニュー項目として表示されます。コマンド選択画面と同じように、[↑][↓]キーで目的のドライブ名を反転表示します。

3 ここでは、ドライブAのディスクに記録されているファイル名の一覧を表示してみましょう。[↑][↓]キーで、「A:」という項目を反転表示させます。

ドライブ選択画面でドライブAを反転表示させると、コマンドラインは「DIR　A:　/P」となります。これが、実行されるMS-DOSのコマンドです。

4 [⏎]キーを押すと、DIRコマンド「DIR　A:　/P」が実行され、ドライブAのファイル名の一覧が表示されます。

```
A>DIR A: /P

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは A:¥

COMMAND  COM    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
DOS          <DIR>     XX-XX-XX   XX:XX
NECAI    SYS   XXXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
NECDIC   SYS   XXXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
CONFIG   SYS      XXX  XX-XX-XX   XX:XX
AUTOEXEC BAT       XX  XX-XX-XX   XX:XX
```

第3章

5 DIRコマンドの実行が終了すると、次のようなメッセージが表示されます。

```
README   DOC      XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
README2  DOC      XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
       XX 個のファイルがあります.
 XXXXXXXX バイトが使用可能です.


コマンド選択に戻ります
準備ができたら、どれかキーを押してください

    C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

6 メッセージに従って⏎キーを押すと、メニュー画面の最初のコマンド選択画面にもどります。

3.4 メニューの終了

メニュー画面での操作を終了し、MS-DOSのプロンプトが表示されている状態に戻るには、次の2通りの方法があります。

- 1画面目のコマンド選択画面にある「F9　メニューの終了」を反転表示させ、⏎キーを押します。
- コマンド選択画面で、STOPキーを押します。

MENUコマンドが終了すると、MS-DOSのプロンプト「A>」が表示されます。

コンピュータを上手に利用する秘訣は、多くの情報をいかに整理・分類するかです。ここでは、そのための方法や、MS-DOSについて少し詳しい事項を説明しています。

応用編

■本編の内容■

第4章 ファイルを操作する

この章では、ファイルに対する基本的な操作について説明します。「ファイルの内容表示」「ファイルのコピー」「ファイルの削除」「ファイル名の変更」など、知っておくと便利な操作ばかりです。実際にMS-DOSを動かしながら、必要なコマンドと親しくなってください。

ここでの操作には、MS-DOSの運用ディスク＃1と、データディスクが1枚必要です。データディスクを持っていない方は、2.4節中の「フロッピィディスクについて」を参照して、データディスクを作成してください。

また、すべての操作はドライブAからMS-DOSを起動して、プロンプトA〉が画面表示されている状態で行います。

4.1 ファイル名を調べる（DIRコマンド）

ディスクに記録されているファイルの名前を見るには、DIRコマンドを使います。たとえば、ドライブBのディスクのファイル一覧を見るには、次のように入力します。

```
DIR　B:⏎
```

ファイルがたくさんあって、一覧表示が1画面に収まらない場合は、次のように入力すると、1画面分ずつ表示を止めながら見ることができます。前のコマンドと違う点は、最後に「/P」を付けたことです。

```
DIR　B:　/P⏎
```

この場合は、任意のキー（たとえば⏎キー）を押しながら、次々に画面を表示させてゆきます。

では、実際に操作してみましょう。MS-DOSのシステムディスクをドライブBにセットしてください。

1 "DIR　B:⏎"と入力してください。

```
A>DIR B:

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません
 ディレクトリは B:¥

COMMAND  COM    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
ADDDRV   EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
CUSTOM   EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
DELDRV   EXE     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
DISKCOPY EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
EDLIN    EXE     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
            ・
            ・
            ・
SETUP    EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
SETUP2   EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
AUTOEXEC BAT       XX  XX-XX-XX   XX:XX
MENU     MNU     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
README   DOC     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
README2  DOC     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
      XX 個のファイルがあります.
   XXXXX バイトが使用可能です.

A>
 C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

あっという間に、ファイル一覧が画面表示されてしまいました。画面にはファイル一覧の最後の部分だけが残っています。これでは、ファイル名を確かめることができません。

2 今度は"DIR　B:　/P⏎"と入力してください。

```
COMMAND  COM    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
ADDDRV   EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
CUSTOM   EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
DELDRV   EXE     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
DISKCOPY EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
EDLIN    EXE     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
FORMAT   EXE   XXXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
INSTDOS  EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
MENU     COM    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
MENUED   EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
MORE     COM      XXX  XX-XX-XX   XX:XX
PRINT    EXE     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
RENDIR   COM     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
REPLACE  EXE     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
SYS      EXE    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
XCOPY    EXE     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
EMM      SYS    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
EMM386   SYS    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
FONT     SYS    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
GRAPH    LIB   XXXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
GRAPH    SYS     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
MOUSE    SYS     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
NECAI33B DAT      XXX  XX-XX-XX   XX:XX
準備ができたらどれかキーを押してください.
 C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

ファイル一覧が１画面分表示されたところで、表示は一時停止します。

3 メッセージに従って、任意のキー（たとえば⏎キー）を押すと、続きの画面が表示されます。

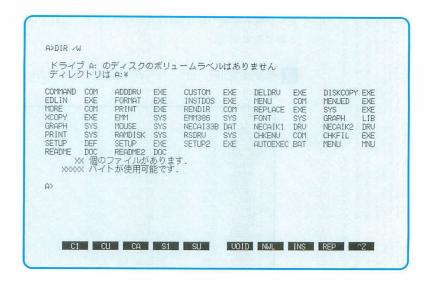
▶ファイル名だけの一覧を見る（DIRコマンドと/Wスイッチ）

ファイル名だけを一覧表示させるには、DIRコマンドに〝/W〟スイッチを付けて実行します。〝/W〟スイッチを付けてDIRコマンドを実行すると、画面の1行にファイル名だけが5つずつ表示されます。ファイルの大きさや作成年月日などの情報はいらないから、ファイル名だけの一覧表示が見たい、という場合に便利です。

たとえば、ドライブBのディスクのファイル名だけの一覧を見たい場合は、次のように入力します。

DIR　B：/W⏎

では、実際に操作してみましょう。MS-DOSのシステムディスクをドライブAにセットしてください。

1 〝DIR　/W⏎〟と入力してください。

2 上の画面のように、ファイル名だけが画面表示されます。

このように、〝/W〟スイッチつきのDIRコマンドを使えば、保存されているファイル数が多いディスクでも、たいてい一度にすべてのファイル名一覧を画面表示できるでしょう。

/Wスイッチを使っても、ファイル名一覧が画面に入りきらない場合は、前述の「/P」スイッチも一緒に指定して、「DIR　B：　/W　/P⏎」のように入力します。

/Wスイッチを使っても、ファイル名一覧が画面に入りきらない場合は「/P」スイッチを使用しますが、もっと良い根本的な解決策を考えるべきです。それは、ディスクの中のファイルを、図書館の本棚のように、分類して記録することです。これには、「サブディレクトリ」というものを使います。サブディレクトリの使い方は、次章で説明しています。

▶特定のファイルがあるかどうか調べる

すでに名前の分かっているファイルがあるかどうか調べるときにも、DIRコマンドを使います。〝DIR〞の後ろに目的のファイル名を指定すると、そのファイルに関する情報だけが表示されます。目的のファイルがあるかないか知りたいとき、またはそのファイルの大きさや作成年月日などが知りたいときに便利です。

たとえば、カレントドライブのディスクに〝LETTER.TXT〞というファイルがあるかどうか知りたいときには、次のように入力します。

DIR　LETTER.TXT⏎

では、実際に操作してみましょう。システムディスクをドライブBにセットしてください。

1 〝DIR　B:NEC.DOC⏎〞と入力してください。

```
A>DIR B:NEC.DOC

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません
 ディレクトリは B:¥

ファイルが見つかりません.

A>
```

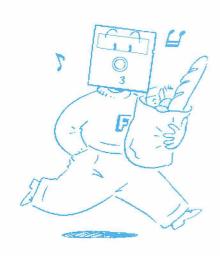
「ファイルが見つかりません」と表示されてしまいました。カレントドライブ（ドライブA）のシステムディスクには〝NEC.DOC〞というファイルがないことがわかります。

第4章

2 では、"DIR　B:README.DOC⏎"と入力してください。

```
A>DIR B:README.DOC

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません
 ディレクトリは B:¥

README   DOC     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
        1 個のファイルがあります.
    XXXXX バイトが使用可能です.

A>
```

"README.DOC"に関する情報が表示されて、目的のファイルが存在していることがわかります。

ファイル名がはっきりと分かっている場合は、この方法が使用できますが、「たしか、ファイル名の先頭が"C"だった」とか、「たしか、ファイル名拡張子が".DOC"だった」という場合は、どうすれ良いでしょうか。この場合は、「ワイルドカード」というものを使用します。ワイルドカードの説明は、「4.6　ワイルドカードを使ったファイルの指定」にあります。

4.2 ファイルの内容を表示する（TYPE、MOREコマンド）

ファイルの内容を画面に表示させるコマンドには、TYPE（タイプ）とMORE（モア）の2つのコマンドがあります。普通はTYPEコマンドを使いますが、表示されるファイルの内容が多い場合には、MOREコマンドを使った方が見やすいでしょう。

▶ファイルの内容を全部表示する

ファイルの内容を見るには、TYPEコマンドを使います。たとえば、ドライブBのディスクの"MEMO.TXT"の内容を見るには、次のように入力します。

TYPE　B:MEMO.TXT⏎

では、実際に試してみましょう。システムディスクをドライブBにセットしてください。

1 プロンプトに続けて、"TYPE　B:README.DOC⏎"と入力してください。

```
A>TYPE B:README.DOC

  この度は、『日本語MS－DOS（Ver3．3D）基本機能セット』をお買
い上げ頂きまして誠に有り難うございます。

●
●
●

●運用ディスク＃3（文節かな漢字変換ディスク）
  日本語入力の文節変換方式を使用する場合に必要なファイルが入っていま
す。

                                    － 以上 －
```

README.DOCファイルの内容が、画面に表示されてゆきます。1画面に表示しきれないので、内容が次々に画面上を流れてゆきます（スクロール表示）。

第4章

表示を途中で停止させるには、CTRLキーを押しながらSキーを押してください。キーが押された時点で、表示が止まります。

再び表示を開始するには、任意のキー（たとえば⏎キー）を押します。ファイル内容をすべて表示し終わると、再びプロンプトが表示されます。

TYPEコマンドでテキストファイル以外のファイル（プログラムなど）を指定すると、ピーという音と共にメチャメチャな文字や記号が表示されます。しばらくそのままにしておくと、そのうちプロンプト表示に戻るので心配ありません。プログラムファイルは、コンピュータだけが読める形式のファイルであって、人間が読める形式にはなっていないので、TYPEコマンドで内容を表示させても意味がないということです。

▶ファイルの内容を1画面ずつ表示する

大きなファイルを見るときにTYPEコマンドを使うと、あっという間にすべての内容が表示されてしまうので、じっくり中身を見ることができません。このようなときには、MOREコマンドを使います。MOREコマンドは、ファイルの内容を1画面ずつ表示します。

たとえば、ドライブBのディスクの"SIRYO.TXT"の内容を1画面ずつ見たい場合には、次のように入力します。

```
MORE ＜ B:SIRYO.TXT⏎
```

MOREコマンドは外部コマンドなので、実行する場合は、カレントドライブをMOREコマンドファイルが入ったディスクのところに移すか、コマンド名の前にドライブ指定を付けてから実行してください。また、MOREコマンドは、カレントドライブのディスクへ一時的にデータを書き込みますので、ディスクが書き込み禁止になっていると実行できません。なお、一時的に書き込まれたデータは、コマンドの終了時に自動的に消去されます。

では、実際に試してみましょう。システムディスクをドライブBにセットしてください。

1 MOREコマンドのファイルは、ドライブBのシステムディスクの中にあります。プロンプトA〉に続けて、"B：[⏎]"と入力して、カレントドライブをドライブBに移動しましょう。

2 プロンプトB〉に続けて、"MORE 〈 README.DOC[⏎]"と入力してください。

```
　この度は、『日本語MS－DOS（Ver3．3D）基本機能セット』をお買
い上げ頂きまして誠に有り難うございます。


　日本語MS－DOS（Ver3．3D）をご使用の前に、小冊子『本製品の内
容と取り扱いについて』と合わせて、このREADME．DOCファイル、及び、
README2．DOCファイルをお読みください。

　README2．DOCファイルを読むには、メニューの最終ページの最後の
メニューを選んでください。


続きがありますのでどれかキーを押してください．
  C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

README.DOCの内容が1画面分表示されたところで、画面のいちばん下に"続きがありますのでどれかキーを押してください"というメッセージが表示されます。

3 メッセージにしたがって、任意のキー（たとえば[⏎]キー）を押すと、次の画面が表示されます。

このように任意のキーを押しながら、目的のファイルの内容を1画面ずつ見ることができます。ファイルの内容をすべて表示すると、再びプロンプトが表示されます。

第4章

4.3 ファイルをコピーする（COPYコマンド）

ファイルは、自由にコピー（複写）することができます。ファイルのコピーは、別のディスクにファイルを移したい場合や、大事なファイルのバックアップを作っておきたい場合など、いろいろ利用できます。ファイルのコピーには、COPY（コピー）コマンドを使います。

たとえば、ドライブAのディスクにある"REPORT.DOC"ファイルを、ドライブBのディスクにコピーするには、次のように入力します。

COPY　A:REPORT.DOC　B:⏎

ドライブBのディスクには、ドライブAと同じ"REPORT.DOC"という名前のファイルがコピーされます。もちろんドライブAのファイルはそのままです。

それでは、実際に試してみましょう。ドライブAにシステムディスクを、ドライブBにデータディスクをセットしてください。

1 ドライブAのシステムディスクにある"README.DOC"ファイルを、ドライブBのデータディスクにコピーしてみます。プロンプトに続けて"COPY　A:README.DOC　B:⏎"と入力してください。

```
A>COPY A:README.DOC B:
        1 個のファイルをコピーしました.
A>
```

コピーが終了すると、

1個のファイルをコピーしました.

というメッセージが表示され、プロンプトに戻ります。

「0個のファイルをコピーしました。」というメッセージが表示された場合は、コピーができていません。タイプミスに気をつけて、もう一度COPYコマンドを実行してみてください。

2 確認してみましょう。DIRコマンドでファイル名を指定します。"DIR B:README.DOC⏎"と入力してください。

```
A>DIR B:README.DOC

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは B:¥

README   DOC      XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
        1 個のファイルがあります.
  XXXXXXX バイトが使用可能です.

A>
```

"README.DOC"がドライブBのディスクにコピーされています。

3 念のため、コピー元のドライブAのファイルも確認してみましょう。"DIR A:README.DOC⏎"と入力してください。

```
A>DIR A:README.DOC

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは A:

README   DOC      XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
        1 個のファイルがあります.
 XXXXXXXX バイトが使用可能です.

A>
```

ドライブBにコピーされたファイルは、元のドライブAと比べて、ファイルのサイズも作成日時もまったく同じファイルであることがわかるはずです。

COPYコマンドでは、コピー先のファイル名は自由に指定することができます。たとえば、"COPY　A:REPORT.DOC　B:NEWS.TXT⏎"と入力すれば、ドライブAにある"REPORT.DOC"という名前のファイルが、ドライブBに"NEWS.TXT"という名前でコピーされます。

また、このように違う名前を指定すれば、同じディスク内でファイルをコピーすることもできます。たとえば、"COPY　DOG.TXT　CAT.TXT⏎"では、カレントドライブに"DOG.TXT"と同じ内容の"CAT.TXT"というファイルができることになります。

4.4 ファイル名を変える（RENコマンド）

ファイル名は、自由に付け変えることができます。ファイル名を変えるには、REN(リネーム）コマンドを使います。

たとえば、カレントドライブの"ABC.DAT"というファイルの名前を"TEL.DAT"に変更するには、次のように入力します。

REN　ABC.DAT　TEL.DAT⏎

RENコマンドは、同じディスクの中でファイル名を変更するだけですから、変更後のファイル名にドライブ指定は必要ありません。

では試してみましょう。COPYコマンドの練習で、データディスクに作成した"README.DOC"を、"LESSON.DOC"という名前に変えてみます。データディスクをドライブBにセットしてください。

1 "REN　B:README.DOC　LESSON.DOC⏎"と入力してください。

```
A>REN B:README.DOC LESSON.DOC
A>
```

RENはRENAMEを略したコマンドです。"REN"の代わりに"RENAME"と入力することもできます。

特にメッセージは表示されずに、プロンプトが表示されます。

2 ファイル名が変わったかどうか確認してみましょう。"DIR　B:⏎"を実行してください。

```
A>DIR B:

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは B:¥

LESSON   DOC      XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
        1 個のファイルがあります.
  XXXXXXX バイトが使用可能です.

A>
```

"README.DOC"はなくなって、代わりに"LESSON.DOC"ができています。

4.5 ファイルを削除する（DELコマンド）

不要になったファイルをディスクから削除するには、DEL（デリート）コマンドを使います。たとえば、カレントドライブにある"MEMO.BAK"を削除するには、次のように入力します。

DEL　MEMO.BAK⏎

では、実際にファイルを削除してみましょう。RENコマンドの練習で、データディスクに作成した"LESSON.DOC"ファイルを削除します。データディスクをドライブBにセットしてください。

1 "DEL　B:LESSON.DOC⏎"と入力してください。

```
A>DEL B:LESSON.DOC

A>
```

特にメッセージは表示されずに、プロンプト表示に戻ります。

第4章

2 ファイルが削除されたかどうか確認してみましょう。"DIR　B：LESSON．DOC⏎"と入力してください。

```
A>DIR B:LESSON.DOC

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは B:¥

ファイルが見つかりません.

A>
```

「ファイルが見つかりません．」というメッセージが表示され、確かに削除されていることがわかります。

DELコマンドで削除したファイルは、再びディスクに戻すことはできません。したがって、削除は慎重に行ってください。また、タイプミスなどにも注意してください。

4.6 ワイルドカードを使ったファイルの指定（＊と?）

MS-DOSでは、グループ化されたファイル名や、特定のファイル名を持つファイルをまとめて指定できます。ファイル名に、「ワイルドカード」と呼ばれる特殊な文字（＊と？）を使うのです。

ワイルドカードは、ファイルを指定するときに利用する文字で、ファイル名の中の文字の代わりに使います。ワイルドカードには、「＊」と「？」の２種類があって、それぞれ次のような意味を持っています。

＊　ファイル名のうち、＊以降の文字が何であってもかまわない、ということを示す記号です。＊以降はどのような文字が何文字あっても、あるは文字がなくてもよいことを表します。

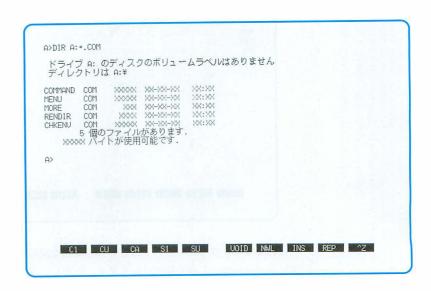
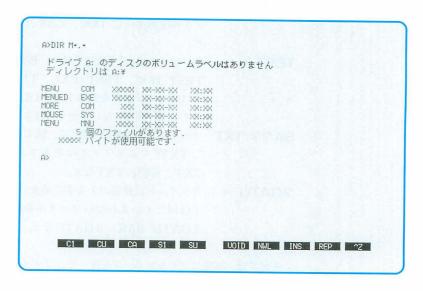
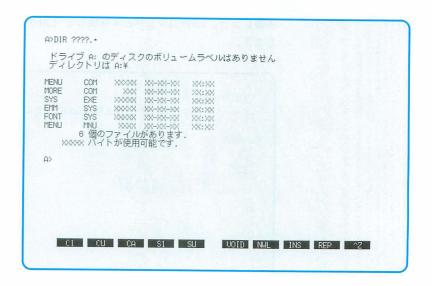
?　ファイル名のうち、？の位置にある１文字がどんな文字でもかまわない、ということを示す記号です。？記号１個が任意の１文字に相当します。？の後に文字がない場合は、？に相当する文字がなくてもかまいません。

以下に、ワイルドカードを使ったファイル指定の例をいくつか示します。

C＊.DOC	ファイル名の先頭が"C"で始まり、拡張子が".DOC"であるファイルを表す。C.DOC、CAR.DOC、CENTER.DOCなど。
TEST.＊	主ファイル名が"TEST"なら、拡張子は何でもかまわない。TEST.DOC、TEST.EXE、TEST.1、TESTなど。
＊.＊	すべてのファイルを意味する。DIRコマンドで確認できるファイルで、該当しないファイルはない。
SA??.TXT	ファイル名の先頭が"SA"で、続く2文字が任意で、拡張子が".TXT"であるファイルを表す。SAKI.TXT、SARU.TXT、SASI.TXTなど。
?GATU.＊	ファイル名は任意の1文字で始まって"GATU"が続き、拡張子は何でもかまわないファイルを表す。1GATU.DAT、2GATU.BAK、3GATUなど。

それでは、実際にワイルドカードを使って、ファイルを指定してみましょう。ドライブAにシステムディスク、ドライブBにデータディスクをセットしてください。

1 まず、システムディスクの中で、拡張子が".COM"であるファイルを見てみましょう。DIRコマンドと＊を使って"DIR　A:＊.COM⏎"と入力します。

```
A>DIR A:*.COM

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません
 ディレクトリは A:¥

COMMAND  COM    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
MENU     COM    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
MORE     COM      XXX  XX-XX-XX   XX:XX
RENDIR   COM     XXXX  XX-XX-XX   XX:XX
CHKENV   COM    XXXXX  XX-XX-XX   XX:XX
        5 個のファイルがあります.
    XXXXX バイトが使用可能です.

A>

 C1  CU  CA  S1  SU   VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

2 次に、ファイル名が"M"で始まるすべてのファイルを見てみましょう。"DIR　M＊.＊[↵]"と入力します。

3 今度は、４文字以内の主ファイル名を持つファイルを探してみましょう。"DIR　????.＊[↵]"と入力します。

このように、ワイルドカードはたいへん便利な記号です。使いこなすと作業がスピーディーで、しかも確実になります。ただし、ワイルドカードを効果的に使用するためには、ファイル名の付け方も重要です。関連のあるファイルには、あとでまとめて指定しやすいような名前（文字数を揃える、同じ文字で始めるなど）を工夫して付けるとよいでしょう。

4.7 まとめ

この章では、次のような事項を学びました。

●ディスクに記録されているファイルの名前を調べるには、〝DIR〟コマンドを使用します。

●ファイルの数が多すぎて、1画面に表示しきれないときは、DIRコマンドの〝/P〟スイッチや、〝/W〟スイッチを使用します。/Pスイッチを指定すると、表示が1画面ごとに一時停止します。/Wスイッチを指定すると、ファイル名だけが表示されます。

●名前の分かっているファイルの有無を調べるときは、DIRコマンドとファイル名を組み合わせて入力します。ファイル名があいまいなときは、〝*〟と〝?〟という、2種類の「ワイルドカード」を使用するとたいへん便利です。

●ファイルの内容が文字のみである場合には、〝TYPE〟コマンドか〝MORE〟コマンドで、その内容を表示することができます。TYPEコマンドは、ファイルのすべての内容を流れるように表示します。MOREコマンドは、1画面分ずつ、一時停止しながら表示します。

●ファイルのコピー(複製)を作るには、〝COPY〟コマンドを使用します。COPYコマンドは、コピー元のファイルと内容が同一の、新しいファイルを作成します。ファイルのコピーは、他のディスクに作成したり、ファイル名を変えて作成することができます。

●ファイル名を変更するには、〝REN〟コマンドを使用します。RENコマンドは、COPYコマンドのように新しいファイルを作成するのではなく、指定されたファイルの名前をその場でつけ変えます。

●不必要になったファイルは、〝DEL〟コマンドで、ディスクから削除(消去)することができます。ただし、いったん削除したファイルを復活させることはできないので、削除は慎重に行うようにします。

第4章

第5章 ディレクトリを操作する

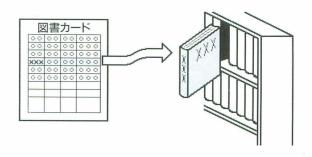
MS-DOSには、たくさんのファイルを効率良く管理するための整理方法が用意されています。このファイル整理に欠かせないのが「ディレクトリ」と呼ばれるものです。この章では、ディレクトリがどういうものか、どのように使うのか、といったことについて説明します。

ここでの操作には、運用ディスク＃1と、データディスクが1枚必要です。データディスクを持っていない方は、2.4節中の「フロッピィディスクについて」を参照して、データディスクを作成してください。

また、すべての操作は、ドライブAからMS-DOSを起動して、プロンプト〝A〉〟が画面に表示されている状態で行います。

5.1 ディレクトリとは

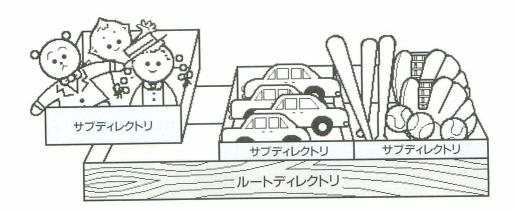
ディレクトリとは、ディスクに記録されているファイルの名簿のようなもので、各ファイルに関する情報を1つにまとめた表のような形をしています。つまり、ディスクの中には、それぞれのファイルの内容とは別に、各ファイルの名前や大きさ、作成された日時、そのファイルがディスクのどの場所に記録されているかを記録した表（ディレクトリ）があるのです。

ディスクのファイル一覧を見るときには、DIRコマンドを実行しました。このDIRコマンドは、ファイルの登録簿であるディレクトリの情報を表示していたのです。DIRコマンド（DIRはDIRECTORYの略）というわけです。

▶ルートディレクトリとサブディレクトリ

ディスクをフォーマット（初期化）した時点では、「ルートディレクトリ」と呼ばれるたった１つのディレクトリが作成されます。このディスクをそのまま使っていると、すべてのファイルをこの１つのディレクトリが管理することになります。ファイルの数が少ない場合は、ルートディレクトリだけでも十分管理できますが、ファイルが増えてくると大変です。DIRコマンドで50個や60個のファイル名が表示される様子を想像してみてください。目的のファイルを見つけるだけで一苦労というものです。

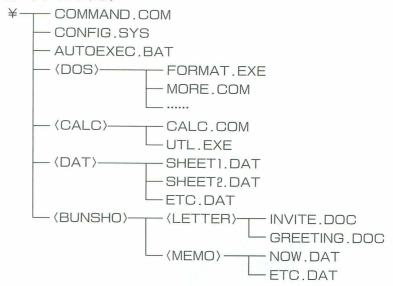
そこで、MS-DOSでは、複数のディレクトリを持てるようになっています。みなさんは、新しいディレクトリを自由に作ることができるのです。この新しいディレクトリを、元のルートディレクトリに対して「サブディレクトリ」と呼びます。サブディレクトリには、ファイルと同じ規則で名前（「ディレクトリ名」と呼びます）を付けますが、一般的にディレクトリ名には拡張子を付けないことが多いようです。

参照：ファイル名の付け方➡「2.2　ファイルの基礎知識」

ルートディレクトリには名前はありませんが、“¥”記号で表すことができます。“¥”がルートディレクトリの名前だと考えてもよいでしょう。

階層ディレクトリ構造

サブディレクトリを使用すると、たとえば、文書ファイルは１つのディレクトリに集め、プログラムファイルは別のディレクトリに集めるといったように、内容に応じてファイルを分けて管理することができます。

ただしこれらのディレクトリは、それぞれ独立して並列に並んでいるわけではありません。日本という国が、都道府県に分かれ、さらに市町村に分かれるように、１つのディスクの中身も、ルートディレクトリの中にサブディレクトリがあり、その中にさらに部分的なサブディレクトリがある、というように階層的な構造になっています。

実際のディレクトリ構造を次に示しましょう。

この例では、ルートディレクトリが３つのファイルと４つのサブディレクトリ（DOS、CALC、DAT、BUNSHO）を管理し、４つのサブディレクトリがそれぞれファイルやサブディレクトリを管理しています。このように、ディレクトリは必要に応じて何段も重ねることができます。また、ディレクトリが異なっていれば、同じ名前のファイルを複数作ることもできます（例では、ETC.DATというファイルが２つ作られています）。

重なったディレクトリでは、ディレクトリの関係を親子になぞらえて、１段上のディレクトリを「親ディレクトリ」と呼びます。例では、LETTERの親ディレクトリはBUNSHO、CALCの親ディレクトリはルートディレクトリになります。

5.2 サブディレクトリを作る（MDコマンド）

新しくサブディレクトリを作るには、MD（メイクディレクトリ）コマンドを使います。たとえば、ルートディレクトリに新しく〝CASE〞というディレクトリを作る場合は、次のように入力します。

MD　CASE⏎

このようにMDコマンドでは、コマンド名に続けて、新しく作るディレクトリの名前を指定します。ディレクトリ名の付け方は、ファイル名の付け方と同じです。ただし、親ディレクトリの中にすでにあるファイルやサブディレクトリの名前と同じものは付けられません。

MDはMKDIRを略したコマンドです。〝MD〞の代わりに〝MKDIR〞と入力することもできます。

それでは実際に操作してみましょう。ドライブAにデータディスクをセットしてください。いま、データディスクにはルートディレクトリだけが用意されています。ここに、新しく〝BUNSHO〞というサブディレクトリを作ってみましょう。

1 まず、ルートディレクトリの中に同じ名前のファイルやディレクトリがないことを確かめます。プロンプトに続けて〝DIR　BUNSHO⏎〞と入力してください。

```
A>DIR BUNSHO

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは A:¥

ファイルが見つかりません.

A>
```

〝BUNSHO〞がないことが確認できました。なお、「ディレクトリは　A:¥」というメッセージの「¥」は、ルートディレクトリを表しています。現在表示しているファイル情報は、ルートディレクトリのものだという意味です。

第5章

2 では、新しいディレクトリ"BUNSHO"を作りましょう。プロンプトに続けて"MD　BUNSHO[⏎]"と入力してください。

```
A>MD BUNSHO

A>
```

特にメッセージは表示されず、プロンプトに戻ります。

3 "BUNSHO"ができているかどうか確認してみましょう。今度は"DIR[⏎]"と入力してください。

```
A>DIR

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは A:¥

BUNSHO       <DIR>     91-09-11   16:33
        1 個のファイルがあります.
  1249280 バイトが使用可能です.

A>
```

BUNSHOディレクトリが、確かに作成されています。DIRコマンドは、ファイルとディレクトリを区別するために、ファイルにはファイルの大きさを、ディレクトリには〈DIR〉と表示します。

5.3 ディレクトリを移動する（CDコマンド）

サブディレクトリを利用すると、1つのディスクに複数のディレクトリができることになります。しかし、ディレクトリがいくつあっても、一度に使用できるディレクトリは1つです。MS-DOSがそのとき使用しているドライブをカレントドライブと呼びましたが、同じようにMS-DOSが使用しているディレクトリを「カレントディレクトリ」と呼びます。カレントドライブ同様、カレントディレクトリも移動することができます。カレントディレクトリを移動するコマンドは"CD（チェンジディレクトリ）"コマンドです。

たとえば、カレントディレクトリを、前節で作成したBUNSHOディレクトリに移すには、次のように入力します。

CD　BUNSHO⏎

CDはCHDIRを略したコマンドです。"CD"の代わりに"CHDIR"と入力することもできます。

また、ディレクトリ名を指定しないで"CD⏎"とだけ入力すると、カレントディレクトリが表示されます。DIRコマンドと同様、カレントディレクトリを確認するのに便利です。

では、実際にディレクトリを移してみましょう。今、ドライブAには前節でBUNSHOディレクトリを作成したデータディスクがセットされています。

1 カレントディレクトリをルートディレクトリからBUNSHOディレクトリに移してみましょう。プロンプトに続けて"CD　BUNSHO⏎"と入力してください。

```
A>CD BUNSHO
A>
```

すぐにプロンプトに戻ります。

2 本当にカレントディレクトリが、BUNSHOに移ったかどうか確認してみます。まず"DIR⏎"と入力してみましょう。

第5章

```
A>DIR

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは A:¥BUNSHO

.            <DIR>      91-09-11   16:33
..           <DIR>      91-09-11   16:33
         2 個のファイルがあります.
   1249280 バイトが使用可能です.

A>
```

メッセージに「ディレクトリはA：¥BUNSHO」と表示されています。確かに移動できました。なお、〝.〟と〝..〟という2つのサブディレクトリは、新しいディレクトリを作ると自動的に作成されます。〝.〟はそのディレクトリ自身(この場合はBUNSHO)を、〝..〟は親ディレクトリ(この場合はルートディレクトリ)を表しているもので、特に意味はありません。ただ、これらの記号はディレクトリを指定する場合に使えます。次の操作で使ってみましょう。

3 今度はルートディレクトリに移ってみます。コマンドは〝CD　¥[⏎]〟でも良いのですが、ここではカレントディレクトリの親ディレクトリを表す〝..〟記号を使ってみましょう。ピリオドを2つ使って、〝CD　..[⏎]〟と入力してみてください。

```
A>CD ..

A>
```

4 今度はCDコマンドでカレントディレクトリを確認してみましょう。〝CD〟とだけタイプして[⏎]キーを押してください。

```
A>CD
A:¥

A>
```

確かにルートディレクトリに移動していることがわかります。

5.4 ディレクトリ名を変える（RENDIRコマンド）

参照：ファイル名の変更→「4.4　ファイル名を変える」

ファイル名と同じように、ディレクトリ名もあとから付け変えることができます。ディレクトリ名を変えるには、RENDIR（リネームディレクトリ）コマンドを使います。たとえば、"WORK"というディレクトリ名を"JOB"に変更する場合は、次のように入力します。

RENDIR　WORK　JOB⏎

では実際に操作してみましょう。RENDIRコマンドは外部コマンドなので、実行するためにはシステムディスクが必要です。運用ディスク＃1をドライブAに、先ほどディレクトリを作ったデータディスクをドライブBにセットしてください。

外部コマンドを実行する場合は、カレントディレクトリをRENDIRのコマンドファイルが入ったところに移すか、コマンド名の前にパス名(5.6節、5.8節参照）を付けて実行します。

1 まず、変更前のディレクトリ名を確認します。"DIR　B:⏎"と入力してください。

```
A>DIR B:

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは B:¥

BUNSHO       <DIR>      91-09-11   16:33
        1 個のファイルがあります.
  1249280 バイトが使用可能です.

A>
```

"BUNSHO"があります。これを"TEXT"に変えましょう。

2 プロンプトに続けて、"RENDIR　B:BUNSHO　TEXT⏎"と入力します。

```
A>RENDIR B:BUNSHO TEXT

A>
```

3 変更されたかどうか確認してみましょう。もう一度〝DIR　B:⏎〟と入力してください。

```
A>DIR B:

 ドライブ B: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは B:¥

TEXT         <DIR>      91-09-11   16:33
        1 個のファイルがあります.
  1249280 バイトが使用可能です.

A>
```

〝BUNSHO〟がなくなって代わりに〝TEXT〟になっています。

5.5 サブディレクトリを削除する（RDコマンド）

不必要になったサブディレクトリを削除するには、RD（リムーブディレクトリ）コマンドを使います。たとえば、〝TEMP〟というサブディレクトリを削除するには、次のように入力します。

RD　TEMP⏎

ただし、削除したいサブディレクトリ（この場合TEMP）に、1つでもファイルやサブディレクトリが作られていると、削除はできません。サブディレクトリを削除する場合には、あらかじめその中にあるファイルやサブディレクトリをすべて削除しておく必要があります。また、カレントディレクトリも削除できません。カレントディレクトリを削除したい場合は、CDコマンドで親ディレクトリを移動してから行ってください。

RDはRMDIRを略したコマンドです。〝RD〟の代わりに〝RMDIR〟と入力することもできます。

それでは、実際にサブディレクトリを削除してみましょう。ドライブAにデータディスクをセットしてください。データディスクのサブディレクトリ〝TEXT〟を削除します。

1 まず、"TEXT"の中にファイルやサブディレクトリがあるかどうか確認します。"DIR　TEXT⏎"と入力してください。

```
A>DIR TEXT

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは A:¥TEXT

.            <DIR>      91-09-11   16:33
..           <DIR>      91-09-11   16:33
        2 個のファイルがあります.
  1249280 バイトが使用可能です.

A>
```

"."と".."の2つのディレクトリ（これらはディレクトリを作成したときに自動的に作られます）しかありませんので、"TEXT"を削除することができます。

2 それでは、"RD　TEXT"と入力して⏎キーを押してください。

```
A>RD TEXT

A>
```

3 削除されたかどうか確認してみましょう。今度は"DIR⏎"を実行してください。

```
A>DIR

 ドライブ A: のディスクのボリュームラベルはありません.
 ディレクトリは A:¥

ファイルが見つかりません.

A>
```

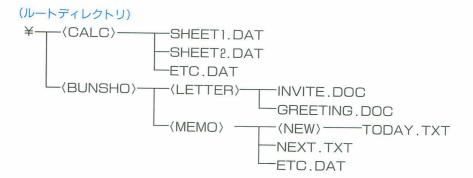
TEXTディレクトリの名前が表示されていないことで、たしかに削除されています。

5.6 ディレクトリ間のファイル指定

複数のディレクトリを使うようになると、ファイル操作にもひと工夫が必要になります。MS-DOSでは、カレントディレクトリのファイルはそのまま扱うことができますが、他のディレクトリのファイルを扱う場合には、「パス名」の指定を行います。

カレントドライブ以外のドライブにあるファイルを指定するときに、ドライブ名とファイル名を指定しましたが、これにディレクトリ名を付け加えたものがパス名です。ファイル名にパス名を付ければ、そのファイルがどこのドライブのどこのディレクトリのものかわかるので、どのファイルでも自由に操作することができるのです。

▶パス名について

パス名の表し方を説明しましょう。たとえば、次のような階層ディレクトリがあったとします。

ここで、ルートディレクトリの下のBUNSHOディレクトリのパス名は"¥BUNSHO"、さらにその下のMEMOディレクトリのパス名は"¥BUNSHO¥MEMO"と表します。このとき、先頭の"¥"記号はルートディレクトリを表しますが、残りの"¥"記号はディレクトリの区切り記号です。つまり、ルートディレクトリから目的のディレクトリに至るまでの道筋を、各ディレクトリ名を"¥"記号で区切って並べたものが、そのディレクトリのパス名になるわけです。

一般にルートディレクトリから始まって、ディレクトリ1、ディレクトリ2……という道順で表されるディレクトリnのパス名は、次のようになります。

したがって、パス名で表されるディレクトリの中のファイルは、次のように指定できます。

パス名¥ファイル名
　　↑
　区切り記号

たとえば、"¥BUNSHO¥MEMO"というディレクトリの中の"ETC.DAT"は、"¥BUNSHO¥MEMO¥ETC.DAT"と表すことができます。

このファイルを操作するときには、カレントディレクトリがどこであっても、次のように、コマンド実行の際に、パス名を付けて指定することができます。

```
DIR   ¥BUNSHO¥MEMO¥ETC.DAT
TYPE  ¥BUNSHO¥MEMO¥ETC.DAT
DEL   ¥BUNSHO¥MEMO¥ETC.DAT
```

▶絶対パスと相対パス

パス名は、いつでもルートディレクトリを基点にして指定しなければいけないわけではありません。カレントディレクトリを基準にして、そこからパス名を指定することもできます。たとえば、次のような階層ディレクトリがあったとします。

```
(ルートディレクトリ)
¥─┬─〈CALC〉──────┬─SHEET1.DAT
  │               ├─SHEET2.DAT
  │               └─ETC.DAT
  └─〈BUNSHO〉──┬─〈LETTER〉──┬─INVITE.DOC
                │             └─GREETING.DOC
                └─〈MEMO〉  ──┬─〈NEW〉────TODAY.TXT
                              ├─NEXT.TXT
                              └─ETC.DAT
```

第5章

ここで、カレントディレクトリがBUNSHOであった場合、NEWディレクトリは、次のようなパス名で表せます。

MEMO¥NEW　　　　（ルートディレクトリから指定すると　¥BUNSHO¥MEMO¥NEW）

パス名の左端に、ルートディレクトリを意味する“¥”記号がないことに注意してください。これは、BUNSHOというカレントディレクトリを基準として、NEWディレクトリの位置を相対的に表現したものです。このようなパス名を「相対パス」と呼びます。また、ルートディレクトリ（¥）から始まるパス名を「絶対パス」と呼びます。

絶対パスでは、カレントディレクトリの位置に関わらず、いつも同じ表記ができますが、指定するディレクトリの位置によっては、パス名が非常に長くなってしまいます。一方、相対パスでは、位置によっては簡単にパス名を表記することができますが、カレントディレクトリが動いてしまうと、同じ表記はできません。

相対パスでは、ディレクトリ名を指定する代わりに、親ディレクトリの記号“..”を使うことができます。たとえば前の例で、カレントディレクトリがNEWのとき、BUNSHOディレクトリは、「親の親」にあたりますから、次のように表記できます。

..¥..　　　　（絶対パスでは　¥BUNSHO）

また、たとえばカレントディレクトリがMEMOのとき、LETTERディレクトリは、親ディレクトリのサブディレクトリですから、次のように表記できます。

..¥LETTER　　　　（絶対パスでは　¥BUNSHO¥LETTER）

カレントディレクトリと、指定したいディレクトリの位置によって、絶対パスと相対パスを上手に使い分けてください。

5.7 ディレクトリ単位のファイル操作

階層ディレクトリ構造を利用してファイルを操作していると、ディレクトリの中のファイルを、ひとまとめにして扱いたい場合があります。ここでは、ディレクトリの中をまとめてコピーする方法や削除する方法についてお話します。

▶ディレクトリ単位のファイルのコピー（COPYコマンド）

COPYコマンドでは、コピー元とコピー先のファイル名を指定するとファイルのコピーができました。同様に、COPYコマンドで、コピー元とコピー先にディレクトリ名を指定すると、コピー元のディレクトリの中のファイルをすべてコピー先のディレクトリにコピーすることができます。

たとえば、カレントドライブの〝BUNSHO〟ディレクトリの中のファイルを、〝OLD〟ディレクトリにまとめてコピーしたい場合は、次のように入力します。

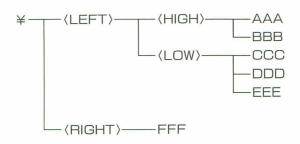
```
COPY  ¥BUNSHO  ¥OLD
```

COPYコマンドでコピーできるのは、ディレクトリの中のファイルだけです。指定したディレクトリにさらにサブディレクトリがある場合、そのサブディレクトリはコピーされません。サブディレクトリも一緒にコピーしたい場合は、XCOPYコマンドを使ってください。

COPYコマンドを実行すると、コピーされているファイル名が順に表示され、コピーが終わると「X個のファイルをコピーしました．」というメッセージが表示されます。

▶サブディレクトリも含めたファイルのコピー（XCOPYコマンド）

COPYコマンドでは、ディレクトリ中のファイルしかコピーできませんでした。ディレクトリ中のファイルもサブディレクトリも、まとめて一度にコピーするには、XCOPY（エックスコピー）コマンドを使います。

たとえば、次の図のような階層ディレクトリがあったとします。

ここで、LEFTディレクトリの中身をすべてRIGHTディレクトリにコピーする場合には、次のようにXCOPYコマンドを実行します。

```
XCOPY  ¥LEFT  ¥RIGHT  /S  /E⏎
```

XCOPYは外部コマンドです。実行する場合は、カレントディレクトリをXCOPYコマンドファイルが入ったところに移すか、コマンド名の前にパス名（5.6節、5.8節参照）を付けて実行します。

XCOPY実行後のディレクトリ構造は、次のようになります。

```
¥ ──┬─〈LEFT〉──┬─〈HIGH〉──┬─AAA
    │           │           └─BBB
    │           └─〈LOW〉───┬─CCC
    │                       ├─DDD
    │                       └─EEE
    └─〈RIGHT〉─┬─FFF
                 ├─〈HIGH〉──┬─AAA
                 │           └─BBB
                 └─〈LOW〉───┬─CCC
                             ├─DDD
                             └─EEE
```

▶ディレクトリ単位のファイルの削除

参照：DELコマンド
→「4.5　ファイルを削除する」

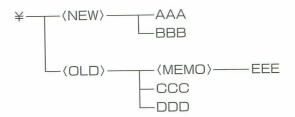
DELコマンドでも、ディレクトリ名を指定すれば、そのディレクトリの中のファイルを一度に削除することができます。たとえば、カレントドライブの"MEMO"ディレクトリ内のファイルを削除するには、次のように入力します。

DEL　¥MEMO⏎

ディレクトリ名を指定してDELコマンドを実行すると、

よろしいですか〈Y/N〉?

というメッセージが表示されます。ここで"Y"を入力すると削除が実行され、"N"を入力すると削除を中止します。ただし、削除されるのは、指定したディレクトリの中のファイルだけで、ディレクトリまでは削除されません。

たとえば、次のような階層ディレクトリがあったとします。

ここで、"DEL　¥OLD"を実行すると、ディレクトリ構造は次のようになります。

OLDディレクトリの中の2つのファイルは削除されましたが、MEMOディレクトリは削除されずに残ります。

5.8 カレントディレクトリにないコマンドを実行する

参照：外部コマンド→「2.1　コマンドの基礎知識」
パス名→「5.6　ディレクトリ間のファイル指定」

ドライブやディレクトリがいくつあっても、MS-DOSはカレントドライブのカレントディレクトリしか使うことができません。ですから、MOREコマンドやXCOPYコマンドのような外部コマンドを実行する場合は、カレントディレクトリをそのコマンドのファイルが入っているディレクトリに移すか、コマンド名の前にパス名を付けて実行する必要がありました。

しかし、コマンドファイルの入っていないドライブやディレクトリで作業するたびに、カレントディレクトリを移したり、パス名を指定したりするのは面倒です。そこで、MS-DOSには、入力されたコマンドのファイルがカレントディレクトリになければ、自動的に特定のディレクトリを捜す機能が用意されています。

この機能はPATH（パス）コマンドで設定します。たとえば、コマンドファイルがドライブBのルートディレクトリにセットされているならば、

```
PATH　B:¥⏎
```

というコマンドを実行しておくと、以後MS-DOSは、目的のコマンドをカレントディレクトリで捜し、そこになければ"B:¥"の中を捜すようになります。

コマンドファイルが複数のディレクトリに分かれて登録されている場合は、各ディレクトリを表すパス名を、セミコロン（;）で区切って並べます。たとえば、外部コマンドのファイルがドライブAの"BIN"に、アプリケーションプログラムのファイルがドライブBの"AP"にある場合は、次のようにPATHコマンドを実行します。

```
PATH　A:BIN;B:AP⏎
```

PATHコマンドでコマンドファイル（実行可能ファイル）の場所を指定しておけば、以後はカレントディレクトリがどこであっても、自由にコマンドを実行することができます。

PATHコマンドで設定するパス名を「コマンド検索パス」と呼びます。コマンド実行の際、MS-DOSがここに設定したディレクトリからコマンドを捜すからです。

固定ディスクを使っている場合など、いくつもディレクトリを分けてコマンドファイルを収めておくことになるでしょう。このような場合、よく使うコマンドの入ったディレクトリのパスは、いつもMS-DOSの起動時に設定しておくと良いでしょう。AUTOEXEC.BATというファイルの中にPATHコマンドを書き込んでおけば、指定したコマンド検索パスがMS-DOSの起動時に自動的に設定されます。AUTOEXEC.BATファイルについて詳しくは、「第6章　MS-DOSの仕組み」を参照してください。

5.9 まとめ

この章では、次のような事項を学びました。

●ファイルは、「ディレクトリ」によって管理されていますが、「階層ディレクトリ構造」を利用すると、便利に管理することができます。階層ディレクトリ構造は、「ルートディレクトリ」と、「サブディレクトリ」で構成されます。

●ルートディレクトリは、ディスクをフォーマットした時点で、各ディスクに1つずつ自動的に作成されるディレクトリで、記号〝¥〞で表されます。

●サブディレクトリは、ユーザーが自由に作ることができるディレクトリで、〝MD〞コマンドで作成します。サブディレクトリには、ファイル名と同じルールで、ユーザーが好きな「ディレクトリ名」をつけることができます。また、サブディレクトリの下には、さらにサブディレクトリを作ることができます。

●MS-DOSが、そのとき使用しているディレクトリを「カレントディレクトリ」と呼びます。カレントディレクトリを変更するには、〝CD〞コマンドを使用します。

●階層ディレクトリ構造の中のディレクトリは、「絶対パス名」と「相対パス名」の2通りの方法で指定でき、これらのパス名とファイル名を組み合わせて使用することもできます。

●カレントディレクトリにない外部コマンドを実行するには、〝PATH〞コマンドによって、そのコマンドを記録しているディレクトリを設定しておくと便利です。

●〝COPY〞コマンドや〝DEL〞コマンドで、ファイル名の代わりにディレクトリ名を指定すると、そのディレクトリに含まれているすべてのファイルを指定したことになります。また、COPYコマンドの代わりに、〝XCOPY〞コマンドを使用すると、ディレクトリ中のファイルだけではなくサブディレクトリもコピーすることができます。

●ディレクトリ名は、〝RENDIR〞コマンドで変更することができます。また、不必要になったサブディレクトリは、そのディレクトリを空っぽにした後に、〝RD〞コマンドで削除することができます。

第6章 MS-DOSの仕組み

この章では、MS-DOSシステムの仕組みやその働きについて説明します。MS-DOSがどのようにして動いているのか、それぞれのファイルの役割はどうなっているのか、といった知識を通して、より自由にMS-DOSを使いこなしてゆくことができるでしょう。

6.1 コマンド実行の仕組み

ここでは、みなさんが入力したコマンドがどのように実行されるかについて解説します。

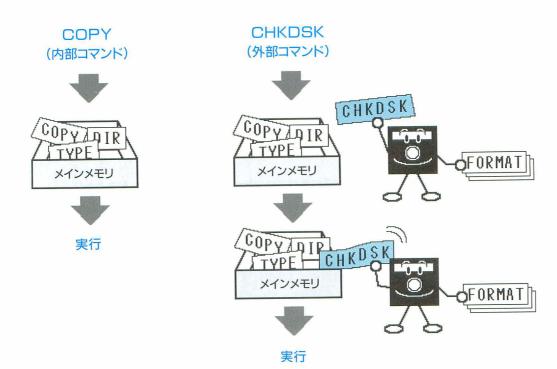
▶内部コマンドと外部コマンド

参照：内部コマンド、外部コマンド➡「2.1 コマンドの基礎知識」および「付録D MS-DOSコマンド一覧」

MS-DOSのコマンドに「内部コマンド」と「外部コマンド」の2種類があることは、第2章でお話ししました。この2種類のコマンドについて、もう少し詳しく説明しましょう。

内部コマンドは1つ1つファイルとして独立しておらず、すべてCOMMAND.COMファイルの中に含まれています。COMMAND.COMファイルは、MS-DOSが起動される際にコンピュータ本体のメモリに読み込まれ、本体の電源を切るまでずっとメモリに置かれています（常駐）。ですから内部コマンドは、MS-DOSが起動している間はいつでも使用することができます。

一方、外部コマンドは、1つ1つがコマンドファイルとしてディスクの中に置かれていて、必要に応じて（コマンド名が入力されると）メモリに呼び込まれて実行されます。外部コマンドのファイルは、拡張子が〝.COM〟〝.EXE〟のファイルです。アプリケーションソフトのプログラムファイルや自分で作ったプログラムファイルなども、この2つの拡張子が付いていれば、外部コマンドと全く同様に扱われます。また、拡張子が〝.BAT〟のファイルも、外部コマンドと同じように扱われます。

これらのコマンドファイルは、コマンド名を入力するときに、そのファイルがどこにあるかを適切に指示してあげなければなりません。具体的には、コマンド名の前にパス名を付けて実行するか、あらかじめPATHコマンドで、コマンド検索パスを指定しておきます。

▶コマンド実行の流れ

コマンド実行の際、内部コマンドと外部コマンド（コマンドファイル）とは、どのように区別されるのでしょうか。キーボートから入力されたコマンドが実行されるまでの流れを追ってみましょう。

キーボードからコマンドを入力する

❶内部コマンドか？

MS-DOSは、入力された文字と一致する内部コマンドを捜します。一致する内部コマンドがあったらそれを実行します。なければ②の処理を行います。

❷カレントディレクトリに外部コマンド（コマンドファイル）があるか？

MS-DOSは、入力されたコマンド（外部コマンドやその他のプログラム）のファイルがカレントディレクトリにあるかどうか捜し、あったらそれを実行します。なければ③に進みます。

MS-DOSが各ディレクトリからコマンドファイルを捜すときには、（1）拡張子が".COM"のファイル→（2）拡張子が".EXE"のファイル→（3）拡張子が".BAT"のファイル、の順で捜します。したがって、たとえばMEIREI.COMとMEIREI.BATのように、同じ名前（主ファイル名）のコマンドファイルがあった場合には、MEIREI.COMが実行されます。

❸コマンド検索パスに外部コマンド（コマンドファイル）があるか？

MS-DOSは、PATHコマンドで設定されているディレクトリを順に捜し、入力されたコマンド（外部コマンドやその他のプログラム）のファイルがあったらそれを実行します。なければ④に進みます。

コマンド名の前にパス名を付けて実行した場合は、PATHコマンドでコマンド検索パスが設定されていても、そのディレクトリでしかコマンドを捜しません。

❹エラーメッセージを表示する

コマンドファイルがみつからなかったので、MS-DOSは「コマンドまたはファイルが見つかりません」というエラーメッセージを表示して、プロンプトに戻ります。

このように、MS-DOSは入力されたコマンドがまず内部コマンドであるかどうか調べ、次にカレントディレクトリ→コマンド検索パスの順に外部コマンド（コマンドファイル）を捜して、コマンドを実行しています。

6.2　MS-DOS起動の仕組み

ここでは、MS-DOSの起動のしくみについて説明します。コンピュータに電源を入れてから、MS-DOSのプロンプトが表示されるまでの間に、何が行われているのかを見ていきましょう。

❶電源ON

コンピュータ本体の電源がONになると、コンピュータ本体に内蔵されているプログラムによって、ハードウェアのチェックが行われます。

❷システムディスクをさがす

検査が終了すると、コンピュータ内蔵プログラムは、接続されているドライブを調べて、MS-DOSのシステムファイルが収められている「システムディス

ク」を捜します。

❸IO.SYS、MSDOS.SYSを読み込む

コンピュータ内蔵プログラムは、見つかったシステムディスクから、MS-DOSのシステムファイル（IO.SYS、MSDOS.SYS）を、本体のメモリに読み込みます。

IO.SYS、MSDOS.SYSは、MS-DOSを起動するために必要なファイルです。IO.SYSは、主にハードウェアを制御し、MSDOS.SYSはファイル管理やメモリ管理などMS-DOSの中心的な仕事を行います。この2つのファイルは、誤って削除されたり変更されたりしないように、〝隠されたファイル〞になっており、DIRコマンドでは表示されません。

参照：CONFIG.SYSファイル➡「6.4 システムファイルの仕組み」

❹CONFIG.SYSによる環境設定を行う

MS-DOSは、システムディスクのルートディレクトリにあるCONFIG.SYSファイルを調べ、その内容に従って、日本語入力に必要なプログラムや周辺装置を制御するプログラムなどを本体のメモリに読み込みます。

❺COMMAND.COMファイルを読み込む

MS-DOSは、COMMAND.COMファイルを読み込みます。これで、ひとまずMS-DOSが起動した状態となります。

参照：AUTOEXEC.BATファイル➡「6.3 バッチ処理の仕組み」

❻AUTOEXEC.BATファイルを捜す

MS-DOSは、システムディスクのルートディレクトリでAUTOEXEC.BATファイルを捜します。AUTOEXEC.BATがあった場合は、その内容の一連のコマンドを実行します。AUTOEXEC.BATファイルがない場合は、日付と時刻の設定を求めるメッセージを表示します。

インストール後のMS-DOSのシステムディスク（運用ディスク）を使ってMS-DOSを起動するとメニュー画面が表示されます。これは、用意されているAUTOEXEC.BATファイルにMENUコマンドを実行するような指定がしてあるからです。

6.3 バッチ処理の仕組み

MS-DOSのファイルの中で、拡張子が〝.BAT″のものをバッチファイルと呼びます。バッチファイルはバッチ処理と呼ばれる作業を行うためのファイルで、このファイルの中にはMS-DOSのコマンドが書かれています。ここでは、このバッチファイルとバッチ処理について説明しましょう。また、AUTOEXEC.BATというファイル名の、特別なバッチファイルについても説明します。

▶バッチ処理とバッチファイル

MS-DOSには、たった1回のキー入力で、複数のコマンドを次々に実行できる便利な機能があります。この機能が「バッチ処理」です。いくつかのコマンドで成り立つ同じ作業を繰り返す場合などに、大変役に立つ機能です。

バッチ処理は、まとまった一連の作業に使うコマンドをあらかじめファイルに収めておいて、そのファイルを新たなコマンドファイルとして実行する仕組みになっています。このコマンドファイルを「バッチファイル」と呼びます。つまりバッチファイルの中身は、いくつかのコマンド名を書き連ねたものなのです。

バッチファイルは、必要に応じてみなさんが自由に作ることができますが、ファイル名の拡張子には必ず〝.BAT″をつけなければなりません。MS-DOSは、〝.BAT″という拡張子で、そのファイルがバッチファイルであることを認識します。バッチファイルを実行してバッチ処理を実行するには、MS-DOSの外部コマンド同様、そのファイル名（拡張子は不要）を入力すればOKです。バッチファイルに書かれたコマンドが、次々に実行されていきます。

●バッチファイルの作成と実行

バッチファイルはコマンド名を書いた文字のファイルですから、作成するときはワードプロセッサやエディタなどの文書編集ソフトを使います。ここでは、例として簡単なバッチファイルを紹介しましょう。次に示すものは、ドライブBにセットした新しいディスクをフォーマットして、そのディスクのファイル一覧を確認してから、その時の時間を表示するバッチファイル〝TEST.BAT″の内容です。

```
FORMAT  B:
DIR  B:
TIME
```

〝TEST.BAT″に書かれたこの3つのコマンドは、〝TEST⏎″と入力するだけで、連続して実行されます。

バッチ処理の注意を以下にまとめます。

- バッチファイルを作る際、ファイルの各行には、それぞれのコマンドをキーボードから入力する場合と同じものを書きます。つまり、バッチファイルの各行が、そのコマンドを入力する場合のコマンド行に相当します。
- バッチファイルのファイル名は、ファイル名の規則にしたがって自由に付けることができます。ただし、拡張子には必ず〝.BAT〟を付けてください。

バッチファイルのファイル名は自由に付けることができますが、内部コマンド名や外部コマンド名と重複しないようにしてください。MS-DOSは、コマンドが入力されると、内部コマンド→外部コマンド→バッチファイルの順に捜すので、名前が重複していると、同じ名前の内部／外部コマンドの方が実行されてしまいます。

- バッチファイルのファイル名に〝AUTOEXEC.BAT〟と付けると、MS-DOSの起動と同時に実行される特別なファイルとなります。
- バッチ処理を実行するときは、バッチファイルのファイル名を入力します。その際、拡張子は省略できます。
- バッチ処理の実行を途中で中止する場合は、CTRLキーを押しながらCキーを押してください。すると「バッチ処理を中止しますか 〈Y/N〉」というメッセージが表示されますので、Yキーを押します。このときNキーを押すと、そのとき処理していたコマンドだけが中止され、バッチファイルの次の行のコマンドから実行が再開されます。
- バッチ処理を実行中に、バッチファイルの入ったディスクを交換すると（たとえばDISKCOPYコマンド使用のとき）、「バッチファイルのあるディスクをドライブに差し込み、どれかキーを押してください」というメッセージが表示されます。メッセージに従って、ディスクを交換してください。

●バッチファイルの例

バッチファイルは、簡単に作成できて、コマンド入力の手間を省くことができる便利なファイルです。バッチファイルの効果的な例をいくつか挙げてみます。

特定のコマンドを何度も繰り返して入力する場合

例：フロッピィディスクのバックアップコピーの作成

FORMAT　B:	ドライブBのディスクをフォーマットする
DISKCOPY　A:　B:	ドライブAのディスクの内容をすべてドライブBにコピーする
DISKCOPY　A:　B:　/V	ドライブAのディスクとドライブBのディスクを比べる

第6章

/VスイッチをつけたDISKCOPY（ディスクコピー）コマンドは、指定されたディスクの内容を比較する外部コマンドです。詳しくは「付録D MS-DOSコマンド一覧」を参照してください。

長いコマンド（コマンドオプションが多い場合など）を入力する場合

例：コマンド検索パスを設定する。ドライブAのルートディレクトリ（¥）、¥BIN、¥APL、およびドライブBのルートディレクトリ（¥）にコマンド検索パスを設定する。

```
PATH　A:¥;A:¥BIN;A:¥APL;B:¥
```

▶自動実行バッチファイル（AUTOEXEC.BATファイル）

〝AUTOEXEC.BAT〞ファイルは、自動実行バッチファイルと呼ばれる特別なバッチファイルです。このファイルは、MS-DOSが起動するとすぐに、キー入力しなくても自動的に実行されます。

MS-DOSは起動すると、ルートディレクトリにAUTOEXEC.BATファイルがあるかどうか捜し、見つけるとそれを自動的に実行します。ですから、たとえばパスの設定やアプリケーションソフトの実行など、起動時にいつも行う手順をAUTOEXEC.BATファイルに書き込んでおくと便利です。

たとえば、以下のような内容のAUTOEXEC.BATファイルを作成すると、起動時にコマンド検索パスを設定し、日付と時刻の設定を行います。

参照：PATHコマンド➡「5.8　カレントディレクトリにないコマンドを実行する」
DATE、TIMEコマンド➡「付録D　MS-DOSコマンド一覧」

```
PATH A:¥;A:¥BIN;A:¥APL;B:¥
DATE
TIME
```

参照：MENUコマンド➡「第3章　メニューの使い方」

購入したばかりのMS-DOSのシステムディスクには、MENUコマンドを実行するAUTOEXEC.BATファイルが作られていますが、この内容をエディタやワードプロセッサで自由に書き換えて、あなただけのAUTOEXEC.BATファイルを作ることができます。なお、AUTOEXEC.BATは、必ずMS-DOSを起動するディスクのルートディレクトリに作成してください。

6.4 システムファイルの仕組み

MS-DOSファイルの中で、拡張子に".SYS"または".DRV"のついたファイルはシステムファイルと呼ばれ、特別の働きをします。ここでは、システムファイルの役割を通して、MS-DOSシステムの環境設定の仕組みを学びましょう。

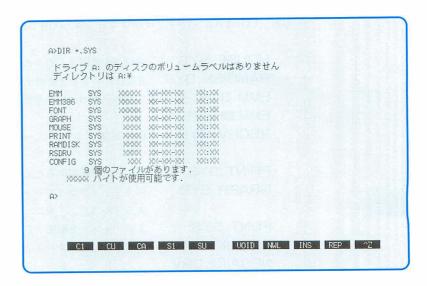
▶デバイスドライバとは

MS-DOSでは、ディスプレイはもちろんのこと、マウスやプリンタなど、さまざまな周辺装置を使うことができます。これらの周辺装置（デバイス）を使うには、専用のプログラムが必要です。デバイスドライバは、こういった周辺装置制御のためのプログラムです。MS-DOSの起動時に、MS-DOSシステムに組み込まれて働くため、システムファイルとも呼ばれます。

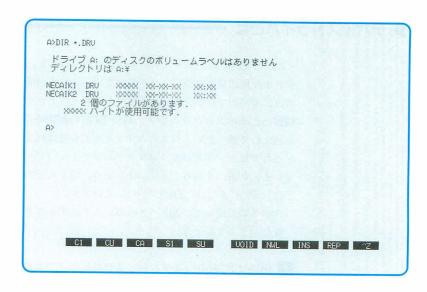
それでは、一体どのようなシステムファイル（デバイスドライバ）が用意されているのか調べてみることにしましょう。ほとんどのシステムファイルは、拡張子に".SYS"または".DRV"が付いています。

次の手順に従って、MS-DOSのシステムディスクにあるシステムファイルの一覧を見てみましょう。

1 MS-DOSのシステムディスクをドライブAにセットして、MS-DOSを起動します。

2 プロンプトに続けて"DIR　＊.SYS⏎"と入力します。

拡張子が".SYS"であるすべてのファイルが表示されます。

表示されるファイルの数や種類は、各MS-DOSシステムによって異なります。

3 続けて"DIR　＊.DRV⏎"と入力します。

拡張子が".DRV"であるすべてのファイルが表示されます。

これらのファイルが何のデバイスドライバであるか、簡単に説明しましょう。なお、CONFIG.SYSファイルについては、次節で説明します。

MOUSE.SYS　マウスを使用するためのファイル
RAMDISK.SYS　RAMディスクを使用するためのファイル
EMM.SYS　1MB以上のメモリを使用するためのファイル
EMM386.SYS　〃
RSDRV.SYS　RS-232Cインターフェイスを使用するためのファイル
PRINT.SYS　プリンタを使用するためのファイル
GRAPH.SYS　グラフィックライブラリ（GRAPH.LIB）を使用するためのファイル
FONT.SYS　文字フォントを編集するためのファイル
NECAIK1.DRV　日本語入力用ソフトウェア（AIかな漢字変換用）
NECAIK2.DRV　〃（〃）
NECDIC.DRV　〃（文節かな漢字変換用）

このように、各周辺装置（デバイス）を使用するため、それぞれの制御用プログラム（デバイスドライバ）が用意されています。この中で、日本語入力機能だけは「周辺装置」とはちょっと違うような気もしますが、MS-DOSの本体では処理できない機能なので、周辺装置として扱われています。

MS-DOSは、みなが共通で使う機能以外は、各自が必要な機能を選択・追加できるように、別のファイル（デバイスドライバ）になっています。それぞれの機能ごとにファイルが分かれているので、自分で使いたいものを選んで自分に合ったMS-DOSのシステムを作ることができます。

ただし、デバイスドライバによって機能を追加するには、どのデバイスドライバを使うのかという情報を、あらかじめ〝CONFIG.SYS〟というファイルに書き込んでおかなければなりません。日本語入力やプリンタを使うためには、それぞれのデバイスドライバと、それを使うという情報が書き込まれたCONFIG.SYSが必要なのです。

▶CONFIG.SYSファイルの機能

CONFIG.SYSファイルは、MS-DOSが動作する環境を設定するシステムファイルで、特にシステム構築ファイルと呼ばれます。CONFIG.SYSは、システムディスクのルートディレクトリにあり、MS-DOSの起動時に、前節で説明したデバイスドライバの追加や、MS-DOSの基本機能の設定の変更を行います。

まず、実際にCONFIG.SYSファイルの中身を見てみることにしましょう。CONFIG.SYSは文字のファイルですから、TYPEコマンドでその内容を表示することができます。

1 MS-DOSのシステムディスクをドライブAにセットして、MS-DOSを起動します。

2 CONFIG.SYSは、MS-DOSを起動したディスクのルートディレクトリにあります。プロンプトに続けて"TYPE　CONFIG.SYS⏎"と入力します。

```
A>TYPE CONFIG.SYS
DEVICE=EMM386.SYS
DEVICE=PRINT.SYS
DEVICE=RSDRV.SYS
DEVICE=NECAIK1.DRV
DEVICE=NECAIK2.DRV B:NECAI.SYS

A>

 C1   CU   CA   S1   SU     VOID  NWL  INS  REP  ^Z
```

表示される内容は、システムによって異なる場合があります。

これがCONFIG.SYSファイルの内容です。"DEVICE="に続けて、前節で説明したデバイスドライバのファイル名が書き込まれています。"DEVICE"は、MS-DOSにデバイスドライバを組み込むためのCONFIG.SYSファイルのコマンドです。このCONFIG.SYSでは、プリンタや日本語入力機能などを利用できるように設定してあることがわかります。

〝DEVICE″の他にも〝BUFFERS″や〝FILES″などのコマンドがあります。これらのコマンドについて、以下にまとめてみました。

CONFIG.SYSファイルのコマンドは、他にもいろいろと用意されています。詳しくは『ユーザーズリファレンスマニュアル』（別売）を参照してください。

●DEVICE（デバイス）

〝DEVICE″は、MS-DOSシステムに機能を追加するためのコマンドです。〝DEVICE＝″に続けて、使用したいデバイスドライバのファイル名を指定します。１つのDEVICEコマンドには、１つのデバイスドライバしか指定できません。いくつも指定したい場合には、その数だけDEVICEコマンドを使ってください。

例：
```
DEVICE=MOUSE.SYS
DEVICE=PRINT.SYS
DEVICE=NECAIK1.DRV
DEVICE=NECAIK2.DRV
```

なお、指定するデバイスドライバのファイルが、サブディレクトリの中に登録されている場合は、パス名を付けて指定します。たとえば、〝MOUSE.SYS″が〝¥DOS″というディレクトリにある場合、CONFIG.SYSファイル内での指定は、次のようになります。

```
DEVICE=¥DOS¥MOUSE.SYS
```

デバイスドライバは、MS-DOSのシステムディスクに用意されているものだけではありません。周辺装置や、アプリケーションプログラムに用意されているものもあります。この場合、デバイスドライバの拡張子は必ずしも〝.SYS″または〝.DRV″とは限りませんので、CONFIG.SYSファイルに登録するときには、それぞれのマニュアルで確認するようにしてください。

●FILES（ファイルズ）

MS-DOSが同時に使用するファイルの数を指定するコマンドです。一般的には10～20くらいに設定しますが、使用するアプリケーションソフトによって適した数値は異なります。データベースソフトなど、多くのファイルを同時に用いる場合は、20～30くらいに設定してください。設定を省略したときにMS-DOSが自動的に設定する値（既定値）は、８です。

●BUFFERS（バッファーズ）

MS-DOSがディスクを読み書きする際に、データを一時的に保存するメモリ（ディスクバッファ）の容量を指定するコマンドです。一般的に10〜20くらいに設定しますが、使用するアプリケーションソフトや、ディスクの使用状況によって適した数値は異なります。ワードプロセッサなどで大量のデータを扱う場合や、サブディレクトリを多く用いる場合には、20〜30くらいに設定してください。メモリが640Kバイト以上の機種では、設定を省略したときにMS-DOSが自動的に設定する値（既定値）は、20です。

▶CONFIG.SYSファイルを書き換えるには

参照：CUSTOMコマンド➜『インストールガイド』、「付録D MS-DOSコマンド一覧」

CONFIG.SYSファイルは、内容がすべて文字だけのファイルなので、EDLINやSEDITなどのエディタや、ワードプロセッサなどで作成または変更することができます。また、MS-DOSには、CONFIG.SYSファイルを簡単に作成するためのコマンド〝CUSTOM（カスタム）〟も用意されています。なお、CONFIG.SYSは、MS-DOSを起動するディスクのルートディレクトリに置いておかないと機能しません。

CONFIG.SYSは、MS-DOSの起動時に読み込まれて、その内容に従った設定が行われます。新しくCONFIG.SYSを作成したり、変更したりしたときは、リセットボタンを押してMS-DOSを起動し直してください。

6.5 まとめ

この章では、次のような事項を学びました。

●MS-DOSのコマンドには、「内部コマンド」と「外部コマンド」の2種類があります。入力されたコマンドは、一定の順序で捜し出されて実行されます。

●MS-DOSが起動するときには、一定の順序でファイルが捜し出されて読み込まれます。起動時には、システムディスクの〝CONFIG.SYS〟ファイルと〝AUTOEXEC.BAT〟ファイルが、重要な働きをします。

●「バッチファイル」を利用すると、連続して実行したいコマンドをまとめて登録しておくことができます。バッチファイルには、必ず〝.BAT〟という拡張子をつけます。また、〝AUTOEXEC.BAT〟という名前のバッチファイルは、MS-DOSの起動時に自動的に実行されるバッチファイルなので、これを利用すると起動時に毎回行う処理を自動的に実行することができて便利です。

●拡張子が〝.SYS〟や〝.DRV〟のファイルは「システムファイル」とよばれ、周辺装置などを制御するためのプログラムが納められています。これらのファイルは、使用するシステムに接続された周辺装置に応じて、必要なものを本体に組み込んで使用します。

●システムファイルの組み込みには、〝CONFIG.SYS〟ファイルを使用します。CONFIG.SYSファイルは、システムファイルの組み込みの他にも、いくつかのシステムの設定を行います。CONFIG.SYSファイルはCUSTOMコマンドで作成（修正）することができます。

第7章 スクリーンエディタ（SEDIT）の使い方

この章では、MS-DOSに付属しているスクリーンエディタ「SEDIT」の操作方法について解説します。このSEDITはカーソルキーやファンクションキーなどを利用して画面上で文字を見ながら最大250行（約10Kバイト）までのファイルを編集できる「スクリーンエディタ」です。

SEDITを使用すると、CONFIG.SYSファイルやAUTOEXEC.BATファイルの変更も、簡単に行うことができます。

MS-DOSには、従来からの「EDLIN」というエディタも付属しています。EDLINは、行の番号を指定しながら編集する「ラインエディタ」です。

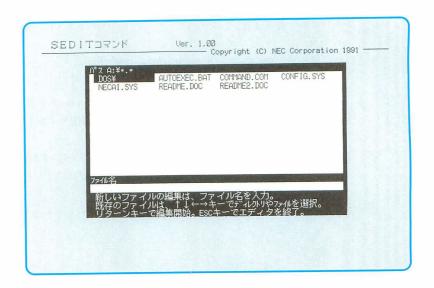
7.1 SEDITの起動方法

SEDITの起動方法は、起動後にファイル名を選択する方法と、起動時にファイル名を指定する方法があります。

▶起動後にファイル名を選択する方法

これは、もっとも簡単な起動方法です。MS-DOSのプロンプト（A>）が表示されている状態で、次のように入力します。

SEDIT ⏎

すると、画面には次のようなウィンドウが表示されます。これが「ファイル選択ウィンドウ」です。ここから編集したいファイルを選択します。

ファイル選択ウィンドウは、これから編集したいファイルを選んだり、新しくつくりたいファイル名を入力するウィンドウです。ウィンドウ内に表示されているファイルの一覧は、カレントドライブのカレントディレクトリのものです。

ウィンドウの詳細については「7.2　ファイル選択ウィンドウ」を参照してください。

▶ファイル名を指定して起動する方法

SEDITの起動時にファイル名も指定すると、任意のファイルを編集することができます。MS-DOSのプロンプト（A>）が表示されている状態で、次の書式で入力します。

SEDIT　〈ファイル名〉⏎

〈ファイル名〉は編集したいファイル名です。必要に応じてドライブ名やパス名も含めて指定します。

たとえば、

SEDIT　A:¥DOC¥README.DOC⏎

と入力すると、ドライブAのルートディレクトリにあるDOCというディレクトリの中の〝README.DOC〟というファイルの内容が読み込まれ、編集が始まります。指定した名前のファイルがなければ、新しく作成します。

〈ファイル名〉にはワイルドカードの指定も可能です。この場合は、ワイルドカードに該当するファイルだけが、すべてファイル選択ウィンドウに表示されます。

第7章

たとえば、

SEDIT　A:¥DOC¥*.TXT⏎

とすれば、ドライブAのDOCというディレクトリの中にある、拡張子が"TXT"であるファイルの一覧がファイル選択ウィンドウに表示されます。

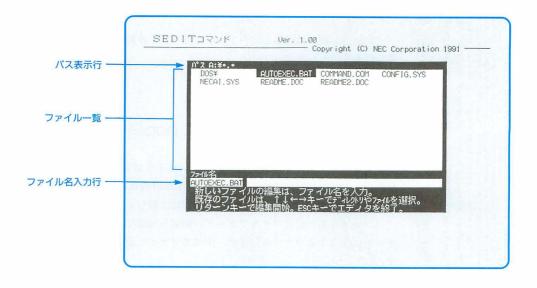
ファイル中に文字コード128、253〜255（いずれも10進）の未定義文字があると、SEDITは読み込み時に、自動的に"？"（文字コード63）に置き換えます。

またSEDITは、最大250行（約10Kバイト）までのファイルを編集できます。

7.2 ファイル選択ウィンドウ

SEDITを、ファイル名を指定しないで起動した場合や、ワイルドカードを指定して起動した場合は、画面にファイル選択ウィンドウが表示されます。また、SEDITを実行中にf･4キー［ファイル挿入］コマンドを選んだときも、このウィンドウが表示されます。

▶ファイル選択ウィンドウの各部の名前

ファイル選択ウィンドウの、各部分の名前と役割は、次のようになっています。

パス表示行

どのドライブのどのディレクトリのファイル一覧が表示されているかが、ドライブ名を含む絶対パスで表示されています。

ファイル一覧

カレントディレクトリ（パス表示行のディレクトリ）に存在するファイルの一覧で、[↑][↓][←][→]キーでファイル名やディレクトリ名が選択できます。

ワイルドカードを用いてSEDITを起動した場合は、そのワイルドカードに該当するファイル名の一覧が表示されます。

ファイル名は、アルファベット順に並べかえられて表示されます。

ファイル名入力行

直接、ファイル名やディレクトリ名を指定したり、ドライブを変更するときに使います。

またファイル一覧から選択したファイル名や、ディレクトリ名はいったんここに転記されます。ここにワイルドカードを指定すると、それに該当するファイル名が〈ファイル一覧〉に表示されます。

▶ファイルを選ぶ

[↑][↓][←][→]キーで反転部分を動かして、編集したいファイルや移動したいディレクトリ名（ファイル名の末尾に"¥"が付いている）に合わせたら、[⏎]キーを押します。ファイル名がファイル名入力行に転記されるので、確認してもう一度[⏎]キーを押してください。

また、ディレクトリを選んだ場合は、指定したディレクトリのファイル一覧になりますので、同じように任意のファイルを選んでください。

ファイル読み込み中は、最下行に読み込んだ割り合いがパーセントで表示されます。

指定したファイルの読み込みが終了すると、次のような編集画面になります。

```
A:¥AUTOEXEC.BAT                <挿入>   1/   6行  1桁  空ﾒﾓﾘ: 99  [HELP]:説明
PATH A:¥DOS;A:¥↓
SET DOSDIR=A:¥DOS↓
MENU↓
[EOF]

1切取り 2 複写 3貼付け 4ﾌｧｲﾙ挿 5ｺﾝﾄﾛｰﾙ 6 検索 7次検索 8 置換 9ｼﾞｬﾝﾌﾟ 0 終了
```

拡張子が".BAK"のファイルは編集することができません。拡張子が".BAK"のファイルについては、「7.4　ファンクションキーの編集機能」の「終了と文書の保存」をご覧ください。

▶ファイルを新しくつくる

新しくファイルをつくる場合は、ファイル名入力行に主ファイル名（8バイト）と拡張子（3バイト）でファイルの名前を指定します。

それぞれ8バイト、3バイトを越えた文字については無視されます。

▶ドライブを変える

編集したいファイルがカレントドライブとは別のドライブにある場合には、ファイル選択ウィンドウのファイル名入力行にドライブ名を入力し、[⏎]キーを押します。

たとえば、ドライブBに変更するときには、次のように入力します。

B:[⏎]

ドライブ名とともにディレクトリも変更したいときは、たとえば次のように入力します。

B:¥DOC¥[⏎]

ワイルドカードで指定する

ファイル名入力行にワイルドカードを指定すると、ファイル名を絞り込んで探すことができます。たとえば、

*.DOC⏎

と入力すると、拡張子が".DOC"のファイルの一覧が表示されます。

SEDITの終了

編集画面で何もせずSEDITを終了するには、f･10キーを押してください。メニューが表示されるので、↓キーで[文書を保存せずにエディタを終了]コマンドを反転させ⏎キーを押します。ファイルの内容を変更せずにSEDITを終了し、MS-DOSのプロンプトに戻ります。

7.3 編集画面の基本機能

編集するファイルを選択すると、実際にファイルを編集する「編集画面」になります。まず編集画面の各部の名前と役割、そして文字の挿入や削除などの編集の基本機能を解説します。

▶入力できる文字と記号

入力できる文字の種類は、1バイト系半角文字、2バイト系全角文字、コントロールコード、タブ文字です。ただし、1バイト系半角文字のセミグラフィックキャラクタは入力できません。

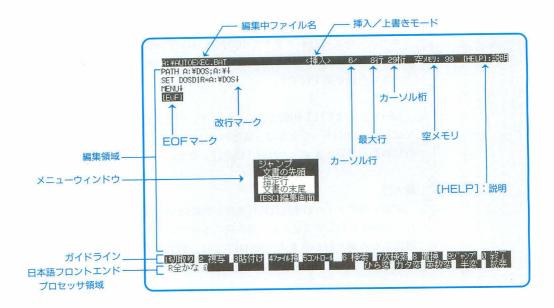
コントロールコードとは、キャラクタコードが10進数で0～31までの文字のことで、SEDITでは通常はキーボードから入力することができません。これを入力するには、「7.4　ファンクションキーの編集機能」の「コントロールコードの入力」を参照してください。

ファイル選択ウィンドウでも日本語が入力できますから、ファイル名を漢字にすることも可能です。

かな漢字変換中はFEPがファンクションキーを（場合によっては[ROLL UP]/[ROLL DOWN]キーや[HELP]キーも）使用しますので、エディタの機能を呼び出せないことがあります。このような場合は、いったん日本語入力モードから抜けてエディタをお使いください。

2バイト系半角文字を含むファイルを編集することも可能です。ただしこのエディタでは単なる2バイト系文字として表示するため、画面には“AABB”といったように半角2文字のように見えます。ファイルには正しく2バイト系半角文字として保存されるので、MS-DOSのTYPEコマンドなどで内容を表示させれば、2バイト系半角文字として読むことが可能です。

▶編集画面の名前と役割

編集画面の各部分の名前と役割は、つぎのようなものです。

編集中ファイル名

現在編集しているファイルのドライブ名、パス名、ファイル名が表示されています。パス名は、ドライブのルートディレクトリからの絶対パスで表示されています。

また、ディレクトリ名が長くてこの欄に表示できない場合は、ディレクトリ名＋ファイル名が左から32文字分だけ表示されます。

MS-DOSのAPPENDコマンドでデータファイル検索パスを設定して、エディタを起動するときにファイルを指定すると、データファイル検索パス内のファイルが読み込まれることがありますが、〈編集ファイル名〉にはカレントドライブのカレントディレクトリにそのファイルがあるかのように表示されます。これは、MS-DOSではデータファイル検索パスを経由して見つけたファイルを操作しているのか、カレントディレクトリにあるその名前のファイルを操作しているのかが、プログラム側から区別できないしくみになっているからです。

挿入/上書モード

現在の編集モードが表示されます。〈上書〉の場合は、カーソルの形が"■"のようになり、入力した文字でカーソル位置の文字が書き替わります。〈挿入〉の場合は、カーソルの形が下半分だけになり、カーソル位置の左側に入力した文字が挿入されます。〈上書〉のときは入力しただけ文字が書き替わってしまいますので、注意してください。

第7章

カーソル桁

カーソル位置の行の左端からの桁数が表示されています。なお、桁数は行の左端が第1桁、右端が第80桁です。

カーソル行

カーソルがある行がファイル中で何番目の行かが表示されています。この行は、SEDITの画面上で何行に見えるかを表した「物理行」による表示です。ファイルの先頭が第1行です。

SEDITでは1行を80桁と定めています。たとえば先頭から100文字目で初めて改行マークがあったときは、論理的には100文字で1行ですが、画面上では2行にわたって見えます。これが「物理行」です。

最大行

編集中のファイルの末尾行の行番号が物理行で表示されています。〈カーソル行〉の表示と合わせて見ると、現在表示されている画面がファイル全体のどの位置にあたるかがわかります。SEDITでは、最大250行（約10Kバイト）まで編集できます。

空きメモリ

あとどのくらい文書が編集できるかをパーセント（%）で表示しています。

数字が0に近付くにつれ、編集できる文書の大きさの限界になりつつあります。この値が0になると、「編集用のメモリが足りなくなりました。」という警告メッセージが表示されます。

[HELP]：説明

HELPキーを押すと、簡単な説明が表示されることを表しています。

改行マーク

改行を表すマークです。文のどこで改行しているか下向きの矢印で表示されています。論理行は、前の改行の次の文字からこの改行マークまでで1行です。

EOFマーク

ファイルの終わり（End Of File）を示すマークです。このマークより右側や下にカーソルを移動することはできません。

編集領域

ファイルの内容を表示したり、編集するための領域です。横80桁×縦22行の広さがあり、半角文字で最大1760文字の編集ができます。この画面を超えた部分は、↑↓キーやROLL UP/ROLL DOWNキーを押すと〈編集領域〉に表示させることができます。この操作を「スクロール」と呼びます。スクロールについては、「色々なスクロール」で後述します。

ガイドライン

通常はファンクションキーに割り当てられている内容が表示されていますが、SEDITからの簡単なメッセージや説明なども表示されます。

日本語フロントエンドプロセッサ領域

日本語フロントエンドプロセッサのガイドライン用に割り当てられている行です。SEDITはこの部分に何も表示しません。

日本語フロントエンドプロセッサの役割と操作については、「付録A　簡単な日本語入力」か、拡張機能セットの『日本語入力ガイド』（別売）を参照してください。

メニューウィンドウ

エディタの機能を選択するときに表示されるメニューです。反転カーソルを[↑][↓]キーで動かして、[⏎]キーを押すとコマンドが実行されます。

▶ SEDITの編集操作

ここでは、SEDITの編集操作のうちもっとも大切な、文字の挿入や削除、カーソルの移動について解説します。

●漢字を入力する

バッチファイルなどで、メッセージに漢字を使いたいときがあります。そんなときは、AIかな漢字変換システムのような「日本語入力機能」を使って、漢字を入力します。

ただし、日本語入力機能がデバイスドライバとしてMS-DOSに組み込まれていなければ、漢字の入力はできません。日本語入力機能の組み込み方は、『インストールガイド』や別売の『日本語入力ガイド』を参照してください。

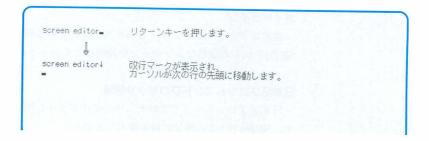
●文字の挿入

SEDITでは、[↑][↓][←][→]キーでカーソルを挿入したい場所に移動させて文字を入力するだけで文字を挿入することができます。

編集モードが〈挿入〉であるときには、入力した文字がカーソルのすぐ左に挿入され、カーソル位置の文字から改行マークまでが右にスライドします。

編集モードが〈上書〉のときは、カーソル位置の文字を消しながら新しい文字が入力されていきます。

●改行とタブ

改行するときは[⏎]キーを押します。画面に改行マークが表示され、カーソルが次の行の先頭に移ります。

また、TABキーでタブ文字が入力できます。タブ文字を入力すると、カーソル位置より右側の、もっとも近いタブ位置にカーソルが移動します。タブ位置は、第1、9、17、25、33、41、49、57、65、73桁に設定されています。

▶カーソルの移動

文字のあるところには、↑↓←→キーでカーソルを自由に移動できます。

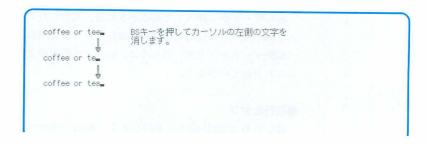
たとえば、文書が大きくて画面に入り切らない場合などでも、編集領域の最上行で↑キーを押したり、編集領域の最下行で↓キーを押すと、画面の画面に表示されていない部分を表示させることができます。

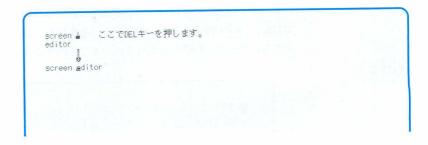
また、SHIFT＋→キーで行末（改行マーク）に、SHIFT＋←キーで行頭にカーソルが移動します。

▶文字の削除

まちがって入力した文字、不用になった文字を消すには2つの方法があります。

●カーソルの左の文字の削除（BSキー）

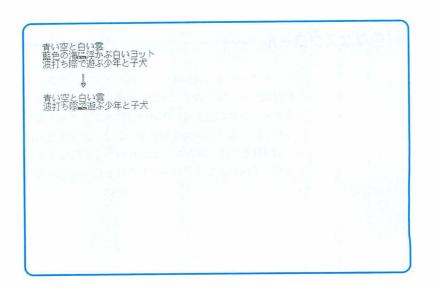
BSキーを押すと、カーソルの直前（左）の文字を消し、カーソルが一つ左に移ります。

●カーソル位置の文字の削除（DELキー）

DELキーを押すと、カーソル位置の文字を消します。カーソル位置は変わりません。改行マークにカーソルを合わせてDELキーを押すと、2行に分かれた文を1文につなげることができます。

▶文字列の削除と復活

文字単位でなくまとめて削除することもできます。

●行の削除（CTRL＋Yキー）

不用な文を一気に削除するときは、CTRL＋Yキーを利用します。DELキーやBSキーで1文字ずつ消すのに比べ、素早く削除することができます。

削除したい行にカーソルを移動してCTRL＋Yキーを押します。このときの桁位置は、行内であればどこでもかまいません。

削除後のカーソル位置は、削除した行の次の行の同じ桁（なければ行末）になります。

第7章

●行の復活

直前に[CTRL]+[Y]キーで削除した行は、[CTRL]+[L]キーを押すとカーソルのある行に復活できます。

●カーソル以降の削除（[CTRL]+[K]キー）

カーソル位置からその行の行末の改行マークまでを一気に消去するときには、[CTRL]+[K]を利用します。画面上で（物理行が）複数行に渡っているように見えても、カーソル位置から改行マークまでを消すことができます。

```
朝日の中で私は目を覚ました。耳に聞こえてくるのは、鳥のさえずりと、波の音だけだ
った。ふいに隣を見ると、いっしょに寝ていたはずのポチがいない。
どうやら朝寝坊の私をおいて、勝手に遊びにいってしまったらしい。
                              ⇩
朝日の中で私は目を覚ました。耳に
どうやら朝寝坊の私をおいて、勝手に遊びにいってしまったらしい。
```

▶色々なスクロール

「スクロール（scroll）」という語は、「巻物」を意味する英語です。限られた行数しか一度に表示できない画面には、大きな文書を全部表示することができません。巻物の見えない部分は巻物をグルグルまわして読みたい所を探します。これと同じように画面で見えない部分を表示させる操作が「スクロール」です。

SEDITでは、読みたいところがすぐに探せるように、2行ずつスクロールしたり、半画面ずつスクロールしたりといった色々なスクロールが利用できます。

スクロールの種類と操作方法は次のとおりです。

キー操作	スクロールの種類
↑/↓	カーソル移動
↑/↓連続	連続カーソル移動
SHIFT＋↑/↓	2行スクロール（カーソル行固定）
SHIFT＋↑/↓連続	連続2行スクロール（カーソル行固定）
ROLL UP/ROLL DOWN	11行スムーズスクロール（カーソル行固定）
ROLL UP/ROLL DOWN連続	スムーズスクロール（カーソル行固定）
SHIFT＋ROLL UP/ROLL DOWN	11行クイックスクロール（カーソル行固定）
SHIFT＋ROLL UP/ROLL DOWN連続	連続11行クイックスクロール（カーソル行固定）

※「連続」は、そのキーを押し続けることを表します。

▶キー操作ガイドの表示

基本的な編集キーの操作を忘れてしまったり、ファンクションキーの編集機能がなにをするのかわからなくなったときには、HELPキーを押してください。簡単な操作ガイドが表示されます。このガイドは3画面分あり、ROLL UPキー（またはスペースキー）を押すと次のページが、ROLL DOWNキー（またはBSキー）を押すと前のページが、それぞれ表示されます。ヘルプを終了して編集画面に戻るにはESCキーを押します。

編集中に"編集作業に必要なメモリが足りなくなりました。"の警告が出ることがあります。これは、文字入力や貼り付け、挿入読み込み、文字列の置き換えなどによってテキストの量が増え、空きメモリが足りなくなったことを示しています。

この警告が出たときには、ただちにf･10キー（[終了コマンド]）を実行し、「文書を保存しエディタを終了」を選択してください。これ以外のコマンドを選んだときの動作は保証されません。

第7章

7.4 ファンクションキーの編集機能

基本的な編集機能の他にも、ファンクションキー（f･1～f･10キー）にいろいろな編集機能が組み込まれています。ここでは、これらの編集機能について解説します。

▶行単位で移動 （行の切り取り）

行単位で内容を移動するには、移動したい内容をいったん行単位で切り取って、それを目的の場所に貼り付けます。切り取ったまま貼り付けずにいれば削除と同じことになります。

切り取りはf･1キー、貼り付けはf･3キーで行います。たとえば、

```
1　赤白がんばれ
2　ビシバシいこうぜ
3　やじをとばすな
4　なかまじゃないか
```

の第1行と第2行を第3行の下に移動する手順は、次のようにします。

1 移動したい範囲の先頭行（ここでは第1行）にカーソルを合わせて、f･1キー（[切取り]コマンド）を押します。ガイドラインには、「行範囲指定中」と表示されます。

2 ↑↓キーやROLL UP／ROLL DOWNキーを押すと、それらのキーでカーソルが移動する範囲が反転表示になります。同様に、「7.3　編集画面の基本機能」の「色々なスクロール」で解説しているスクロールのキーや、「7.4　ファンクションキーの編集機能」の「ジャンプ」で取り上げているジャンプのコマンドも利用できます。

[切取り]コマンドの実行を中止して編集画面に戻るには、ESCキーを押します。

3 範囲を指定したら、もう一度f･1キーを押します。すると反転していた部分が画面から消えます。

画面上では消えましたが、実は「カットバッファ」と呼ばれるところに転送され、一時的に記憶されています。カットバッファの内容は、[貼付け]コマンド(f･3キー）を実行すれば、別の場所に貼り付けることができます。

また、このまま入力を続けたりすれば、範囲指定した部分は削除したのと同じことになります。

4 貼り付けを行います。貼り付ける行はカーソルのある行とその前の行の間に挿入されますので、元の第4行（現在は第2行）にカーソルを合わせて、f･3キー（[貼付け]コマンド）を押します。
先ほど切り取った内容が貼り付けられて、行の移動ができました。

カットバッファの内容は、次に[切取り]や[複写]コマンド（f･2キー）を実行して新しい内容をカットバッファに入れるか、エディタを終了するまで残っています。したがって、1箇所で切り取った内容をいつでも何度でも貼り付けることができます。
たとえば元の第3行（新しい第1行）の行にカーソルを合わせてf･3キーを押せば、

赤白がんばれ
ビシバシいこうぜ
やじをとばすな
赤白がんばれ
ビシバシいこうぜ
なかまじゃないか

のようになります。

▶行単位で複写

行単位で複写する場合も、範囲を指定してカットバッファに入れ、別の場所に貼り付けます。このとき指定した範囲が画面から消えないので、結果的に複写したことになるわけです。
基本的な操作は、f･1キー（[切取り]コマンド）の代わりにf･2キー（[複写]コマンド）を使う以外は前項の「行単位で移動」と同じです。指定した部分は画面から削除されませんが、カットバッファに転送されます。
[切取り]コマンドのときと同じように、カットバッファに転送された内容は保持されます。したがって、複写した内容を何回でも貼り付けることができます。

ファイルの最終行（EOF行）は、切り取りや複写の対象にできません。
また、CTRL＋YキーやCTRL＋Kキーで削除した内容はカットバッファには格納されません。

第7章

ファイルを挿入して読み込む

いま編集しているファイルに他のファイルの内容を挿入したい場合には、f･4キー（[ファイル挿入]コマンド）を利用します。このことを「挿入読み込み」といいます。

挿入読み込みで読み込んだ内容は、[貼付け]コマンドのときと同じように、カーソルのある行の直前に挿入されます。

f･4キーを押すとファイル選択ウィンドウが表示されますから、挿入したいファイルを選択します。ファイル選択ウィンドウの使い方については、「7.2 ファイル選択ウィンドウ」をご覧ください。

[ファイル挿入]を中止して編集画面に戻るには、ESCキーを押します。

ファイルを選択すると挿入が始まり、しばらくすると編集画面に戻ります。

コントロールコードの入力

コントロールコードとは、文字コードのうち実際の文字が割り当てられていないコードを一般的に呼ぶときの名前です。文字は割り当てられていなくても、さまざまな機能が割り当てられています。

たとえばバッチファイルなどで文字に色を付けたり、反転文字を表示したりといったことをするには、MS-DOSの「エスケープシーケンス」を使います。このときの「エスケープコード」はコントロールコードの一種です。これらのコントロールコードをSEDITで入力するための機能が、f･5キー（[コントロール]コマンド）です。

「エスケープシーケンス」は、エスケープ文字といわれる文字と別の文字を組み合わせて、画面や周辺装置を制御するしくみです。詳しくは別売の『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

コントロールコードを入力するには、コントロールコードを入力したいところでf･5キーを押します。ガイドラインが次のように変わり、コントロールコード入力モードになります。

コントロールコード(CTRL+L:^L,CTRL+@:^@)を入力してください。　f･5キーで編集画面

コントロールコードはCTRL＋文字キーの形式で入力してください。入力したコントロールコードは画面では「＾コード名（半角文字・記号1文字）」のように表示され、少し色が変わって見えます。

まちがってコントロール入力モードにしてしまった場合などは、もう一度f･5キーを押すとモードが解除され、編集画面に戻ります。SEDITでは一般にESCキーでコマンドを取り消しますが、このモードではESCキーを押すとエスケープコードが入力されてしまいますので注意してください。

コントロールコードを入力するときには、そのコントロールコードの意味をよく理解した上で入力してください。特にCTRL＋Z（画面では"＾Z"）を文書中に入力してファイルを保存すると、"＾Z"以降の内容は読み出せなくなってしまいます。"＾Z"はMS-DOSではEOFマークとして機能しているからです。

▶検　索

大きな文書を編集しているときは、特定の語を検索できると便利です。

●検索する（検索語入力）

SEDITでは、検索は現在カーソルがある行・桁位置から後ろに進みます。したがって編集中の文書全文にわたって検索したい場合は、あらかじめ文書の文頭にカーソルを移しておかなければなりません。文書の文頭にカーソルを移す方法は、「7.4　ファンクションキーの編集機能」の「ジャンプ」を参照してください。

1 f･6キーを押します。次のようなウィンドウが画面に表示されます。このウィンドウを「検索ウィンドウ」と呼びます。初め、検索したい文字を入力する検索ウィンドウは空になっています。

第7章

2 検索したい語を検索ウィンドウに入力します。検索語は半角文字でも全角文字でもかまいませんが、半角文字で50文字までです。たとえば、"日本語"という語を検索するときは、

日本語

と入力します。

3 ⏎キーを押すとただちに検索が始まります。検索語が見つかると反転文字で表示され、文字やコマンドが入力できる状態になります。

4 検索語が見つからなかった場合は、ガイドラインに次のように表示されます。

検索終了　検索語は見つかりませんでした。　　　何かキーを押してください。

検索ウィンドウに入力した検索語は、再びf•6キーで検索語を入力するまで保持されます。したがって、次項で説明するf•7キーの「次検索」を使うと、次々に同じ検索語を探すことができます。

●検索の繰り返し

一度検索ウィンドウに入力した検索語は、再び別の検索語を入力するまで保持されています。

保持されている検索語で順次検索するのが、f•7キー（[次検索]コマンド）です。[検索]コマンドは、あらかじめ検索語が入力されていなければ使えません。ですから、1度も検索語を入力していないのにf•7キーを押すと、自動的に検索ウィンドウが表示されます。

この機能もf•6キーの[検索]コマンドと同様に、現在のカーソル位置の行から文末へ向けて検索します。したがって、文書の全体を検索するにはカーソルをあらかじめ文書の先頭に移動しておかなくてはなりません。

▶置　換

新しく固定ディスクを購入したときに、それまで使っていたバッチファイルのドライブ名を全部書き直さなければならないとか、文書中に入れておいた仮名称を正式名称に置き換えたいといった場合には、置換機能を利用します。

置換でも、検索と同じように現在のカーソル位置以降の文書から置換語を探します。したがって文書全体を置換対象にする場合は、前もって文書の先頭にカーソルを移動させておきます。

1 [f･8]キー（[置換]コマンド）を押すと、画面に置換される語を入力するウィンドウが表示されます。置換する前の言葉（語）は半角文字でも全角文字でもかまいませんが、半角文字で50文字以内で入力します。

2 [⏎]キーを押すと、置換後の文字を入力するようになります。入力して[⏎]キーを押します。

3 次のような確認ウィンドウが表示されます。置き換える文字などを確認してください。誤って置き換えてしまうと後で戻すのがたいへんなので十分に注意してください。

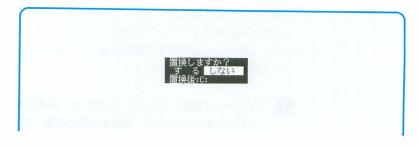
[確認しながら置換]は、置換前の語を見つけるたびに置き換えるかどうかをたずねるメッセージを表示します。

[確認せずに置換]は、置換前の語をすべて確認なしで置き換えます。

[↑][↓]キーでどちらかを選び、[⏎]キーを押します。

第7章

●確認しながら置換する

[確認しながら置換]を選ぶと、置換前の語を見つけると次のようなメッセージを表示します。

この語を置き換えるかどうかを、このウィンドウで指定します。

置換するかしないか、希望の方を[←][→]キーで反転させ、[⏎]キーを押します。[する]を選ぶと置換後の語に置き換えます。[しない]を選ぶと置き換えません。

これを繰返して、文末まで置換前の語を探します。文末までいくと、ガイドラインに次のようなメッセージを表示します。

置換終了　1カ所置換しました。　何かキーを押してください。

置き換え対象の文字が１つも見つからなければ、エディタはその旨も伝えるメッセージを表示します。

置換終了 置換語はありませんでした。　何かキーを押してください。

何かキーを押すと、再び編集作業を続行できます。

途中で置換を中断するときは、[ESC]キーを押します。それまでに置換した語があれば、ガイドラインに語数を表示してコマンドを終了します。

●確認せずに置換する

［確認せずに置換］を選ぶと、見つかった置換前の語をすべて置換後の語に置換します。文書の末尾まで探し終えるとガイドラインに、次のように表示されます。

置換終了　1カ所置換しました。　何かキーを押してください。

該当する文字が１文字も無かった場合は、次のように表示されます。

置換終了　置換語はありませんでした。　何かキーを押してください。

［確認せずに置換］を選ぶときには、文書の内容と置換語をよく確認してください。むやみにこれを選ぶと、予期しない語が置き換えられてしまうことがあります。いったん置き換えられた語は手作業で戻すしかありません。このような事故を防ぐためにも、大規模な置換をする前にいったん文書をファイルに保存しておくとよいでしょう。

▶ジャンプ

文書の大きな範囲でカーソルを移動させたいときは、f•9キー（[ジャンプ]コマンド）を利用します。特に大きな文書を編集しているときには便利な機能です。

[ジャンプ]コマンドは、[切取り]や[複写]コマンドでの範囲を指定するときにも利用できます。

f•9キーを押すと、次のようなウィンドウが表示されます。

ジャンプコマンドを実行すると、このようなウィンドウが表示されるので、この中からジャンプ先を選択します。

↑↓キーで反転部分を移動させ⏎キーを押します。

[文書の先頭]を選ぶと、文書の先頭行の１文字目にカーソルが移動します。

[文書の末尾]を選ぶと、文書の末尾行（EOFマーク）にカーソルが移動します。

[指定行]を選択すると、行番号を指定するウィンドウが表示されます。

特定の行にジャンプしたいときは、ウィンドウでジャンプ先の行番号も指定します。移動先の行番号を半角数字で入力して⏎キーを押します。

▶終了と文書の保存

SEDITを終了したり、文書を保存するときにはf･10キー（[終了]コマンド）を押します。次のようなウィンドウが表示されます。

終了コマンドを実行すると、このようなウィンドウが表示されます。編集中のファイルをどうするかを選択します。

反転部分を↑↓キーで移動し⏎キーを押して選択します。
[文書を保存しエディタを終了]を選ぶと、編集中の文書をディスクに書き込んでSEDITを終了します。
[文書を保存し編集を続行]を選ぶと、編集している文書をディスクに書き込み、編集画面に戻って編集を続けます。
[ファイル名を変更して保存し編集を続行]を選ぶと、編集している文書を別のファイル名でディスクに書き込みます。新しく付けるファイル名を入力して⏎キーを押します。指定したファイル名と同じ名前のファイルがすでにある場合は、上書きをするかどうかを聞いてきますから、するかしないかを選んでください。ディスクへの書き込みが終わると、編集画面に戻って編集を続けます。
[文書を保存せずにエディタを終了]を選ぶと、編集中の文書を保存せずにSEDITを終了します。編集結果は残りませんから注意してください。
[編集作業に戻る]を選ぶかESCキーを押すと、何もしないまま[終了]コマンドを中止して編集画面に戻り、編集を続けることができます。

[文書を保存しエディタを終了]と[文書を保存し編集を続行]の2つでは、編集中の文書をパス表示行に表示されているファイル名で保存します。すでに存在していたファイルを編集していた場合は、同時に編集前のファイルを拡張子〝.BAK〟で残します。後で編集結果が思わしくないと判断されたような場合は、拡張子〝.BAK〟のファイルを利用してファイル内容を戻すことができます。
ちなみにSEDITでは、拡張子が〝.BAK〟のファイルはバックアップファイルであるとみなされ、編集することができません。バックアップファイルを編集するには、MS-DOSのRENコマンドで拡張子を〝.BAK〟以外に直してください。

第7章

7.5 SEDITが表示するエラーメッセージ

文書の編集中にエラーが表示されても、あわてることはありません。このマニュアルを調べているうちに文書が壊れてしまうようなことはありませんから、どのエラーが表示されているかを調べてじっくり読み、対処してください。

拡張子が「.BAK」のファイルは編集できません。
（起動時、またはファイル選択ウィンドウ）

拡張子が".BAK"のファイルはバックアップファイルで、SEDITでは編集できません。MS-DOSのRENコマンドなどでファイル名の拡張子を別のものに変えてから再度起動してください。

拡張子に「.BAK」は使えません。

拡張子が".BAK"のファイルはバックアップファイルで、SEDITでは指定できません。他の拡張子を指定してください。

警告　編集作業に必要なメモリが足りなくなりました。これ以上のファイルは編集できません。エディタを終了して下さい。

このメッセージが表示されたら、ただちにf･10キー（終了）の[文書を保存しエディタを終了]を選んでエディタを終了してください。このメッセージを無視して編集を続けると、編集中の文書が破壊される恐れがあります。

このファイル名は使用できません。

既存のディレクトリと同じ名前や、MS-DOSのシステムが予約しているファイル名は使えません。別のファイル名を指定してください。

指定のディレクトリが見つかりません。

存在しないディレクトリを指定しました。指定したドライブ名やディレクトリ名を確認してください。

挿入ファイルが大きすぎてメモリに入りきりません。
（ファイル挿入読み込み時）

挿入しようとする文書が大きすぎます。編集中の文書は挿入読み込みを実行する前の状態に戻っていますから、いったん文書を保存して、EDLINやお手持ちのエディタ/日本語ワープロをお使いください。

ディスクが異常です。確認してください。（ディスク読み書き中）

ディスクが初期化されていないか、壊れている可能性があります。ディスクを確認して、初期化済みのディスクに交換してください。Yキーを押すと文書の読み込み/保存を再開します。Aキーを押すと中断して編集画面に戻ります。

ディスクが書き込み禁止状態です。（ディスク読み書き中）

ディスクが書き込み禁止（ライトプロテクト）になっています。ディスクを確認して[Y]キーを押すと、文書の保存を再開します。[A]キーを押すと文書を保存せずに編集画面に戻ります。ライトプロテクトをはずす場合は、そうなっている理由をよく考えてからはずしてください。

ディスクに異常が発生しました。ディスクを確認してください。（ディスク書き込み中）

文書を保存中にディスクでエラーが発生しました（このエラーはディスク読み書き中のエラーに続いて表示されることがあります）。

このエラーだけが表示された場合は、ディスクの空き容量が足りなくなった場合がほとんどです。ディスクを交換してもう一度文書を保存してください。

固定ディスクやRAMドライブに文書を保存しようとしてこのエラーが表示された場合は、ディスクを交換することができませんから、次の手順でフロッピィディスクに文書を保存してください。

①[f･10]キー[終了]コマンドの[ファイル名を変更して保存し編集を続行]を選択します。
②フロッピィディスクドライブにファイル名を指定します。または、最初に保存しようとした固定ディスクとは別の（もっと空き容量のある）ドライブにファイル名を指定します。
③文書を別のドライブのファイルに保存したら、[f･10]キー[終了]コマンドの[文書を保存せずにエディタを終了]を選びます。

ドライブの準備ができていません。（ディスク読み書き中）

ドライブにディスクが入っているか、ドライブを正しく閉じているかを確認してください。[Y]キーを押すと文書の読み込み/保存を再開します。[A]キーを押すと中断して編集画面に戻ります。

ドライブの準備ができていません。（その他の場合）

ディスクが正しく挿入されているかを確認してください。

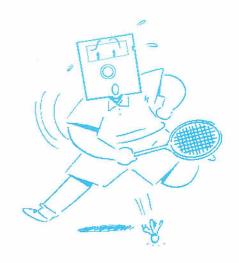
ファイル名を指定してください。

文書を保存する場合には、ファイル名の指定が必要です。ドライブ名やパス名以外にファイル名も入力してください。

編集用のメモリが足りませんのでプログラムを中断します。（起動時）

SEDITを起動できるだけの空きメモリがありません。他のプログラムの子プロセスとして起動しようとしたのであれば、いったん親プロセスに戻ってから再度起動してください。

編集ファイルが大きすぎてメモリに入りません。（起動時）

文書ファイルが大きすぎて、SEDITでは編集できません。EDLINを使うかお手持ちのエディタまたは日本語ワープロをお使いください。

付録では、漢字やひらがなを使う方法、エラーメッセージの対策方法、用語集、コマンドの簡単な説明を用意しました。必要に応じて、ご利用ください。

付録

■本編の内容■

付録A 簡単な日本語入力

この付録Aでは、MS-DOSの標準的な日本語入力機能の、もっとも基本的な使い方の説明を行います。コンピュータのキーボードは、通常は、アルファベット、カタカナ、数字、記号類しかタイプできませんが、この日本語入力機能を使用することで、スムーズに漢字かな混じり文をタイプすることができるようになります。

なお、MS-DOSの日本語入力機能には、ここで述べる他にも便利な機能が数多くあります。詳細な説明は、「拡張機能セット」の『日本語入力ガイド』(別売)を参照してください。

ここでの説明は、MS-DOSを『インストールガイド』の手順でインストールした状態で行っています。この状態で、コンピュータは、日本語を使用できる状態になっています。なお、画面の表示例は、あくまでも例であり本書と異なる場合があります。

A.1 簡単な使い方

日本語入力機能は、コンピュータで、漢字、ひらがな、カタカナなどをタイプする機能です。単語や文章の読みがなをタイプし、それを漢字かな混じり文に変換します。

ここでは、最も簡単な使い方で、日本語を画面に表示してみましょう。

▶日本語入力モードに入る(CTRL+XFER)

日本語入力機能が使用できる状態を、「日本語入力モード」と呼びます。

アルファベットなどを入力している状態から、日本語入力モードに入るには、CTRLキーを押しながらXFERキーも押します。このような操作を「CTRL+XFERキーを押す」と記します。

1 CTRL キーを押しながら、XFER キーも押してください。

画面のいちばん下に、次のような表示が出ることを確かめてください。

```
A>
R全かな @                                       ひら変 カタ変 英数変 半変 拡張
```

これで、日本語をタイプできるようになりました。「R全かな@」の部分がこの画面と異なっている場合があっても、大丈夫です。その場合は、「画面の説明」（後述）を参照して、「R全かな@」と表示されるようにしてから、以後の説明に進んでください。この状態では、辞書ファイルの入ったディスクをドライブ装置から外さないでください。

このように表示されず、「(16進)」とか、「辞書の指定が不正です」のようなメッセージが表示された場合は、日本語入力機能を使うための設定が正しく指定されていません。CUSTOMコマンドを使用してCONFIG.SYSファイルの設定を変更し、日本語入力機能が使えるようにしてください（『インストールガイド』付録B参照）。

日本語を入力する手順

日本語を入力する一般的な手順は、次のようなものです。

❶漢字の読みがなをタイプする。
ローマ字または カナ キーをロックした状態で、漢字の読みがなを入力します。

↓

❷漢字かな混じり文へ変換する。
スペースキーまたは XFER キーを押して、漢字かな混じり文へ変換します。

↓

❸変換結果を確かめる。
正しく変換されていれば、⏎ キーで変換結果を確定し、次の読みがなを入力します。
変換結果が違う場合は、読みがなの修正や、他の漢字への再変換をします。

では、実際に日本語を入力してみましょう。

2 入力したい漢字の「読みがな」を、タイプします。手始めに「地区」という漢字を表示してみましょう。読みがなをタイプする方法は、ローマ字とカタカナの2通りを選べます。

・ローマ字の場合……T I K U とタイプします。
・カタカナの場合……キーボードの左下の カナ キーを押してから、チ ク とタイプします。

画面にタイプした読みがなが表示されます。タイプするキーを間違えた場合は、BS キーを押して、間違えた文字まで表示を消して、タイプしなおしてください。

3 読みがなを漢字に変換します。変換キー（スペースキーまたは XFER キー）を押してください。**2** で入力された読みがなを手がかりに、コンピュータがディスク上の辞書を調べ、最初に見つかった候補の単語を表示します。

日本語には同音語が多いので、１回では「地区」と表示されないかもしれませんが大丈夫です。

4 同音語に変換された場合は、さらに変換キーを押します。ここでは、システムの辞書に、どのくらいの「ちく」が登録されているかを調べるためにも、変換キーを10回ほど押してみましょう。

変換キー（スペースキーまたは XFER キー）を押す。

↓

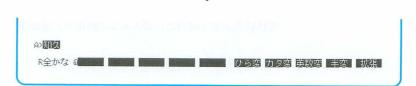
↓

変換キー（スペースキーまたは XFER キー）を押す。

↓

↓

変換キー（スペースキーまたは XFER キー）を押す。

↓

A>チク
R全かな @ 1築 2蓄 3竹 4筑 5畜 6逐 7竺

同音語が4種類以上ある場合は、変換キーを4回押したところで、画面の下部に同音語が一覧表示されます。反転表示されている単語が、入力される単語です。

購入したばかりのシステムの辞書には、約10種類の「ちく」が登録されています。

変換キーをさらに何回か押して、目的の「地区」を画面に表示させてください。

5 目的の「地区」が表示されたら、⏎キーを1回押して、漢字を確定します。これで、目的の単語が入力されました。

A>地区
R全かな @ ひら変 カタ変 英数変 半変 拡張

以上は、もっとも簡単な日本語の入力方法ですが、これでは不便を感じられることでしょう。以後は、もっとスムーズに漢字かな混じり文を変換しながら入力する説明を行います。

漢字を確定した後、この状態でもう一回[⏎]キーを押すと、次のようなメッセージが表示されます。

A〉地区
コマンドまたはファイル名が違います
A〉■

これは、最初に読みがなをタイプしたときに表示されていたMS-DOSのプロンプト「A〉」と関係があります。「A〉」という表示は、MS-DOSがユーザーからの指示（コマンド）を待っている状態を表しています。普通は、ここで「dir」のようなアルファベットのコマンドを入力するのです。そこへ、「地区」という文字を入力したために、上記のようなメッセージが表示されました。

しかし、心配にはおよびません。「地区」というコマンドはありませんから、メッセージが表示されるだけで、システムには少しも悪影響はありません。ここでは、できるだけ早く日本語入力に慣れていただくために、このような変則的な使い方をしました。

日本語入力機能は、本来は、ワープロソフトや表計算ソフトのような、他のソフトウェアと組み合わせて使用する機能なのです。

MS-DOSには"SEDIT"というスクリーンエディタが添付されています。これを利用して、仮のファイルを作成するようにすれば、上記のエラーメッセージは表示されません。たとえば仮のファイル名を"NIHONGO.TXT"として、次のようにコマンドを入力します。

A〉SEDIT　NIHONGO.TXT[⏎]

なお、SEDITの操作方法は第7章を参照してください。

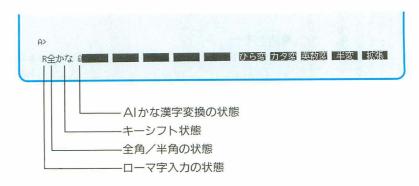
付録A

A.2　画面の説明

CTRL ＋ XFER キーを押して日本語入力モードに入ると、画面のいちばん下の行が、次のように表示されます。この行を日本語入力モードの「ガイドライン」と呼び、現在日本語入力機能がどのような状態であるかを表しています。

ここでは、ガイドラインの表示の見方を説明します。

●入力モードの表示

入力モードの表示は、４種類の情報を表しています。

表示情報	画面表示	意　味
AIかな漢字変換の状態	@	AI変換を行っています。
	(空白)	AI変換は行っていません。
キーシフト状態	かな	読みがなをひらがなで表示します。(ローマ字入力時のみ)
	カナ	読みがなをカタカナで表示します。(ローマ字入力時のみ)
	英数	読みがなを英数字、英記号表示します。
全角／半角の状態	全	全角文字が入力されます。
	半	半角文字で入力されます。
ローマ字入力の状態	R	ローマ字入力を行います
	(空白)	ローマ字での入力はできません。

▶ローマ字入力／カナ入力（カナ）

読みがなを入力するには、ローマ字で入力する方法（「ローマ字入力」と呼びます）と、キーボードのカナキーを押した状態でかなで入力する方法（「カナ入力」と呼びます）の、2通りの方法があります。

例：「秋空」の読みがなである「あきぞら」を入力する場合

ローマ字入力　A K I Z O R A
カナ入力　ア キ ソ ゛ ラ

読みがなは、ローマ字入力とカナ入力のどちらでも入力できます。慣れた方をお使いください。

●ローマ字入力の規則

ローマ字で入力すると、画面に子音を表すアルファベットが表示され、続く母音をタイプすると、かなに変換されます。

●カナキー

カナ入力するときは、キーボード左下のカナキーを押してからタイプします。カナキーは、一度押すとキーボードのカナ文字が入力される状態にロックされるので、その状態で連続してカナ入力できます。もう一度カナキーを押すと、ロックが解除され、アルファベットなどを入力する状態に戻ります。

▶直接入力／間接入力

タイプした読みがなを、どこに表示しながら変換するかを決めるのが「文字入力位置」の指定です。これには、「直接入力」と「間接入力」の2種類を選べます。

- **直接入力**……画面上のどこでも、カーソルの位置で読みがなの入力と漢字への変換を行えます。MS-DOSをインストールした直後は、この状態です。
- **間接入力**……画面のいちばん下のガイドライン上で、漢字への変換を行った後、画面上のカーソル位置へ漢字が入力されます。

通常の使用では、直接入力の方が便利です。しかし、一部のアプリケーションソフトウェアでは、直接入力を行うと、画面表示が崩れる場合があります。そのようなときは、次の手順で直接入力から間接入力へ切り替えます。

1 日本語モードに入った状態で、[f･10]キーを押します。

2 [←][→]キーで「5.入力形式」という項目を反転表示させ、[⏎]キーを押します。

```
A>
 1.単語登録 2.単語削除 3.辞書切替 4.ローマ字切替 5.入力形式 6.補助機能
```

3 [←][→]キーで「3.直／間切替」という項目を反転表示させ、[⏎]キーを押します。

```
A>
R全設定 @      1. 変換方式      2. コード          3. 直／間切替
```

直接入力と間接入力の切り替えは、日本語の入力中はできません。また、辞書ファイルがディスクに無い場合も切り替えはできません（ブザーが鳴ります）。

A.3 日本語入力キー操作一覧

ここでは、日本語入力機能で使用するキーと機能を、まとめて一覧表で示します。

●キー操作の一覧表

キー	機　能
CTRL + XFER	日本語入力モードに入る
XFER または スペース (注1)	読みがなを漢字に変換する。または、同音語の次候補を表示する
SHIFT + XFER	同音語の前候補を表示する
GRPH + XFER	部首変換をする
⏎	文字を一括確定する
↓ または NFER	変換する文節を右に移動する
↑	変換する文節を左に移動する
CTRL + →	変換する文節を延長する
CTRL + ←	変換する文節を縮小する
→	カーソルを右に移動する
←	カーソルを左に移動する
ESC	変換前の状態に戻す (注2)
カナ	（ロックした状態で）カナ入力
CAPS	（ロックした状態で）大文字の英文字入力
BS	カーソルの直前の文字を削除する
DEL	カーソルがある位置の文字を削除する
f･6	ひらがなに変換する
f･7	カタカナに変換する
f･8	英文字に変換する
f･9	半角の英数、カタカナに変換する
f･10	拡張機能
SHIFT + f･6	タイプした読みがなをひらがなで表示する
SHIFT + f･7	タイプした読みがなをカタカナで表示する
SHIFT + f･8	タイプした読みがなを英文字で表示する
SHIFT + f･9	全角と半角を切り替える
SHIFT + f･10	文字コード番号で入力する
TAB	変換前の文字を一括確定する

（注1）読みがなが表示されていない状態でスペースキーを押すと、空白の入力となります。

（注2）読みがなの入力中は、読みがなをすべて消去します。

● f・10 でのメニュー一覧表

f・10 キー（拡張機能）を押すと、画面最下行にメニューが表示され、さらに次のような機能を設定できます。

メニュー項目	機　能
1.単語登録 2.単語削除 3.辞書切替 4.ローマ字切替	単語登録モードに入る。 単語削除モードに入る。 変換に使用する辞書ファイルを変更する。 ローマ字モードのON／OFF。
5.入力形式	入力形式に関して、さらに次の事項を設定する。 1.変換方式　変換方式を変更する。 　1.逐次変換 　2.連文節変換（先読みあり） 　3.連文節変換（先読みなし） 2.コード　SHIFT ＋ f・10 で使用する文字コードを選択。 　1.JISコードを使用する。 　2.シフトJISを使用する。 　3.区点コードを使用する。 3.直／間切替　直接入力／間接入力を切り替える。
6.補助機能	学習機能などについて、さらに次の事項を設定する。 1.学習　学習機能を働かせるかどうかを選択。 　1.学習有り 　2.学習無し 2.句読点変換　句読点をタイプしたときに変換するかどうかを選択。 　1.句読点の入力で変換する。 　2.句読点で変換しない。 3.同音語指定　同音語の表示方法の選択。 　1.直接表示 　2.一覧表示 　3.直接／一覧の切り替え(注)

(注) 何回目の変換キーで一覧表示を行うかを指定します。

拡張機能の各機能の説明に際しては、つぎのような表記法を用います。

f・10 −[1.単語登録]

f・10 キーで拡張機能を選択し、次に1.単語登録機能を選択することを表す。

f・10 −[5.入力形式]−[1.変換方式]

f・10 キーで拡張機能を選択し、次に5.入力形式機能を、さらに1.変換方式を選択することを表す。

Ａ.４　誤変換の原因

日本語入力機能は、読みがなを分析してできるだけ正しい変換を試みますが、次のようないくつかの理由で正しく変換できない場合があります。

●読みがなを間違えていた

読みがなのミスタイプは、どんなに注意していても無くならないものです。キーボードに慣れている人でも、正しく読みがなをタイプしたつもりで、つい変換キーを押してしまうこともあります。このようなときは、「読みがなの入力と修正方法」の操作を行います。

●同音語に変換された

日本語はもともと同音語が多い性質の言葉なので、これはある程度仕方の無いことです。この場合は、「同音語から目的の漢字を選択する」の操作を行います。

●文節（単語）の切れ目を、日本語入力機能が間違って判断した

読みがなを入力したときに考えていた単語の切れ目と、日本語入力機能が判断した文節が違っていると、当然誤変換となります。このような場合は、「文節の切れ目を変更する」の操作を行います。

●ひらがなやカタカナの筈が漢字に変化された

これは、同音語と文節の切れ目の両方に関係していることです。原因のほとんどは、文節の切れ目を直せば正しく再変換されます。あるいは、「ひらがな、カタカナ、英数字の入力」の操作を行います。

●単語が辞書に登録されていない

これは、辞書の宿命ともいえることです。システムの辞書にあらかじめ登録されている単語は、日常生活で利用頻度の高い言葉ですが、専門的な言葉や、珍しい地名や人名、新しい言葉などを網羅できるものではありません。このような場合は、「単語の登録」の操作を行って、その場で単語を辞書に登録します。

A.5　読みがなの入力と修正方法

日本語を入力する操作は、①読みがなをタイプする、②漢字などに変換するという操作の繰り返しです。ただし、タイプを間違えることや、同音語に変換されてしまう場合もあるでしょう。このような場合は、少々違った操作を行うことになります。

ここでは、操作の流れに沿って、スムーズに日本語を入力する方法を説明します。

▶変換前に読みがなの間違いに気付いた場合

気をつけてキーをタイプしていても、間違いは生じるものです。

たとえば、「すむーずなにゅりょく」とタイプするべきところを、「すむーずなみゅうりょく」とタイプしてしまったとしましょう。

```
A>住むーずなみゅうりょく
R全かな @                    ひら変 カタ変 英数変 半変 拡張
```

このように読みがなを間違えて入力した場合の修正方法は、3通りあります。

- BS キーで文末から間違えた位置までの読みがなを消してから、正しい読みがなを入力し直す。
- ESC キーで読みがな全体を消して、最初から入力し直す。
- ← キーと DEL キーで、読みがなの途中にカーソルを移動して修正する。

●文末から1文字ずつ消してタイプしなおす（BS キー）

修正の仕方としては、いちばん簡単な方法です。BS キーを押すと、文末に位置しているカーソルが、1文字ずつ読みがなを消しながら戻って行きます。

1 読みがなを間違えて入力してしまいました。

```
A>住むーずなみゅうりょく
R全かな @                    ひら変 カタ変 英数変 半変 拡張
```

2 BS キーを何回か押して、間違えた箇所まで読みがなを消します。

3 正しい読みがなをタイプしなおします。

後は、変換キー（スペースキーまたは XFER キー）を押せば、正しく変換されます。

●読みがなをすべて入力しなおす（ESC キー）

ESC キーを押すと、変換前の読みがながすべて消去されます。そうして、最初から読みがなを入力し直してしまう方法です。タイプに慣れ、キーボードを見なくてもタイプできる方には、この方法の方が手っとり早いかも知れません。

1 読みがなを間違えて入力してしまいました。

2 ESC キーを１回押して、読みがなをすべて消去します。

付録A

3 正しい読みがなを、最初から入力し直します。

後は、変換キー（スペースキーまたは[XFER]キー）を押せば、正しく変換されます。

●読みがなの途中を修正する（[←]キー、[DEL]キー）

[←]キーを押すと、読みがなの右端に表示されているカーソルが、読みがなの中へ移動して行きます。そこで、[DEL]キーで間違えた箇所のみを消し、正しい読みがなを挿入する方法です。長い読みがなの場合や、読みがなの先頭の方を修正する場合に適した方法です。

1 読みがなを間違えて入力してしまいました。

2 [←]キーを何回か押して、間違えた箇所までカーソルを戻します。

3 [DEL]キーで、間違っている読みを消去します。

4 正しい読みを挿入します。この場合は「にゅ」です。タイプした文字は、常に、カーソルの左側に挿入されます。

5 →キーを何回か押して、カーソルを読みがなの右端へ移動します。読みがなの途中にカーソルがあるままですと、日本語入力機能は、そこを文節の切れ目と判断してしまいます（誤変換の原因となります）。

この後、変換キー（スペースキーまたはXFERキー）押すと、正しく変換されます。

変換後の読みがなの修正

正しく読みがなをタイプしたつもりで、つい変換キーを押してしまうことがあります。このようなときは、次のように修正します。

1 ESCキーを２回押して、読みがなの入力中の状態に戻ります。

2 前述の←キーとDELキーを用いた方法で、読みがなの間違いを直します。

3 カーソルを読みがなの右端へ移動し、変換キーを押します。

A.6　同音語から目的の漢字を選択する（スペースキー、XFERキー）

日本語の特徴は、同音語が多いことです。同音語に変換されたときは、スペースキーまたはXFERで、次々に他の同音語に再変換します。

同音語がたくさんある場合には、変換キーを何回か押すと、画面のいちばん下に同音語の候補がまとめて表示されます。

1 「ちく」という読みがなを入力して、変換してみましょう。辞書に登録されている初めの3語までは、画面中に表示されます。

2 同音語が4つ以上あると、画面下部に候補の言葉がまとめて表示されます。

```
A>千久
R全かな @      1■ 2蓄 3竹 4筑 5畜 6逐 7竺
```

この状態での各キーの役割は次のとおりです。

1〜9	……該当する番号の候補を選択する
⏎	……反転している候補を選択する
←→	……候補群の中で反転部分を（左右に）移動させる
スペースキー	……候補群の中で反転部分を右に移動させる
XFER	……次の候補群を表示する
SHIFT＋XFER	……前の候補群を表示する

システムの最初の設定では、4単語以上同音語があると、このような候補群が表示されますが、この数はf･10−[6.補助機能]−[3.同音語指定]−[2.一覧表示]を選択すると、最初から同音語の候補群が表示されます。

A.7 文節の切れ目を変更する（CTRL＋←／→キー）

日本語入力機能は、辞書を調べながら文節の切れ目を判断しますが、時として私たちの意図しなかったところで文節を区切ってしまうことがあります。これは、再変換の回数を減らすために、できるだけ長い単語と一致するように文節の切れ目を捜すためです。

このような場合は、変換後に、強制的に文節の切れ目を変更してから、再変換します。

たとえば、「ここではきものを」という読みがなを変換する場合を考えてみましょう。

1 「ここではきものを」を「ここでは着物を」に変換してみましょう。この読みがなを入力して変換キーを押すと、「ここで履き物を」と変換されます。

再度変換キーを押しても、「ここで」と「個々で」を行ったり来たりするだけです。

このような場合は、強制的に文節の切れ目を変更します。文節の切れ目を変更するには、次のキー操作を行います。

- 文節を短くする ……CTRLキーを押しながら、←キーも押す。
- 文節を長くする ……CTRLキーを押しながら、→キーも押す。

2 「ここで」という文節を、「ここでは」にするのですから、文節を長くするためにCTRLキーを押しながら→キーも押します（本書では、このような操作を「CTRL＋→キーを押す」と表記しています）。CTRL＋→キーを何回か（この場合は１回）押すと、「ここでは」の部分のみが反転表示され、１文字分文節が長くなったことが分かります。

3 正しく変換されたので、⏎キーで確定します。

```
A>ここでは着物を
 R全かな @                                ひら変 カタ変 英数変 半変 拡張
```

A.8 ひらがな、カタカナ、英数字の入力

ひらがなの入力

●ひらがなだけを連続して入力する

ひらがなだけを入力したい場合は、読みがなを入力したら、（スペースキーなどで変換せずに）すぐに[↵]キーを押して確定します。

●漢字やカタカナ、英字をひらがなにする（ひらがな変換）

入力した読みがながすでに漢字などに変換されている場合や、キーシフト状態が「カタカナ」あるいは「英数」になっている場合に、表示されている文字をひらがなにするには、[f･6]キーを押して、ひらがな変換します。次に例を示します。

1 「ひらがな」を変換すると、漢字で「平仮名」と変換されます。

2 [f･6]キーを押すと、その文節が強制的にひらがなになります。

3 [↵]キーを押して確定します。

カタカナの入力

●カタカナだけを連続して入力する（カタカナシフト）

キーシフト状態を「カタカナ」に変更することで、入力した読みがなを連続してカタカナで入力することができます。

1 SHIFT ＋ f･7 キーを押します。ガイドラインが次のように変わります。

この状態で入力した読みがなは、カタカナで表示されます。⏎キーを押すとそのまま確定し、スペースキー、または XFER キーを押すと漢字かな混じり文に変換されます。

●漢字やひらがな、英字をカタカナにする（カタカナ変換）

表示されている（確定前の）文字をカタカナにする場合は、f･7 キーを押して、強制的にカタカナへ変換します。

▶英数字の入力

キーボード上の英数字を入力するときは、カナ入力をしている方は、[カナ]キーを押してカナロックをはずしておいてください。

●英数字を連続して入力する（英数シフト）

キーシフト状態を「英数」に変更することで、入力した読みがなを連続して英数字で入力することができます。

1 [SHIFT]+[f･8]キーを押します。ガイドラインが次のように変わります。

この状態で入力した読みがなは、英数字で表示されます。[⏎]キーを押すとそのまま確定し、スペースキー、または[XFER]キーを押すと漢字かな混じり文に変換されます。

●漢字やひらがな、カタカナを英字にする（英数変換）

ローマ字入力をしている場合、スペースキーなどで変換する前（文字が黄色の場合）に[f･8]キーを押すと、すべての文字が英数変換され、変換中（水色で反転された文字がある場合）に[f･8]キーを押すと、反転している部分が英数変換されます。英数変換させたい部分を変更する場合は、[↑][↓]キーを使います。

付録A

▶半角英数カタカナの入力

半角（1バイト）のアルファベット、数字、カタカナを入力するいちばん簡単な方法は、日本語入力モードから出て（CTRL＋XFERキー）しまうことです。しかし、アプリケーションによっては、日本語入力モードから出られない場合があります。

ここでは、そのような場合の操作方法を説明します。

●半角文字だけを連続して入力する

1 まず、SHIFT＋f･9キーを押します。入力モードのガイド表示が「全」から「半」になります。半角入力モードに入ったことを表しています。

この状態で読みがなを入力すると、半角のカタカナで表示されます。⏎キーを押すとそのまま確定し、スペースキー、またはXFERキーを押すと変換されます。

2 英数字を表示したい場合は、SHIFT＋f･8キーを押します。ガイド表示が「カナ」から「英数」になります。カナ入力をしていた場合は、カナキーを押して、ロックをはずします。

ここで読みがなを入力すると、半角の英字が表示されます。⏎キーを押すとそのまま確定し、スペースキー、またはXFERキーを押すと変換されます。

●全角文字を強制的に半角の英数カタカナにする（半角変換）

表示されている（確定前の）文字を半角の英数カタカナにする場合は、f･9キーを押して、半角変換します。

A.9 単語の登録

日本語入力機能のひとつとして、ユーザーが独自の単語を独自の読みで辞書ファイル内に登録できる機能があります。辞書ファイルに独自の単語を登録しておけば、変換が正確にできるようになります。

また、この単語登録機能を用いると、短い読みがなで長い単語を登録することもできます。よく使う語は他の語と混同しない短い読みで登録しておけば、タイプの手間を軽減することができます。

新しい語を辞書ファイルに登録する方法には、次の2通りの方法があります。

・日本語入力モード中で、f•10-[1：単語登録]を用いる。
・MS-DOSの辞書ファイル保守ユーティリティ（DICMコマンド）を用いる。

ここでは、日本語入力機能を使用してるその場で登録する、前者の方法を説明します。辞書ファイル保守ユーティリティ（DICM）を用いる方法については、「拡張機能セット」の『日本語入力ガイド』（別売）を参照してください。

●単語登録の手順

f•10-[1：単語登録]で、画面上の2バイト文字を簡単に辞書ファイルに登録することができます。いったん単語とその「読み」を登録すれば、以後はその読みで簡単に変換できるようになります。

登録できる単語の長さと読みがなの長さは、16文字までです。また、半角文字は登録できません。

1 「明広」という文字を「あきひろ」という読みで単語登録してみましょう。CTRL＋XFERキーで、日本語入力モードに入ります。

2 登録したい単語を画面に表示します。この例では、読みがなを「みょう」「ひろ」のように分けて変換し、表示します。登録する前の語は、どんな読みを使ってもかまいませんからともかく目的の漢字を画面に表示してください。

3 f•10-[1：単語登録]で、単語登録モードにします。画面は次のようになります。

```
A>明広
R全かな @      登録:漢字
```

単語登録を中止するには、ESCキーを押してください。

4 登録したい単語の範囲を指定します。まず、矢印キー（↑↓←→）でカーソルを単語の先頭文字に重ね、⏎キーを押します。

```
A>明広
 R全かな @     登録:漢字
```

次に、単語の最後の文字にカーソルを重ねて⏎キーを押します。登録単語は反転表示されます。

```
A>明広
 R全かな @     登録:漢字
```

5 ガイドラインの「漢字」の表示が「読み」に変わり、入力モードが半角入力モードになります。ここで、読みを16文字以内の英数字またはカタカナでタイプします（英記号やカナ記号は使用できません）。ここでは「アキヒロ」とタイプし、⏎キーを押します。

```
A>明広
 R半カナ @     登録:読み ｱｷﾋﾛ
```

6 読みをタイプすると、次は品詞の選択に移ります。登録したい単語に適した品詞を指定してください。品詞の選択には←→キーを使用します。ここで登録する語「明広」は人名ですから、→キーを使って「固有名詞」にカーソルを重ね、⏎キーを押します。

```
A>明広
 R半カナ @     登録:品詞  無  し   基 本 語   動   詞   固有名詞
```

なお、品詞を指定したくないときは、「無し」を選択してください。

7 続いて、より細かい品詞を選択します。ここでは選択する項目が数画面にわたっているので、４つの矢印キー（↑↓←→）を使って品詞を選択します。
ここで登録する単語「明広」に適した品詞は「名前」です。カーソルを「名前」に重ね、⏎キーを押してください。

```
A>明広
R半カナ @    登録:品詞  苗 字    名 前    地 名    団体名
```

これで品詞の選択操作は終わり、同時に単語が辞書ファイルに書き込まれて単語登録操作も終わります。

●登録単語の使い方

登録した単語は、漢字をタイプするのとおなじ方法で、読みのかな文字（またはローマ字）から変換して表示することができます。

●単語登録のポイント

ここでは、単語登録機能を使用する上での工夫をいくつか紹介します。

・読みを略語で登録しておくと、長い読みの入力を省略できます。

例：読み：ふぁっと　登録単語：ファイルアロケーションテーブル

・ただし、読みをあまり短く登録すると、登録した単語を後に連想するのが難しくなりがちで、誤変換の原因ともなります。

例：読み：こ　登録単語：コントロールコード

この例の状態で「ことしのもくひょうは」と入力して変換すると、「コントロールコードと市の目標は」などと誤変換される恐れがあります。

・辞書を、個人別、用途別に分けて作成しておくと、使用を重ねるにつれてそれぞれの辞書に専門用語が蓄えられ、ひいては変換が容易になります。また、学習機能により前回選択した語句が再優先で表示されるので、希望する文字に変換されやすい辞書となります。

・登録した単語や辞書に含まれている単語を画面やプリンタで見るには、辞書ファイルユーティリティ（DICMコマンド）の辞書一覧機能を使用してください。詳細は『日本語入力ガイド』（別売）を参照してください。

付録A

A.10　記号の入力方法

ここでは記号の入力方法を紹介します。

カナ入力をしている方がキーボード上の英記号を入力する場合は、カナキーを押して、カナロックをはずしてから入力します。

キーボードにはない特殊記号を入力する場合は、「きごう」という読みがなで、通常のかな漢字変換と同じ手順で行います。

1 郵便番号のマーク「〒」を入力してみましょう。読みがなに「きごう」と入力します。

2 スペースキーまたはXFERキーを押して変換します。

3 続けてスペースキーまたはXFERキーを押すと、次候補選択の要領で、表示される記号が変わります。

4 希望の候補が表示されたら、⏎キーを押して確定します。

付録

B エラーメッセージと対処方法

MS-DOSを使っていると、いろいろなメッセージが表示されます。その大部分は、「システムメッセージ」と呼ばれるもので、コンピュータがいまどんなことをやっているかをユーザーに知らせる、レポーターの役目をしています。これは、一読して意味を知ることができる簡単な内容です。

しかし、なかには処理の失敗を告げたり、ユーザーに意見を求めてきたりするメッセージもあります。これらを「エラーメッセージ」と呼びます。

エラーメッセージには、次の2種類があります。

デバイスエラーメッセージ

本体や、周辺装置（プリンタやディスクなど）が原因で表示されるエラーメッセージです。MS-DOSは自動的には処理を継続できないので、ユーザーの判断を仰ぐ重要なエラーメッセージです。

一般エラーメッセージ

その他の原因で表示されるエラーメッセージです。

この付録Aでは、これらのエラーメッセージの中から、よく見かけるものを集めて、原因と対処方法を解説します。

ここで解説するエラーメッセージの他に、MS-DOSの各コマンドが独自に表示するエラーメッセージがあります。MS-DOSで表示されるすべてのエラーメッセージは、『ユーザーズリファレンスマニュアル』（別売）に掲載されています。

また、ワープロソフトや表計算ソフトなどの使用中に表示されるエラーメッセージは、ほとんどがそのアプリケーションが表示するメッセージです。そのようなメッセージに関しては、使用しているアプリケーションの説明書を参照してください。

B.1 デバイスエラーメッセージ

デバイスエラーメッセージは、ディスクドライブやプリンタ、ディスプレイなどの周辺装置（デバイス）に対して、データの読み出し／書き込みを行ったときに、MS-DOSが表示するものでです。

たとえば、ドライブBにフロッピィディスクがセットされていない状態で、ディレクトリを調べようとしてDIRコマンドを実行すると、次のようなエラーメッセージが表示されます。

```
A>DIR B:

ドライブの準備ができていません.<読取り中><ドライブ B:>
中止<A>，もう一度<R>，無視<I>?
```

一般に、デバイスエラーメッセージは、次のような形をしています。

〈エラーの内容〉〈読取り中／書込み中〉〈デバイス名〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉？

〈エラーの内容〉は、そのとき起こったエラーの状況を説明するものです。〈デバイス名〉は、エラーが起きた装置を示します。〈読取り中／書込み中〉は、そのとき試みた処理を示すもので、「読取り中」「書込み中」のどちらかが表示されます。

したがって、先ほどの例は、「（ディレクトリを調べるために）ドライブBのディスクを読み込もうとしたが、ドライブの準備ができていませんでした」という意味になります。

〝中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉？〟は、エラーの後の処理をどうしたらよいかをユーザーに尋ねているものです。

ユーザーはA、R、Iのいずれかのキー（半角英文字１字）をタイプして、今後の処理を選択します。

中止〈A〉	Aキー	処理を中止し、そのままMS-DOSにもどる。
もう一度〈R〉	Rキー	もう一度読み書きを試みる。
無視〈I〉	Iキー	失敗した処理を無視し、次の処理に進む。

このエラーメッセージが表示されたときは、通常は次のような手順で対応します。

❶エラーメッセージを読んで、何がエラーの原因かを考えます。
❷エラーの原因を正した後で[R]キーを押します。

たいていの場合は、ちょっとした操作のし忘れが原因です。たとえば、「ドライブの準備ができていません」というメッセージ場合の原因は、ディスクをセットし忘れていたとか、ドライブの蓋をきちんと閉めていなかったなどです。「書込み禁止です」というメッセージの場合は、ライトプロテクトシールを貼ったままにしていた（5インチフロッピィディスクの場合）などです。

この付録Bの後半には、代表的なエラーメッセージが、アルファベット順、五十音順に掲載されているので、参考にしてください。

その他の原因の場合でも、まず、[R]キーをタイプしてみます。エラーの原因が軽ければ、1～数回、[R]キーを押すことによりそのまま処理を続行することができます。

もう一度〈R〉を選択する場合は、必ずエラーが発生したディスクに対して処理を行ってください。ディスクを他のものに差しかえると、そのディスクが破壊される恐れがあります。

それでもエラーメッセージが出るようであれば、処理を中止し、MS-DOSのプロンプト表示状態にもどって、じっくりと原因と対策を考えます。そのためには、[A]キーを押します。この場合、メッセージが出されたときに実行中だった処理の結果は保証されません。

ファイルの読み書き中にこのメッセージが表示された場合、いくつかのファイルは使用できなくなっている可能性が非常に高いと考えられます。

B.2 ファイルが壊れている場合の対処方法

前述のような状況や、CHKDSKコマンドでエラーメッセージが表示された場合、ディスクのいくつかのファイルは使用不可能になっていることが考えられます。このような場合は、問題のあるファイルを突き止めるとともに他の正常なファイルのバックアップコピーを作成します。

この場合は、COPYコマンドを使って、問題のディスク上のファイルを1つずつ、他のディスクにコピーしてください。コピー中にエラーの発生したファイルが問題のファイルです。コピーできるファイルをすべてコピーしたら、RECOVERコマンドによって、問題のファイルの修正を試みます。

参照：RECOVERコマンド➡「ユーザーズリファレンスマニュアル」（別売）

問題のファイルがワープロの文書のような文字だけのファイルの場合は、内容が一部欠落したり順序が入れ換わった状態に修復される可能性があります（このファイルも他のディスクにコピーします）。問題のファイルがプログラムなどのファイルの場合は、残念ながら修復はほとんど不可能でしょう。

デバイスエラーメッセージが出た場合は、使用中のディスクになんらかの問題があるものと考えられます。被害が大きくならないうちに早くファイルのバックアップをとり（このようなときは、エラーを無視してもコピーを取る必要があるので〝I〃を用います）、問題の発生したディスクは使用しないようにする方がよいでしょう。

なお、使用をやめたディスクは、すぐ捨てずに、もう一度フォーマットし直してみることをおすすめします。磁石によるダメージは問題なく回復します。ただし、フォーマットしても、すぐにまたエラーが発生するようであれば、そのディスクは廃棄したほうよいでしょう。

付録B

B.3 メッセージとその対策

ここでは、比較的よく表示されるデバイスエラーメッセージと一般エラーメッセージについて、原因（●印）と対策（○印）を説明します。説明は、アルファベット順と五十音順で掲載されています。この他のメッセージについては、『ユーザーズリファレンスマニュアル』（別売）を参照してください。

0で除算をしました.

●実行しようとしたコマンドのプログラム内部のエラーです。

○コマンドの実行は自動的に中止され、MS-DOSにもどります。コマンドや、アプリケーションプログラム自体に問題があるので、プログラムの修正が必要です。

COMMAND.COMが見つかりません.

●システムディスクに、COMMAND.COMファイルがありません。または、CONFIG.SYSファイル中のSHELLコマンドで指定したパス位置と、実際にCOMMAND.COMファイルの存在しているディレクトリ位置が違っています。

○他のシステムディスクでMS-DOSを起動しなおした後に、エラーメッセージの出たシステムディスクにCOMMAND.COMファイルがなければ、これをコピーします。

なお、このエラーメッセージは、CONFIG.SYSファイルのSHELLコマンドで指定されたパスの位置が、実際にCOMMAND.COMファイルの存在しているディレクトリと違っている場合にも表示されます。このときは、CONFIG.SYSファイルを修正するか、SHELLコマンドで指定したパス位置のディレクトリにCOMMAND.COMをコピーします。SHELLコマンドについては、『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

COMMAND.COMのバージョンが違います.
COMMAND.COMの入っているディスクをカレントドライブに挿入してください.
どれかキーを押してください.

●メモリの大部分を使用するプログラムを実行した場合、MS-DOSはCOMMAND.COMファイルをロードし直します。このとき、COMMAND.COMファイルが見つからないか、または別のバージョンのシステムディスクのCOMMAND.COMを入れた場合に表示されます。

○MS-DOSを起動したときと同じシステムディスクをカレントドライブに入れ、どれかのキーを押してください。またはシステムディスクをドライブに入れ、リセットを押して再起動させます。

CONFIG.SYSに無効なコマンドかパラメータがあります.

●CONFIG.SYSファイルの中で、正しくないコマンドが使われています。

○CONFIG.SYSファイルを確認して、コマンドの綴やCONFIG.SYSファイルでは利用できないコマンドが入っていないか調べます。正しいコマンドとコマンドの書式については、「6.4　システムファイルの仕組み」または『ユーザーズリファレンスマニュアル』を参照してください。

DOSのバージョンが違います.

●現在のMS-DOSのバージョンと、コマンドやアプリケーションプログラムを実行するためのMS-DOSのバージョンが一致していません。

○コマンドやアプリケーションによっては、MS-DOSの特定のバージョンでなければ動作しないものがあります。実行しようとするコマンド、アプリケーションの対応バージョンを確認し、正しいバージョンのMS-DOSで実行しなおしてください。

書き込みができません。〈書込み中〉〈デバイス名〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉?

●表示されたデバイス（通常はディスクドライブ）にデータを書き込むことができません。

○ディスクが正しく入っているかを確かめ、〝R〟を選んでください。もし、同じメッセージが表示されるならば、〝A〟を選びます。前項「重要なエラーメッセージ」で説明されている処理を試みます。

書き込み禁止です。〈書込み中〉〈デバイス名〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉?

●ライトプロテクト（書き込み禁止）が施されているディスクに対して、書き込みを行いました。

○ライトプロテクトをはずし、〝R〟を押します。ただし、プロテクトの施されている理由を考え、本当にデータを書き込んでよいのかどうか確認してから行ってください。

このディスクは使えません。〈読取り中〉〈デバイス名〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉?

●デバイスがMS-DOS用にフォーマットされていません。

○まず、〝A〟を押してMS-DOSにもどってください。つぎにRECOVERコマンドを実行してみます。RECOVERコマンドを実行しても解決しない場合は、そのディスクは、フォーマットされていないか、MS-DOS以外で（たとえばDISK-BASIC）でフォーマットされています。FORMATコマンドでディスクをフォーマットし直してください。ただし、フォーマットを行うと、ディスク上のファイルはすべて消去されます。

このディスクはシステムディスクとしては使えません.

●ディスク上の、システムファイルを書き込む特定の場所が不良です。

○このディスクはデータ用としてのみ使用可能です。

コピーすることはできません.

●COPYコマンドで指定した、コピー元ファイル名とコピー先ファイル名が同じです。たとえば、

```
COPY  file1  file1
```

を実行すると、このエラーが表示されます。

○同じディレクトリ内で、同名のファイルを作成することはできません。ファイル名を変えて、コピーし直してください。

コピー前に送り側の内容が失われました.

●複写元ファイルが、コピーの完了する前に重ね書きされてしまいました。たとえば、次のコマンドでは、コピーの終わる前にbbbファイルの内容が破壊されてしまいます。

```
COPY  aaa+bbb  bbb
```

○複写元ファイルは、ふつう壊されることがないのですが、上記のような例では、例外的に破壊されます。内容の失われたファイルを復旧することはできません。以後、COPYコマンドの書式には十分注意してください。また、このようなときのためにも、バックアップを作るようにしてください。

コマンドまたはファイル名が違います.

●指定したコマンドまたはアプリケーションプログラムが見つかりません。コマンド名やファイル名をまちがえたか、ファイルがディスクに存在していないか、パス（PATH）の設定が正しくありません。

○ファイル名をまちがえていたら、正しく入力し直します。パスが設定されていない場合は、パスを設定するか、ファイル名にパス名をつけるか、カレントディレクトリ中に目的のコマンドファイルがなくてはなりません。パスが設定されているときは、カレントディレクトリ中、または設定パスのディレクトリのいずれかの中に目的のコマンドファイルがなくてはなりません。パスをPATHコマンドで調べ、正しい状態でコマンドを使うようにしてください。

セクタが見つかりません。〈書込み中／読込み中〉〈ドライブ名〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉？

●使用しているディスクに欠陥があるか、ディスクがフォーマットされていないため、そのディスクに正しくアクセス（読み書き）できません。

○ディスクをいったん取り出し、もう一度セットし直してから、〝R〞を押して、再試行を試みます。それでもエラーが発生する場合は、前項「重要なエラーメッセージ」の処理を試みます。エラーの起こったディスクはフォーマットし直してみてください。

データエラーです。〈書込み中／読込み中〉〈ドライブ名〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉？

●使用しているファイルやディスクに欠陥があるため、正しくデータを読み込むことができませんでした。

○ディスクをいったん取り出し、もう一度セットし直してから、〝R〞を押して何度か再試行を試みます。それでもエラーが出るようであれば、〝A〞を押して処理を中止しMS-DOSにもどり、前項「重要なエラーメッセージ」の処理を試みます。エラーの起こったディスクは、フォーマットし直してください。

ディスクがいっぱいです.

●ディスクの容量がいっぱいです。指定されたコマンドを行うための空きがありません。

○ディスク中の不用なファイルを消去するか、別のディスクを使用してください。

ディスクの種別が同じでなければなりません.

●DISKCOPYを実行するには、2枚のディスクは同じ容量でなければいけません。たとえば、2DDディスクから2HDディスクへのDISKCOPYはできません。

○複写元のディスクと同じ容量のディスクを用いるか、COPYコマンドでファイルごとにコピーしてください。ただし、8インチ2Dディスクと5インチ2HDとは、互いにDISKCOPYが可能です。

ディレクトリの指定が違います.

●指定したディレクトリが存在しないか、または不良です。

○入力したディレクトリ名を調べ、正しいディレクトリ名を入力してください。

ディレクトリは作成できません.

●指定したディレクトリが作成できません。指定した名前がすでにファイル名として使われているか、またはディスクがいっぱいです。

○DIRコマンドでカレントディレクトリを調べ、違うディレクトリ名を指定します。ディスクの容量がいっぱいのときは、不要なファイルを消去するか、別のディスクを使用してください。

ドライブの準備ができていません。〈書込み中／読込み中〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉？

●メッセージに表示されたディスクドライブは、準備ができていません。

○ディスクが正しくドライブに入っていない場合は、きちんと入れ直します。また、ドライブの蓋が開いている場合は、閉じてください。それから"R"を選びます。

トラック0が不良です。このディスクは使えません.

●MS-DOS用にフォーマット（初期化）できない重要な欠陥があります。

○このディスクは、MS-DOSでは使用できません。他のディスクを使ってください。

パスの指定が違うか、ディレクトリでないかまたはディレクトリが空ではありません.

●ディレクトリ名の綴りが違うか、ディレクトリ中にまだファイルやサブディレクトリが残っています。

○消去しようとしたディレクトリのパス名を正しく指定してください。また、ディレクトリに"."および".."以外のファイルやディレクトリがあると、そのディレクトリは消去できませんので、ファイルやディレクトリをすべて消去してから、RMDIRコマンドを実行してください。

パスまたはファイル名が違います.

●指定したパス名またはファイル名にまちがいがあります。

○パス名またはファイル名を正しく指定してください。

バッチ処理を中止しますか〈Y/N〉？

●バッチファイルを実行中に[CTRL]＋[C]キーを押した場合に表示されます。

○バッチ処理を中止する場合は[Y]（Yes）を、続行する場合は[N]（No）を押してください。いずれの場合も、[CTRL]＋[C]キーを押したときに実行中だったコマンドの処理結果は保証されません。

バッチファイルのあるディスクをドライブに差し込み、どれかキーを押してください.

●指定したバッチファイルの入っているディスクがドライブにありません。バッチ処理の進行中、ディスクを入れ換えたりすると、このメッセージが表示されます。

○バッチファイルの入っているディスクを指定したドライブに挿入し直してから、どれかキー（スペースキーや[↵]キーなど）を押してください。

パラメータの数が違います.

●指定したパラメータ（引き数）の個数がまちがっています。

○コマンドの書式を調べ、正しいパラメータを指定してください。

パラメータの指定が違います.

●指定したパラメータ（引き数）の書き方がまちがっています。

○コマンドの書式を調べ、正しいパラメータを指定してください。

日付の指定が違います.

●MS-DOS起動時、またはDATEコマンド実行時に、入力した日付の形式や数字にまちがいがあります。

○正しい形式で、日付を入力しなおしてください。

ファイルアロケーションテーブルが不良です.

●ディスクが正しくフォーマットされていません。または、ディスクがMS-DOSではないオペレーティングシステムのものです。

○RECOVERコマンドを実行してディスクを修復してください。

ファイルが見つかりません.

●指定したファイルが見つかりません。

○指定されたディレクトリ内にファイルが存在しているかどうか、またはファイル名が正確かどうかを調べてください。

ファイル名が重複しているか、またはファイルが見つかりません.

●指定したファイルが見つからないか、またはすでに存在しています。

○指定されたディレクトリ内にファイルが存在しているかどうか、またはファイル名の綴を調べてください。

プログラムが大きすぎてメモリに入りません.

●コマンドまたはアプリケーションの実行に必要なメモリ容量が不足しています。

○メモリの増設が必要です。ただし、MS-DOSを再起動することにより。そのまま実行できることもあります。

文法が違います.

●入力したコマンドの書式がまちがっています。

○コマンドの書式が正しいかどうか調べてください。

メモリが不足です.

●コマンドまたはアプリケーションの実行に必要なメモリ容量が不足しています。

○メモリの増設が必要です。ただし、MS-DOSを再起動することにより、そのまま実行できることもあります。

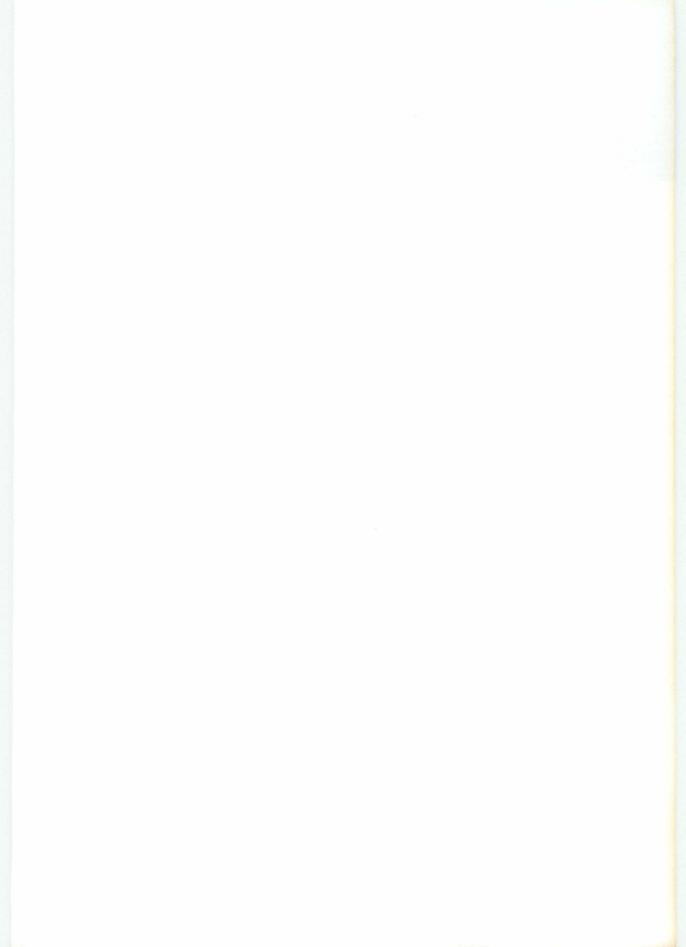
メモリのアロケーションエラーです.
COMMAND.COMをロードできません.

●システムディスク中のシステムファイルに問題があります。または、不良なコマンドを実行しています。

○システムディスクが壊れています。バックアップディスクから、新しいシステムディスクを作成して、MS-DOSを起動し直してください。

読み取りができません。〈デバイス名〉〈読込み中〉
中止〈A〉、もう一度〈R〉、無視〈I〉?

●表示されたディスクまたはデバイスからデータを読み取ることができません。

○ディスクが正しく入っているかどうか確かめ、〝R〞を押してください。もし、同じメッセージが表示されるならば、前項「重要なエラーメッセージ」の処理を試みます。

付録 C 用語集

ここでは、本書を使われている、コンピュータ関係、特にMS-DOSに関係する用語をアルファベットと五十音順にまとめて解説します。

本文中の〝→半角文字〞のような表記は、用語集の中で関係する事項が解説されている箇所を示しています。

数字

1バイトコード文字

コンピュータでは、すべての文字は〝コード〞に変換されて処理される。〝1バイトコード文字〞はコードに変換したときに1バイトの情報量で表される文字。キーボードから普通に入力した文字が、1バイトコード文字である。→半角文字

2バイトコード文字

コードに変換したときに2バイトの情報量で表される文字。日本語入力機能によって入力した文字（漢字、ひらがななど）は、2バイトコード文字である。→全角文字

A～Z

BASIC

〝Beginners All purpose Symbolic Instruction Code〞の略。学びやすく使いやすいプログラミング言語として、広く使われている。

C言語

プログラミング言語のひとつ。OSなどのシステムソフトウェア開発に適する。Cで書かれたプログラムは、他の機種でも動作させることが容易なため、いろいろなソフトウェアの開発に広く用いられている。

CPU

〝Central Processing Unit〞の略。命令を実行するのに必要な回路を持った、コンピュータの部品の1つ。システム全体のコントロールやデータの計算、比較、判断などの処理を行う。コンピュータの心臓部である。

RAM

〝Random Access Memory〞の略。コンピュータのデータやプログラムなどを記録しておく部分。RAMには自由に情報を読み書きすることができるが、一般に電源が切断されるとその内容は消去してしまう。→ROM、メモリ

RAMディスク

RAMの一部をディスクドライブと同じように使えるようにしたもの。RAMディスクは、システム構築ファイル（ファイル名〝CONFIG.SYS〟）内にRAMディスクドライバ（ファイル名〝RAMDISK.SYS〟）を組み込むことによって、利用することができる。

ROM

〝Read Only Memory〟の略。コンピュータの部品の1つで、データやプログラムなどを記録しておく部分。ROMはあらかじめ情報が書き込まれている。読み出し専用のメモリ。電源を切ってもその内容は失われない。→RAM、メモリ

RS-232C

コンピュータと外部装置をつなぐインターフェイスの規格の名称。パーソナルコンピュータの外部インターフェイスの標準規格として広く採用されており、通信や、各種装置の制御に用いられる。これに従ったマウス、モデムなどが多く出回っている。→インターフェイス

あ行

アクセス（読み書き）

情報のやりとりをすること。特に、コンピュータと周辺機器の間で、データのやりとりをすること。たとえば、〝ディスクにアクセスする〟とは、ディスクに対して書き込み／読み込みの操作を行うことを意味する。

アプリケーション

ある特定の仕事をするために開発されたソフトウェアのこと。ワードプロセッサや表計算、ゲームなどのソフトウェアは、すべてアプリケーションである。アプリケーションは、通常フロッピィディスクで供給される。

インターフェイス

システムとシステムの連結部分。特に、コンピュータと周辺装置の連結部分で、接続装置と、それを制御するソフトウェアを含めたものを指す。たとえば、〝プリンタインターフェイス〟とは、コンピュータ本体とプリンタをつなぐ回路やコネクタなどと、プリンタを制御するプログラムを指す。

エディタ

コンピュータで、テキスト（文章）ファイルを作成するためのプログラム。文字または文章の追加、移動、削除などを行ってテキストを編集し、できあがったテキストをファイルとしてディスクに書き込み／読み出す、といった機能を持つ。エディタには、行番号を指定しながら編集を進めるラインエディタと、画面全体の任意の文字の編集ができるスクリーンエディタがある。

MS-DOSに標準で備えられている〝EDLIN〟はラインエディタ、〝SEDIT〟はスクリーンエディタである。

親ディレクトリ

階層ディレクトリ構造で、あるディレクトリが登録されている、1階層上のディレクトリのこと。たとえば、〝¥ETC″の親ディレクトリは、ルートディレクトリ（¥）である。MS-DOSでは、カレントディレクトリの親ディレクトリを〝..″で表すことができる。→階層ディレクトリ構造

か 行

階層ディレクトリ構造

ファイルを整理して登録、管理するための機能の1つ。ファイルの登録簿であるディレクトリを複数もつことによって、ファイルを分類して管理することができる。

MS-DOSでは、複数のディレクトリがビルのような階層を形作る。このため、こうしたディレクトリ構造を〝階層ディレクトリ構造″と呼ぶ。→ディレクトリ

外部コマンド

普段は、プログラムファイルの形でディスクに収められており、必要に応じてメモリに読み込まれて実行されるコマンド。外部コマンドのプログラムファイルには、〝.COM″〝.EXE″という拡張子が付いている。→内部コマンド

拡張子

ファイル名の一部。ファイル名に拡張子を付ける場合は、ファイル名本体との間をピリオド（.）で区切って3文字以内の拡張子を続ける。拡張子はファイルを判断するのに使用されることが多い。たとえば、テキストファイルならば、〝.TXT″、BASICのファイルならば〝.BAS″のように使用する。また、ほとんどのアプリケーションソフトでは作成したファイルに独自の拡張子を付ける。

カレントディレクトリ

MS-DOSが現在注目しているディレクトリのこと。特にディレクトリ指定を行わなければ、MS-DOSはカレントディレクトリを参照する。

カレントドライブ

MS-DOSが現在注目しているドライブのこと。特にドライブ指定を行わなければ、MS-DOSはカレントドライブのディスクを参照する。カレントドライブはプロンプトに表示される。たとえば、プロンプトが〝B〉″ならば、カレントドライブは〝B″である。

間接入力

日本語入力で、まずガイドライン上で文字の入力・変換を行った後、画面上のカーソル位置に確定した文字列を移す方法。入力方法には、この他に直接入力がある。→直接入力

記憶密度

フロッピィディスクなどの記憶容量を決める要素のひとつ。単密度（1D）、倍密度（2DD）、高密度（2HD）などの種類がある。ディスクの記憶容量は、記憶密度の他に、ディスクサイズ（5インチ、8インチなど）と記憶形態（片面、両面など）によって決定される。

言語ソフトウェア

プログラムの開発に用いるソフトウェア。定まった文法に従って書かれたテキストファイルから、CPUで実行できるファイルを作成する。BASIC、C、FORTRANなど、用途によっていろいろな種類がある。ユーザーは、これらのソフトウェアを利用して、独自のプログラムを作成することができる。

互換性

互いに換えて使える性質のこと。たとえば、ある機種で使えるプログラムが、違う機種でも利用できる場合、このプログラムには互換性があると言う。

固定ディスク

ディスク装置の1種類。フロッピィディスクのような、柔らかいシートではなく、堅い金属の円盤にデータを記録する。一般にフロッピィディスクのようにディスクを交換できるものに対しディスクを交換できないのでこう呼ばれる。固定ディスクはフロッピィディスクよりもアクセスする時間が短く、多くの情報を蓄えることができる。ハードディスクとも呼ばれる。

コマンドプロセッサ

OSを構成するソフトウェアの1つで、入力されたコマンドを解釈して、実行する機能を持つもの。MS-DOSのコマンドプロセッサは、〝COMMAND.COM〟である。

コマンド検索パス

MS-DOSがコマンドを捜すディレクトリをあらかじめ指定したもの。コマンド検索パスの設定は、PATHコマンドによって行う。

コンソール

コンピュータや他の装置に対して指令を与えたり、コンピュータ内部の状態を表示されたりすることのできる装置。具体的には、キーボードとディスプレイを指す。デバイスファイル名は〝CON〟。

コントロールキー

コントロールキーはシフトキーなどと同じように、このキーを押しながら他のキーを同時に押すことにより使用するもので、特別な動作（たとえば、コマンドの中止やプリンタへの出力など）を行うときに用いる。本書ではコントロールキーを、CTRLキーと表記している。

付録C

さ 行

サブディレクトリ

ルートディレクトリ以外のディレクトリ。ファイルを整理して管理するために用いる。サブディレクトリは、目的に応じてユーザーが作ることができる。

辞書ファイル

日本語入力に必要な、漢字や熟語などの語句を収めたファイル。日本語入力機能は、この辞書を用いながら、入力された読みがなを漢字などへ変換する。システムディスクに用意されている辞書ファイルは、〝NECAI.SYS〟〝NECDIC.SYS〟である。

システムディスク

OSなど、コンピュータの管理機能を持ったソフトウェアの入ったディスク。特に、システムを起動できるディスクを指す。

システムファイル

OSの中核となるファイル。MS-DOSのシステムファイルは、〝IO.SYS〟、〝MSDOS.SYS〟、〝COMMAND.COM〟の３つである。

システム構築ファイル

MS-DOSで、デバイスドライバの組み込みや、動作などの環境を設定するファイル。ファイル名は〝CONFIG.SYS〟である。CONFIG.SYS内に、必要な情報を書き込むことにより、自分の環境を変更できる。

実行可能ファイル

ファイル名を入力する（拡張子は省略できる）ことにより、実行できるファイルのこと。MS-DOSの実行可能ファイルは拡張子が、〝.COM〟〝.EXE〟〝.BAT〟のいずれかである。

周辺装置

コンピュータ本体以外の装置のことで、〝デバイス〟とも呼ばれる。具体的には、プリンタやディスクドライブ、ディスプレイなどを指す。MS-DOSでは、周辺装置をファイルとして扱うことができるようになっている（デバイスファイル）。

書式

命令の書き方に関する規則。コマンドごとに、決められた書式がある。

セーブ

コンピュータの内部記憶装置（メモリ）のデータを、ディスクなどの外部記憶装置に記録すること。→ロード

全角文字

漢字、ひらがななど、通常入力文字（半角文字）の倍の幅で表示される文字のこと。全角文字はすべて2バイトコード文字である。→半角文字、2バイトコード文字

た行

直接入力

日本語入力で、画面上のカーソル位置に文字を入力し、そこで変換・確定する方法。→間接入力

ディレクトリ

ディスクにセーブされているファイル名の一覧のこと。ディレクトリは、ファイル名とその大きさ、および作成（または最後に変更）した日時などの情報を含んでいる。MS-DOSでは、このディレクトリを木（ツリー）状に重ねて階層ディレクトリ構造として、ファイルの効率的な管理を助けている。

ディレクトリ名

ディレクトリに付ける名前。ルートディレクトリ以外のサブディレクトリには、すべてディレクトリ名が必要である。名前の付け方は、ファイル名の場合と同じであるが、拡張子は付けないことが多い。

テキストファイル

人間が読める文字だけで構成されているファイルで、文字ファイル、テキストファイルなどとも呼ばれる。コンピュータでは、すべての文字が〝コード〟に変換されて処理される。この変換方法、すなわちどの文字をどのコードに変換するかを定めた規格のひとつが、ASCII（American Standard Code for Information Interchange：情報交換用米国基準コード）である。ASCIIに従って作られたファイルのことを、アスキーファイルという。

デバイス

→周辺装置

デバイスドライバ

デバイス（周辺装置）の制御のために用意されているファイルのこと。たとえば、マウス制御ファイル（マウスドライバ）は、〝MOUSE.SYS〟である。

デバイスファイル名

MS-DOSでは、デバイス（周辺装置）をファイルとして扱うことができるようになっており、それぞれにファイル名（デバイスファイル名）が用意されている。デバイスファイル名には、〝AUX〟〝COM〟〝PRN〟〝NUL〟〝CLOCK〟などがあり、これらの名前をディスクファイルに用いることはできない。

テンプレート

キーボードから入力されたデータを記憶しておくバッファ（一時的にデータを保持しておく記憶領域）の名称。テンプレートのデータは、簡単なキー操作で、コマンド行に呼び出すことができ、この機能を〝テンプレート機能〟と呼ぶ。テンプレート機能を利用すると、コマンドの入力の手間が軽減される。

ドライブ名

ディスクドライブ1台1台を指定するための名前。MS-DOSでは、ドライブ名をそのドライブを表すアルファベット1文字とコロン（:）で表現する。ドライブ名は、MS-DOSに参照されるドライブを指定するもので、省略するとカレントドライブが参照される。

な 行

内部コマンド

常にメモリに存在しており、MS-DOSのプロンプトが表示されていれば、いつでも実行することができるコマンド。COMMAND.COM内にある。→外部コマンド

ネットワーク機能

複数のコンピュータシステムを連結して情報をやり取りする機能。コンピュータ間の通信や、プリンタ、固定ディスクなどの周辺装置の共有を行うことができる。

は 行

バイト

コンピュータが扱うことができる情報単位。1バイトは、8ビットからなる。ファイルの大きさ、ディスクに記憶できるデータの量。本体のメモリの量などを表すのに用いる。たとえば、アルファベット1文字を記憶するには、1バイト分のメモリを必要とし、漢字1文字の場合は、2バイトを必要とする。

数値が非常に大きくなる場合は、K（キロ）、M（メガ）の記号を用いて表す。この場合1Kバイトは1024バイト、1Mバイトは1024Kバイトである。たとえば、〝1Mバイト〟ディスクには、アルファベットで約100万文字（漢字なら50万文字）の情報を記憶できる。→ビット

バイナリファイル

内容が機械語（2進数）であるプログラムや、データなどが収められているファイル。テキスト（文章）ファイルと異なり、内容を画面に表示して直接読むことはできない。→テキストファイル

パイプ機能

あるコマンドの出力（実行結果）を、自動的に、次のコマンドの入力とするMS-DOSの機能。コマンドからコマンドへデータを受渡しする際に、いちいち出力を収めるファイルを作成する必要がなくなる。パイプ機能を利用するときは、2つのコマンドの間に、縦線（|）を入れる。〝フィルタ〟と呼ぶ処理は、こ

のパイプ機能を利用して行う。→フィルタ

バックアップ

予測できない事故に備えた、予備のシステム。特にディスクやファイルが突然使用できなくなる事故に備えて、他のディスクなどに複製を作ること、またはその複製。

パス

階層ディレクトリ構造で、あるディレクトリから、ディレクトリのつながりを伝って、他のディレクトリに達するまでの経路。ルートディレクトリからの経路を絶対パス、カレントディレクトリからの経路を相対パスと呼ぶ。

パス名

階層ディレクトリ構造で、ルートディレクトリまたはカレントディレクトリから、目的のディレクトリを指定する名前。基点となるディレクトリから、目的のディレクトリに達するまでの道順を、途中で通過するディレクトリ名を￥記号で区切りながら並べる。基点がルートディレクトリの場合は絶対パスと呼び、￥記号で始まる。基点がカレントディレクトリの場合は相対パスと呼び、ディレクトリ名から始まる。→階層ディレクトリ構造

バッチ処理

一連の処理を一括して自動的に処理する方法。一定の順序で同じコマンドを何回も繰り返すことが多い処理（たとえば、プログラム開発や、特定のファイルのコピー）に利用すると、個々のコマンドを毎回キーボードから入力する手間がなくなる。あらかじめ、処理の手順を記したバッチファイルを用意しておく。→バッチファイル

バッチファイル

バッチ処理の手順を記したファイル。連続して実行したい、複数のコマンドを収めておくと、MS-DOSは、このファイルの中のコマンドを次々に実行する。拡張子には必ず〝.BAT〟を付ける。〝AUTOEXEC.BAT〟という名前のバッチファイルは、MS-DOSの起動時に自動的に実行される。

ハードコピー

一般に、プリンタで出力（印字、印刷）したもの、または出力すること。特に、COPYキーで、画面の様子を出力したもの。画面表示のように消えることがないので、この名称がある。

付録C

半角文字

漢字やひらがななどの全角文字に対し、その半分の幅で表示される文字。半角文字には、１文字記憶するのに、メモリを１バイト必要とするもの（１バイトコード文字）と、２バイト必要とするもの（２バイトコード文字）がある。キーボードから普通に入力した、アルファベット、数字、記号、カナ文字は、１バイトコードの半角文字である。２バイトコードの半角文字は、漢字やひらがなと同様に、日本語入力機能を利用して入力する。→全角文字、１バイトコード文字、２バイトコード文字

ビット

〝Binary Digit〟の略。２進数の１桁で、コンピュータが扱う情報の最小単位。１ビットで〝0〟と〝1〟の、２つの状態を表現できる。

表計算ソフトウェア

表の形式を利用して、計算などの処理をするソフトウェア。各種の統計、集計計算に適している。画面には、集計用紙のような、縦横の枠が用意され、枠の中に数字、文字、計算式を入れるだけで、縦横の合計や平均などを容易に求めることができる。見積計算、売上計算、住所録など、表の形式を利用した多くの処理に応用することができる。

ファイル

関連した情報の集まり。特に、ディスクに保存されるひとまとまりの情報。コンピュータは、１つのプログラム、ワープロで作成した１つの文書、ひとまとまりのデータなどを、それぞれ１つのファイルとして取り扱う。また、MS-DOSでは、プリンタやディスプレイ画面などの装置もディスクのファイルと同様に操作できるようにして、操作性を高めている。

ファイル名

ファイルごとに付けた名前。ファイルの中の情報は、このファイル名で指定して、操作する。

MS-DOSで用いるファイル名は、主ファイル名（８文字まで）と、拡張子（３文字まで）の組み合わせで表す。拡張子は、省略することができるが、用いる場合は、主ファイル名との区切りにピリオド（.）を必ずつける。あるファイルと他のファイルを区別するため、ファイル名は重複してはいけない。ファイル名に、ドライブ名や、パス名を付けたものも、広い意味でファイル名と呼ぶ。

ファイル名拡張子

→拡張子

フィルタ

標準入力からのデータを加工して、標準出力に出力するコマンド。パイプ機能によって、他のコマンドと組み合わせて用いることが多く、あるコマンドの出力を加工して、再び出力する働きから、この名称がある。MS-DOSでは、入力をアルファベット順に並び替えて出力するSORTコマンド、入力を1画面ごとに区切って出力するMOREコマンド、入力の中から指定した文字列だけを出力するFINDコマンドが用意されている。

プログラム言語

→言語ソフトウェア

プロンプト

コンピュータがユーザーに入力を要求していることを示すために表示する記号などを指す。プロンプトが表示されているとき、ユーザーはコマンドを入力することができる。MS-DOSのプロンプトは、ふつうカレントドライブを示す文字（A、Bなど）と〝>〟記号で表示される。その他、コマンドがプロンプトを用意している場合もあり、たとえばラインエディタEDLINのプロンプトは〝*〟記号で表示される。

補助入出力装置

RS-232Cインターフェイスによるデータ入出力装置のこと。デバイスファイル名は〝AUX〟である。→RS-232C

ボリュームラベル

ディスクにつけられた名前のこと。ボリュームラベルは、ディスクのフォーマット時（FORMATコマンド）、またはLABELコマンドで付けることができる。ボリュームラベルに付けられる文字数は、半角文字（1バイトコード文字）で11文字以内である。

ボーレート

ボーレート（BPS）は、1秒間に転送できるデータのビット量を表す単位。たとえば、ボーレートが1200BPSならば、1秒間に1200ビットのデータを送ることができる。

ま行

マイクロプロセッサ

→CPU

マウス

コンピュータの周辺装置（入力装置）の1つ。位置の情報を入力するのに向いている。形がねずみに似ていることからこの名前がついた。

メモリ

コンピュータ内部の記憶装置。実際の作業に必要なプログラムやデータは、いったんこのメモリに読み込まれてから使用される。メモリには、〝ROM（読み出し専用メモリ）〟と〝RAM（書き込み可能なメモリ）〟の2種類があるが、単に〝メモリ〟という場合には、RAMのことを指している場合が多い。→RAM、ROM

や 行

ユーティリティソフトウェア

ファイル変換プログラムやプリンタ出力プログラムのように、OSやプログラミング言語の働きを助けるような補助プログラムの総称。単に〝ユーティリティ〟とも言う。MS-DOSに用意されているユーティリティには、〝FC（ファイル比較ユーティリティ）〟〝DICM（辞書ファイル保守ユーティリティ）〟などがある。

ら 行

リダイレクト機能

通常のコマンド入出力先（キーボードとディスプレイ）を他のファイルに切り換える機能。MS-DOSでは、周辺装置をファイルとして扱っているので、リダイレクト機能によって便利な操作が行える。たとえば、DIRコマンドの出力先をディスクファイルやプリンタに切り換えることによって、結果をそのままファイルに収めたり、プリントアウトする、といった操作が自在に行える。

ルートディレクトリ

MS-DOSで用いるすべてのディスクが、必ず最初から持っているディレクトリ（ディスクの内容一覧）。階層ディレクトリ構造の元となるディレクトリで、〝￥〟記号で表される。ルートディレクトリ以外のディレクトリは、すべてサブディレクトリである。

ロード

ディスクなどの外部記憶装置に記録されたデータやプログラムをコンピュータ内部のメモリに読み込むこと。→セーブ

わ 行

ワイルドカード

ファイル名を構成する文字の代わりに用いる一種の代用文字で、〝*〟と〝？〟の2種類がある。〝？〟は任意の1文字を、〝*〟はあらゆる文字列を表す。ワイルドカード文字を用いると、複数のファイル名を簡単に指定することができる。

付録

D MS-DOSコマンド一覧

ここでは、MS-DOSシステムディスクで提供されている、すべてのMS-DOSコマンドの入力の規則と書式をまとめたものです。本書で解説したコマンドは、これらの中の、もっとも使用頻度の高いものです。

すべてのコマンドに関する、用例などを含めた詳細な説明は、『ユーザーズリファレンスマニュアル』（別売）で行われています。

D.1 MS-DOSコマンド表記法

ここでは、コマンドの書式の解説に、次のような 表記法を用いています。

表　記	意　味
英大文字	その綴りどおりに入力しなければならないコマンド名、スイッチ文字です。実際の入力は、小文字でもできます。 例：DIR
記号	カンマ（，）、コロン（：）、セミコロン（；）、スラッシュ（／）、等号（＝）、などの記号はコマンドの一部です。表示されているとおりに、その位置にします。
〈 〉　山形カッコ	ユーザーが入力する項目を示します。 例：DEL 〈ファイル名〉 〈ファイル名〉の部分に、ユーザーは実際のファイル名を指定します。
[ ]　角形カッコ	必要に応じて入力する項目を示します。 例：TIME [〈hh〉:〈mm〉] 〈hh〉:〈mm〉は、省略することが可能です。
…　繰り返し記号	必要に応じて、直前の項目を繰り返して入力できることを示します。
¦　縦線	選択できる項目の区切り、またはフィルタとして使った場合のパイプを意味します。 例：BREAK [ON ¦ OFF]　ONかOFFを選択できます。 DIR ¦SORT　パイプ

D.2　ファイル名の規約

ファイル名は、次の規則に従ってつけます。

- ファイル名は、半角（1バイト）文字で1～8文字までの長さです。
- 拡張子は、半角（1バイト）文字で1～3文字の長さです。
- 拡張子の前には必ず半角のピリオド“.”を付けます。

〈ファイル名〉[〈.拡張子〉]
[〈d:〉]　〈ファイル名〉[〈.拡張子〉]
[〈d:〉]　[¥][〈ディレクトリ名〉¥]…[〈ディレクトリ名〉¥]〈ファイル名〉
[〈.拡張子〉]

〈d:〉は、ドライブ名です。
¥記号は、ディレクトリ名の区切り記号ですが、単独で使用した場合はルートディレクトリを表します。
ファイル名には、漢字やひらがななどの全角文字も使用できます。その場合、全角文字1文字は、半角文字2文字分と数えます。

▶予約ファイル名

ファイル名として、次のものは使用できません。

CON　PRN　NUL　CLOCK　AUX　AUX1　AUX2

D.3　ディレクトリ名の規約

ディレクトリの名前は、次の規則に従ってつけます。

- ディレクトリ名は半角（1バイト）文字で1～8文字までの長さです。
- 拡張子は、半角（1バイト）文字で1～3文字の長さです。
- 拡張子の前には半角のピリオド“.”を付けます。

[¥]〈ディレクトリ名〉
[〈d:〉][¥]〈ディレクトリ名〉

〈d:〉は、ドライブ名です。
最初の¥（1文字のみ）は、ルートディレクトリを表します。

ディレクトリ名とディレクトリ名や、ディレクトリ名とファイル名の間には、必ず区切り記号として￥記号を入れます。

ディレクトリ名には、漢字やひらがななどの全角文字も使用できます。その場合、全角文字1文字は、半角文字2文字分と数えます。

▶パス名

パス名は、ディレクトリが階層構造を持つ場合、特定のディレクトリを指定する際に使用します。

[〈d:〉][￥][〈ディレクトリ名〉￥]…[〈ディレクトリ名〉￥]〈ファイル名〉

最初の￥（1文字のみ）は、ルートディレクトリを表します。

￥記号はパス名中の区切り記号でもありますが、単独で用いた場合はルートディレクトリを指します。

[〈ディレクトリ名〉￥]…[〈ディレクトリ名〉￥]は、目的のファイルに達するまでのディレクトリ名を連ねたものです。

カレントディレクトリとその親ディレクトリ（1階層上のディレクトリ）は、次の記号で指定することもできます。

.	カレントディレクトリを表します。
..	カレントディレクトリの含まれる親ディレクトリを表します。

〝.〟、〝..〟は、どちらも半角文字で指定します。

D.4 コマンド一覧

MS-DOSの中で使用できるコマンドの書式と機能を次に示します。各コマンドの詳細な説明は、『ユーザーズリファレンスマニュアル』(別売)を参照してください。

ADDDRV　　外部コマンド

●機　能　　MS-DOSの起動後に、日本語入力機能などを組み込みます。

●書　式　　ADDDRV 〈デバイス定義ファイル〉

●例　　起動後にAIかな漢字変換機能を組み込む。ADDDRVコマンドの使用前に次のような内容のファイル(ここでは"NECAI.DEV")を作成しておく。

```
DEVICE=NECAIK1.DRV
DEVICE=NECAIK2.DRV
```

次のように入力して、AIかな漢字変換機能を組み込む。

```
ADDDRV  NECAI.DEV
```

APPEND　　外部コマンド

●機　能　　データファイルの検索パスを設定します。

●書　式　　1. APPEND [〈d:〉][〈ディレクトリ名〉][;[〈d:〉][〈ディレクトリ名〉]…]
　　　　　　2. APPEND [;¦/R]

●スイッチ　　/R　現在の設定を取り消すとともに、APPENDコマンドが使用していたメモリ領域を解放する。

現在設定されているデータファイル検索パスを削除するだけのときは、(2)の書式(APPEND;)を使用します。

ASSIGN　外部コマンド

●機　能　論理装置の物理装置への割り当て変更を行います。またあるドライブ名を別のドライブに割り当てます。

●書　式　ASSIGN　[〈論理装置指定＝物理装置指定〉]¦/?

●スイッチ　/?　ASSIGNコマンドの使用法を表示します。

ATTRIB　外部コマンド

●機　能　ファイルの属性を設定または表示します。

●書　式　ATTRIB　[+R¦-R][+A¦-A][〈d:〉][〈ファイル名〉]

●スイッチ
+R　属性をリードオンリー（読み出し専用）にする。
−R　リードオンリーを解除する。
+A　ファイルの属性をアーカイブにする。
−A　ファイルのアーカイブ属性を解除する。

●例　ファイル"MYFILE.TXT"をリードオンリーに設定する。

```
ATTRIB  +R  MYFILES.TXT
```

BACKUP　　外部コマンド

●機　能　　固定ディスクからフロッピィディスクに、一つまたはそれ以上のファイルのバックアップを行います。

●書　式　　BACKUP　[〈d:〉][〈ファイル名〉][〈d:〉][/S][/M][/A][/P][/D:〈日付〉][/T:〈時刻〉][/L:〈ファイル名〉]

●スイッチ
/S　サブディレクトリもバックアップします。
/M　最後のバックアップ以後に、変更のあったファイルだけをバックアップします。
/A　すでにバックアップフロッピィディスク上にある、バックアップされたファイルに追加します。
/P　それぞれのフロッピィディスクに、可能な限りたくさんのファイルを詰め込みます。自動的にサブディレクトリを作成する場合があります。
/D:　指定する日付以降に変更したファイルをバックアップします。
/T:　指定する時刻以降に変更したファイルをバックアップします。
/L:　指定するファイルにバックアップ記録を作成します。

付録D

BREAK　　内部コマンド

●機　能　　CTRL＋Cのチェック機能を設定します。

●書　式　　BREAK　[ON¦OFF]

●スイッチ
ON　CTRL＋Cのチェックを行う。
OFF　CTRL＋Cのチェックは、プログラムに任せる。

CD（CHDIR）　　内部コマンド

●機　能　　カレントディレクトリを変更または表示します。

●書　式　　CD　[〈d:〉][〈パス名〉]

CHKDSK　外部コマンド

●機　能　指定するドライブのすべてのディレクトリを調べ、ファイルおよびディスクの状態を画面に表示します。

●書　式　CHKDSK　[〈d:〉][〈ファイル名〉][/F][/V]

●スイッチ
- /F　ディスクにエラーが発見されると、自動修復を行います。
- /V　エラーメッセージの他に、ディレクトリの詳しい状況を報告します。

CLS　内部コマンド

●機　能　画面を消去します。

●書　式　CLS

COMMAND　外部コマンド

●機　能　新たにコマンドプロセッサを起動します。

●書　式　COMMAND　[〈d:〉〈パス名〉][〈デバイス〉][/P][/C〈文字列〉][/E:〈N〉]

●スイッチ
- /P　COMMND.COMに、それ以上高いレベルへの抜け出しを禁止するよう指示します。AUTOEXEC.BATを実行します。
- /C　〈文字列〉で指定するコマンドの実行をコマンドプロセッサに指示し、終了後もどります。
- /E:　環境文字列のために確保されるメモリ（環境文字列テーブル）の大きさの初期値を、〈N〉で指定した数値を越えない最大の16の倍数のバイト数に変更します。〈N〉は10進数で、160～32768まで指定可能です。初期値は160バイトです。

COPY
内部コマンド

●機　能　ファイルのコピーを作成します（書式1）。コピーはファイル単位でも、ディレクトリ単位でも行えます。またファイルの連結も行うことができます（書式2）。

●書　式
1. COPY {〈ファイル名〉¦〈パス名〉}[/A][/B] {〈ファイル名〉¦〈パス名〉}[/A][/B][/V]
2. COPY 〈ファイル名〉+〈ファイル名〉+[〈ファイル名〉…] 〈ファイル名〉

●スイッチ
/V　ベリファイ（照合）を指定します。
/A　指定するファイルをアスキーファイルとして処理します。
/B　指定するファイルをバイナリファイルとして処理します。

COPYA
外部コマンド

●機　能　補助装置との間でデータを送ったり（書式1）、受け取ったり（書式2）します。

●書　式
1. COPYA [[/B][〈d:〉][〈パス名〉]〈ファイル名〉 AUX]¦/?
2. COPYA [[/B] AUX [〈d:〉][〈パス名〉][〈ファイル名〉]]¦/?

●スイッチ
/B　データをバイナリモードで転送します。
/?　COPYAコマンドの使用法を表示します。

CTTY
内部コマンド

●機　能　コマンドを出力するデバイスを変更します。

●書　式　CTTY 〈デバイス〉

付録D

CUSTOM　外部コマンド

●機　能　CONFIG.SYSファイルの作成／更新、またはADDDRVコマンド用定義ファイルの作成／更新を行います。

●書　式　CUSTOM　[〈d:〉]¦[[〈d:〉]〈ADDDRV用定義ファイル名〉]¦/?

●スイッチ　/?　CUSTOMコマンドの使用法を表示します。

DATE　内部コマンド

●機　能　システムが管理する日付の表示と設定を行います。

●書　式　DATE　[〈年〉-〈月〉-〈日〉]

〈年〉-〈月〉-〈日〉は、ハイフン（-）またはスラッシュ（／）で区切りながら入力します。

DEL（ERASE）　内部コマンド

●機　能　指定したファイルを消去します。

●書　式　DEL　〈ファイル名〉

DIR　内部コマンド

●機　能　ディレクトリの内容を表示します。

●書　式　DIR　[〈d:〉][〈パス名〉][〈ファイル名〉][/P][/W]

●スイッチ　/P　1画面ごとに表示停止します。
/W　1行に5つずつ、ファイル名だけを表示します。

DISKCOPY
外部コマンド

●機　能　　ディスク全体のバックアップコピーをしたり、照合を行います。

●書　式　　DISKCOPY　[[〈d:〉][〈d:〉][/V][/Q][/P]]¦/?

●スイッチ
- /V　照合を行う場合に指定します。
- /Q　照合を省略し、高速なコピーを行います。
- /P　DISKCOPYコマンドの処理中、キー入力要求をしません。バッチファイル内でDISKCOPYコマンドを使用する場合に指定します。
- /?　DISKCOPYコマンドの使用法を表示します。

DELDRV
外部コマンド

●機　能　　ADDDRVコマンドで組み込んだ日本語入力機能などを取り外します。

●書　式　　DELDRV

DUMP
外部コマンド

●機　能　　ファイルの内容を16進表現と文字で表示します。

●書　式　　DUMP　[[〈d:〉][〈パス名〉]〈ファイル名〉[〈開始アドレス〉[〈終了アドレス〉]]][/D]¦/?

●スイッチ
- /D　開始アドレス、終了アドレスを10進数で指定するようにします。
- /?　DUMPコマンドの簡単な使用法を表示します。

EXIT
内部コマンド

●機　能　　チャイルドプロセスとして起動されたCOMMAND.COMから、親プロセスにもどります。

●書　式　　EXIT

FC　　外部コマンド

●機　能　　2つのファイルを、行単位またはバイト単位で比較照合します。

●書　式　　FC　[/A/B/C/L/N/T/W/〈N〉][/LB〈N〉]〈ファイル名1〉〈ファイル名2〉

●スイッチ

/A　アスキー比較の結果を短縮形で出力します。違いのある行すべてを表示する代わりに、違いのあるブロックの初めと終わりの行だけを表示します。

/B　ファイルをバイナリ比較します。

/C　テキスト中の大文字・小文字の区別をなくして、比較を行います。

/L　ファイルをアスキーモードで比較します。

/N　アスキー比較において、行番号を表示します。

/T　タブを空白に展開しないようにします。既定値では、タブは8カラムの位置までを空白として扱います。

/W　連続した複数のタブやスペースを圧縮し、1個のスペース（ブランク）として処理します。ただし、行の先頭と最後についているスペースは例外で、もともと無視するようになっています。

/〈N〉　〈N〉は1～9999の数字を指定します。FCは最初の相違以降、〈N〉行だけ連続的に一致していると、そこを一致している部分であると判断します。このスイッチを省略した場合の規定値は2です。

/LB〈N〉　1～9999の数字で、内部ラインバッファを〈N〉行に設定します。内部バッファの既定値は100行です。

FIND　　外部コマンド

●機　能　　ファイルから、指定する文字列を捜すフィルタです。

●書　式　　FIND　[/V¦/C¦/N]〈文字列〉[〈ファイル名〉…]

●スイッチ

/V　指定する文字列を含まないすべての行を表示します。

/C　指定する文字列の含まれる行の数字だけを表示します。

/N　それぞれの行の前に相対的な行番号を表示します。

●例

1.BOOK1.TXTとBOOK2.TXTからこの順序で“Micro Computer”という文字列を含む行を表示する。

```
FIND  "Micro Computer"  BOOK1.TXT  BOOK2.TXT
```

2.ドライブBのディスクにあるファイルで〝DAT〟という文字列を含まないものを表示する。

```
DIR B: ¦ FIND /V "DAT"
```

FORMAT　外部コマンド

●機　能　指定されたドライブのディスクをMS-DOSで使えるように初期化します。

●書　式　FORMAT [[<d:>][/S][/V][/6][/9][/M][/P][/B][/H][/E]]¦/?

●スイッチ

フロッピィディスク用

/S　ディスクの初期化後、システムファイルを転送します。

/V　初期化後、ボリュームラベルをつけます。

/6　640Kバイトタイプのフロッピィディスクを初期化します。

/9　640Kバイトタイプのフロッピィディスクを、1セクタあたり9トラックで初期化します。

/M　1Mバイトタイプフロッピィディスクを初期化します。

/P　FORMATコマンドの実行中に、キー入力要求メッセージを表示しません。

/B　システムファイルをあとから登録できるディスク（ブランクディスク）を作成します。

固定ディスク用

/H　固定ディスクを初期化します。処理に関するきめ細かい指定が可能です。

/E　/Hスイッチを指定した場合よりも、簡単な操作で固定ディスクを初期化します。

/?　FORMATコマンドの使用方法を表示します。

HDUTL　外部コマンド

●機　能　固定ディスクの表面検査やスキップセクタの代替処理をしたり、指定した2つの固定ディスク間で装置全体をコピーします。

●書　式　HDUTL [/?]

●スイッチ　/?　HDUTLコマンドの使用方法を表示します。

付録D

JOIN　外部コマンド

●機　能　　ディスクドライブを指定のディレクトリに結合します。

●書　式　　JOIN　[〈d:〉〈パス名〉][/D]

●スイッチ　　/D　　結合を解除します。

●例

1. 現在結合しているドライブとそのディレクトリを表示する。

   JOIN

2. B:の参照を、以後A:¥DRVBを通じて行うように設定する。

   JOIN　B:　A:¥DRVB

3. ドライブBの結合を解除する。

   JOIN　B:　/D

KEY　外部コマンド

●機　能　　ファンクションキーやカーソル移動キーなどの機能を設定します。

●書　式　　KEY　[[〈d:〉]〈ファイル名〉[/S¦/N]¦/?

●スイッチ

/S　　CTRL＋ファンクションキーの機能を有効にします。
/N　　CTRL＋ファンクションキーの機能を無効にします。
/?　　KEYコマンドの使用方法を表示します。

LABEL　外部コマンド

●機　能　　ディスクのボリュームラベルを作成、変更または削除します。

●書　式　　LABEL　[〈d:〉][〈ラベル名〉]

MD（MKDIR） 内部コマンド

●機　　能　　新しいサブディレクトリを作成します。

●書　　式　　MKDIR　[〈d:〉]〈パス名〉

MENU 外部コマンド

●機　　能　　メニュー形式でコマンドを実行できるMENUコマンドを起動します。

●書　　式　　MENU　[〈メニューファイル名〉][/L]

●スイッチ　　/L　　以後の操作に対して学習機能が働き、頻繁に使用するメニュー項目をメニューファイルの先頭に移します。

MORE 外部コマンド

●機　　能　　一度に一画面ずつ表示を行うフィルタです。なにかキーを押すと次の1画面の表示を行います。

●書　　式　　MORE

●例

1. MYFILES.TXTファイルを1画面ずつ表示する。

   MORE　<　MYFILES.TXT

2. TYPEコマンドの出力を、1画面ずつ止めながら表示する。

   TYPE　MYFILES.TXT　|　MORE

付録D

PATH　内部コマンド

●機　能　カレントディレクトリ以外に、外部コマンドを捜すディレクトリを設定します。セミコロンで区切って、複数のパスを設定することができます。

●書　式　PATH　[;][[〈d:〉]〈パス名〉[;[〈d:〉]〈パス名〉…]]

●例　３つのディレクトリ（Aドライブのルートディレクトリと￥BINディレクトリ、Bドライブのルートディレクトリ）で外部コマンドを捜すように設定する。

```
PATH　A:¥;¥BIN;B:¥
```

PRINT　外部コマンド

●機　能　他のMS-DOSコマンドを実行している間にファイルを印字します。

●書　式　PRINT　[[〈ファイル名〉][/T][/C][/P][/R][/D:][/B:][/U:][/M:][/S:][/Q:]]…

●スイッチ

/T　プリント処理をその場で中止します。
/C　取り消しモードに入ります。
/P　プリントモードに入ります。
/R　メモリ中のPRINTコマンドの常駐部分を解放します。
/D:　プリントアウトするデバイスを指定します。
/B:　内部バッファのバイト数を設定します。この値を増加させると、実行速度が上がります。
/U:　プリンタが使用中だった場合のPRINTコマンドの待ち時間を指定します。[注]
/M:　PRINTコマンドの実行時間を指定します。[注]
/S:　フォアグランドのタスクの実行時間を指定します。[注]
/Q:　印刷待ち行列のファイル数を指定します。

（注）　指定時間は、「１/100秒×指定値」の式で計算できます。

PROMPT　外部コマンド

●機　能　MS-DOSのコマンドプロンプトを変更します。ドルマーク（$）と次に示す文字を組み合わせて指定します。

●書　式　PROMPT　[〈プロンプトテキスト〉]

$	"$"記号	l	"〈"記号
t	現在の時刻	b	"¦"記号
d	現在の日付	_	改行
p	カレントディレクトリ名	s	空白
v	バージョン番号	h	バックスペース
n	カレントドライブ	e	エスケープコード（1BH）
g	"〉"記号		

●例　"カレントドライブ名"、"カレントディレクトリ名""〉"記号を組み合わせたプロンプトを表示します。

PROMPT　np$g

RD（RMDIR）　内部コマンド

●機　能　指定したディレクトリを削除します。

●書　式　RMDIR　[〈d:〉]〈パス名〉

RECOVER　外部コマンド

●機　能　障害（スキップセクタ）を含むファイルまたはディスクを修復します。

●書　式　RECOVER　[〈d:〉¦〈ファイル名〉]

付録D

REN（RENAME）　内部コマンド

●機　能　〈ファイル名１〉で指定するファイルの名前を〈ファイル名２〉へ変更します。

●書　式　REN　〈ファイル名１〉〈ファイル名２〉

RENDIR　外部コマンド

●機　能　〈パス名１〉で指定するディレクトリ名を〈パス名２〉で指定するディレクトリ名に変更します。

●書　式　RENDIR　[〈d:〉]〈パス名１〉〈パス名２〉

REPLACE　外部コマンド

●機　能　古いバージョンのファイルを更新（アップデート）します。

●書　式　REPLACE　[〈d:〉][〈ディレクトリ名１〉]〈ファイル名〉[〈d:〉][〈ディレクトリ名２〉][/A][/D][/P][/R][/S][/W]

●スイッチ

/A　〈ディレクトリ名１〉内にあって〈ディレクトリ名２〉内にないファイルを〈ディレクトリ名２〉に追加します。

/D　〈ディレクトリ名１〉内にも〈ディレクトリ名２〉内にもあるファイルのうち、日時が新しいものを〈ディレクトリ名２〉にコピーして置き換えます。/Aスイッチとの併用はできません。

/P　ファイルの置き換えや追加を実行する前に、ユーザーの確認を求めます。

/R　リードオンリ（書き込み禁止）の属性を持つファイルも置き換えます。

/S　指定した名前のファイルが見つかるまで、〈ディレクトリ名２〉中のすべてのサブディレクトリを探します。/Aスイッチとの併用はできません。

/W　なにかキーを押すまで待って、処理を開始します。

RESTORE 外部コマンド

●機　能　BACKUPコマンドで作成されたバックアップファイルを復元します。

●書　式　RESTORE 〈d:〉[〈d:〉[〈パス名〉][/S][/P][/B:〈日付〉][/A:〈日付〉][/E:〈時刻〉][/L:〈時刻〉][/M][/N]

●スイッチ
/S　サブディレクトリも復元します。
/P　ファイルの属性が"隠されたファイル"または"リードオンリのファイル"ならば、それらを復元してよいかどうか尋ねてきます。
/B:　指定した日付以前に変更されたファイルだけを復元します。
/A:　指定した日以以降に変更されたファイルだけを復元します。
/E:　指定した時刻以前に変更されたファイルだけを復元します。
/L:　指定した時刻以降に変更されたファイルだけを復元します。
/M　最後のバックアップ以後に、変更のあったファイルだけを復元します。
/N　復元先のディスクに存在しないファイルだけを復元します。

SET 内部コマンド

●機　能　文字列をMS-DOSの環境に登録したり、登録している文字列を表示します。

●書　式　SET [〈名前〉=[〈文字列〉]]

SHARE 外部コマンド

●機　能　ファイルの共有やロック行います。

●書　式
1. SHARE [/F:〈ファイルスペース〉][/L:〈ロック数〉]
2. SHARE /R

●スイッチ
/F:　共有のファイル名を記録するテーブルの大きさを指定します。〈ファイルスペース〉は、オープンしたファイルのフルパス名+11バイトが必要です（平均パス名は20バイトです）。既定値は2048バイトです。
/L:　〈ロック数〉はロックするファイルの領域を割り当てます。既定値は20です。
/R　メモリ中のSHAREコマンドの常駐部分を解放します。

付録D

SORT　外部コマンド

●機　能　標準入力装置（キーボード）からデータを読み込み、そのデータをソート（並べかえ）して標準出力装置（ディスプレイ）に出力するフィルタです。

●書　式　SORT　[/R][/+n]

●スイッチ
/R　逆順ソート、すなわちZからAまでの順で並べかえを行います。
/+n　n桁目からの文字を並べかえの対象とします。このスイッチを指定しない場合は、1桁目から並べかえの対象とします。

●例
1. UNSORT.TXTの各行を、逆順に並べかえ、ファイルSORT.TXTに書き出します。

```
SORT /R < UNSORT.TXT > SORT.TXT
```

2. ディレクトリ表示の14桁目から並べかえを行い、画面に表示します。

```
DIR ¦ SORT /+14
```

SPEED　外部コマンド

●機　能　標準のRS-232Cインターフェイスに対するパラメータの設定と初期化をします。

●書　式　SPEED　[〈ポート番号〉[〈パラメータ〉]]¦/?

●スイッチ
/?　SPEEDコマンドの使用法を表示します。

●パラメータ
ポート番号：次のいずれかを指定します。
R 0（またはRS232C-0）　標準RS-232Cインターフェイス
R 1（またはRS232C-1）　RS-232Cインターフェイス拡張ポート1
R 2（またはRS232C-2）　RS-232Cインターフェイス拡張ポート1

パラメータ：RS-232Cについて、ボーレート、キャラクタ長、パリティチェック、ストップビット数、Xパラメータを指定できます。設定値は、SWITCHコマンドのパラメータ1と同じです。

SUBST　　外部コマンド

●機　能　　ディレクトリ名を仮想ドライブ名での置き換えと、設定状況の表示をします。

●書　式　　SUBST　[〈d:〉][〈パス名〉][/D]

●スイッチ　　/D　　置き換えを削除します。

●例　　B:¥USR¥FRED¥FORMSを仮想のドライブ"Z"として作成します。以後、パス名を指定する代わりに、ただ"Z:"とするだけで、このディレクトリを参照することができます。

SUBST　Z:　B:¥USR¥FRED¥FORMS

SWITCH　　外部コマンド

●機　能　　メモリスイッチの変更と、設定状況の表示を行います。

●書　式

```
SWITCH  [〈RS232C-0[〈パラメータ1〉]〉]
        [〈PRINTER[〈パラメータ2〉]〉]
        [〈MEMORY[〈パラメータ3〉]〉]
        [〈COLOR[〈パラメータ4〉]〉]
        {[〈BOOT[〈パラメータ5〉]〉]
        [〈NDP1[〈パラメータ6〉]〉]
        ¦[〈NDP2[〈パラメータ7〉]〉]
        ¦[〈NDP[〈パラメータ8〉]〉]}
SWITCH  /?
```

●スイッチ　　/?　　SWITCHコマンドの使用法を表示します。

●パラメータ　　パラメータ1：標準RS-232Cについて、ボーレート、キャラクタ長、パリティチェック、ストップビット数、Xパラメータを指定できます。

ボーレート	通信速度。次のいずれかを指定します。 75、150、300、600、1200、2400、4800、9600
キャラクタ長	B8　転送データは8ビット長とする B7　転送データは7ビット長とする

付録D

パリティチェック	PN	パリティチェック無し
	PE	偶数パリティチェックを行う
	PO	奇数パリティチェックを行う
ストップビット数	S 1	ストップビットを1ビットとする
	S 2	ストップビットを2ビットとする
Xパラメータ	XON	XON／XOFFの制御を行う
	NONE	XON／XOFFの制御を行わない

パラメータ2：プリンタについて、プリンタタイプ、ANK（1バイト）文字と漢字の印字サイズの比率を指定します。

プリンタタイプ	CEN24	24ドット系プリンタ
	CEN16	16ドット系プリンタ
印字サイズ	DN	ANK文字：漢字を1：2とする
	DF	ANK文字：漢字を1：1.5とする

パラメータ3：メインメモリのサイズについて、次のいずれかを指定します。

128K、256K、384K、512K、640K、768K

（注）　768Kを指定できるのは、ハイレゾモード機のみです。

パラメータ4：画面の文字の表示色。次のいずれかを指定します。

WE	白
GN	緑

パラメータ5：システムを起動するドライブについて、次のいずれかを指定します。

STD	順にドライブを検索
1 MBFD	1Mバイトディスクからのみ起動
640KBFD	640Kバイトディスクからのみ起動
HD 1	固定ディスク＃1からのみ起動
HD 2	固定ディスク＃2からのみ起動
SHD	SCSI固定ディスクからのみ起動
OD	光ディスクからのみ起動

パラメータ6、7、8：数値演算プロセッサについて、接続の有無と、クロック周波数を指定します。

接続の有無	Y	接続する
	N	接続しない
クロック周波数	10	10MHzで使用
（NDP 1のみ）	8	8 MHzで使用
	5	5 MHzで使用

（注）　NDP 1は、ノーマルモード、V30対応の数値演算プロセッサ1
　　　NDPは、ハイレゾモード、V30対応の数値演算プロセッサ
　　　NDP 2は、V30以外のCPUに対応の数値データプロセッサ2

SYS

外部コマンド

●機　能　　カレントドライブにあるMS-DOSのシステムファイルを〈d:〉で指定するディスクへコピーします。

●書　式　　SYS 〈d:〉

TIME

外部コマンド

●機　能　　システムが管理する時刻の表示と設定を行います。〈hh〉には時、〈mm〉には分を指定します。

●書　式　　TIME [〈hh〉[:〈mm〉]]

TREE

外部コマンド

●機　能　　指定されたドライブの、各ディレクトリとサブディレクトリのパス名（オプションでその内容も）を表示します。

●書　式　　TREE [〈d:〉][/F]

●スイッチ　　/F　　各ディレクトリ中のファイル名も表示します。

TYPE

内部コマンド

●機　能　　ファイルの内容を画面に表示します。

●書　式　　TYPE 〈ファイル名〉

VER
内部コマンド

●機　能　　MS-DOSのバージョン番号を表示します。

●書　式　　VER

VERIFY
内部コマンド

●機　能　　ディスクへの書き込み直後に行うベリファイ（検査）を行うかどうかを設定します。

●書　式　　VERIFY　[ON¦OFF]

●スイッチ　　ON　ベリファイを行います。
OFF　ベリファイを行いません。

VOL
内部コマンド

●機　能　　ディスクのボリュームラベルを表示します。

●書　式　　VOL　[〈d:〉]

XCOPY　外部コマンド

●機　能　ファイルとディレクトリを、下位のレベルのディレクトリがある場合はそれを含めてコピーします。

●書　式　XCOPY　[〈d:〉][〈パス名1〉]〈ファイル名1〉[〈d:〉][〈パス名2〉][〈ファイル名2〉][/A][/D:〈日付〉][/E][/M][/P][/S][/V][/W]

●スイッチ

/A	アーカイブ属性がついているファイルをコピー元としてコピーします。
/D:	指定した日付以降に修正されたファイルをコピー元にします。
/E	サブディレクトリを、空きがあってもコピーします。/Sスイッチとともに指定します。
/M	/Aスイッチと同様、アーカイブ属性の付いたファイルだけをコピーし、その上でアーカイブ属性を解除します。
/P	コピーするかどうか、ユーザーの確認を求めながら処理します。
/S	指定したディレクトリの内容と、空でないサブディレクトリの内容もコピーします。
/V	ファイルごとに、正確にコピーされているかどうか確認（ベリファイ）します。
/W	なにかキーを押すまで待って、処理を開始します。

D.5 バッチ処理コマンド

単独で使用することは非常に少ない、主にバッチ処理（ファイル）中で使用するコマンドです。

ECHO

内部コマンド

●機　能　バッチ処理の実行中に、現在実行中のコマンドを表示するかどうかを設定します。

●書　式　ECHO　[ON¦OFF〈メッセージ〉]

●スイッチ
ON　実行中のコマンド名を表示します。
OFF　コマンド名を表示しません。
〈メッセージ〉　ECHO ONのときに、コマンド名の代わりに、〈メッセージ〉を表示します。

FOR

内部コマンド

●機　能　1行の中で、処理を繰り返すコマンドです。

●書　式
FOR　%%〈C〉　IN　〈項目セット〉　DO　〈コマンド〉　……バッチ処理用
FOR　%〈C〉　IN　〈項目セット〉　DO　〈コマンド〉　……逐次処理用

〈c〉　〈コマンド〉の中で使用する、1文字のアルファベットです。
〈項目セット〉　〈c〉で指定した文字の中に代入する項目です。
〈コマンド〉　繰り返して実行したいコマンドです。

●例　拡張子が".TXT"、".BAK"のファイルを、ドライブAからドライブBへコピーします。〈C〉のアルファベットには"A"を使用します。

```
FOR　%%A　IN（TXT BAK）DO　COPY　A:*.%%A　B:
```

GOTO　　内部コマンド

●機　能　　バッチ処理の流れを、バッチファイル中の〈ラベル〉の行へ移します。

●書　式　　GOTO　〈ラベル〉

〈ラベル〉はバッチファイル中のコロン（:）で始まる行で定義されます。コロンに続く8文字がラベルとして識別されます。

●例　　"REM looping..."表示を続けます。

```
:foo
REM  looping...
GOTO  foo
```

IF　　内部コマンド

●機　能　　条件判断に応じてバッチ処理を行います。

●書　式　　IF　[NOT]〈条件〉〈コマンド〉

NOT　条件が偽のときコマンドを実行します。

〈条件〉は、次のいずれかで指定します。

ERRORLEVEL〈数値〉	直前に実行したコマンドの終了コードが〈数値〉以上のとき真
〈文字列1〉==〈文字列2〉	2つの文字列が等しければ真
EXIST〈ファイル名〉	〈ファイル名〉が存在すれば真

PAUSE　　内部コマンド

●機　能　　バッチファイルの実行を一時的に停止します。

●書　式　　PAUSE　[〈コメント〉]

付録D

REM　　内部コマンド

●機　　能　　バッチファイルを実行中に、バッチファイル中のREMコマンドと同じ行に書いたメッセージを表示します。

●書　　式　　REM　[〈コメント〉]

SHIFT　　内部コマンド

●機　　能　　バッチファイル処理で、パラメータを10以上に置き換えることができます。

●書　　式　　SHIFT

D.6　CONFIG.SYSコマンドの一覧

MS-DOSのシステム構築ファイルをCONFIG.SYSと呼びます。このファイルは、一定のコマンドが記述されているテキストファイルです。MS-DOSは、起動時にこのファイルを調べ、機能の設定や登録を行います。

CONFIG.SYSファイルの例

```
FILES=10
BUFFERS=10
BREAK=ON
DEVICE=NECAIK1.DRV
DEVICE=NECAIK2.DRV
SHELL=A:¥COMMAND.COM A:¥ /P/E:256
```

BREAK

●機　　能　　CTRL + C のチェックを行うかどうかを設定します。

●書　　式　　BREAK=[ON¦OFF]

ON　　CTRL + C のチェックを行います。
OFF　　CTRL + C のチェックを行いません。

BUFFERS

●機　能　　ディスクバッファのメモリ領域を指定します。

●書　式　　BUFFERS＝〈x〉

設定できる範囲は、2～99、既定値は20です。値を大きくすると、ディスクのアクセスが速くなります。

DEVICE

●機　能　　指定したデバイスドライバファイルをシステムに登録します。

●書　式　　DEVICE＝[〈d:〉][〈パス名〉]〈ファイル名〉

FCBS

●機　能　　同時にオープンできるファイル数を指定します。

●書　式　　FCBS＝〈x〉〈y〉

〈x〉　同時にオープンできるファイル数を指定します。設定できる範囲は1～255、既定値は4です。

〈y〉　最初にオープンした〈y〉個のファイルのクローズを禁止します。設定できる範囲は0～255、既定値は0です。

FILES

●機　能　　2FH～60Hのファンクションコールでオープンされるファイルの数を指定します。設定できる範囲は8～255、既定値は8です。

●書　式　　FILES＝〈x〉

LASTDRIVE

●機　　能　　仮想ドライブを含めた、アクセスするドライブの最大数を指定します。

●書　　式　　LASTDRIVE＝〈x〉

SHELL

●機　　能　　パス名で指定したファイルをコマンドプロセッサとします。

●書　　式　　SHELL＝[〈d:〉][〈パス名〉]〈ファイル名〉

D.7 コントロールキャラクタ機能

CTRL キーを押しながらアルファベットキーも押すことで、本体の動作を変更する機能です。

コントロールキャラクタ	機　能
CTRL + C	実行中のコマンドを中断する。
CTRL + H	コマンド行から最後の1文字を除去する。
CTRL + J	スクリーンの上だけで改行する。
CTRL + P	プリンタへのエコー出力の開始／終了。
CTRL + N	CTRL + P と同じ。
CTRL + S	ディスプレイへの出力を中断する（任意のキーを押すと再開する）。
CTRL + X	コマンド行を空にして、スクリーン上で改行し、￥記号を表示する。テンプレートに影響は与えない。

D.8 テンプレート機能一覧

最後に入力したコマンドを記憶する機能で、ミスタイプをしたときや、似たようなコマンドを連続して入力するときに使用します。

機　能	使用キー
1文字までのコピー	f･1
指定文字までのコピー	f･2
テンプレート内のすべての文字をコピー	f･3
1文字をスキップ（コピーしない）	f･4
指定文字までをスキップ（コピーしない）	f･5
入力の取り消し	f･6
テンプレート内への書き込み	f･7
文字の挿入	INS、f･8
文字の置き換え	f･9
CTRL + Z の挿入	f･10

付録D

索　引

ヤ

ラ

ワ